

陽だまりシリーズ:小日向未来<lt;帰還>gt;

インレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

並行世界から帰ってきた小日向未来が、親友の元へと向かうお話。
小日向未来<放浪>の続編です。<放浪>も読んでいただければ幸いです。

88 / <https://syosetu.org/novel/1383>

16 / <https://syosetu.org/novel/1734>

目次

chapter 1.	フォークランド諸島	1
chapter 2.	これからどうする	5
chapter 3.	改造魔人	11
chapter 4.	弱虫	19
chapter 5.	アマゾン奥地の銀世界	30
chapter 6.	ゴーストタウン紀行	42
chapter 7.	毒霧	52
chapter 8.	中毒	61
chapter 9.	デュラハン	75
chapter 10.	もう限界	91
chapter 11.	希望	100
chapter 12.	ベルリン	109
chapter 13.	教会での死闘	117
chapter 14.	一難去って	126
chapter 15.	ウクライナ奇譚	133
chapter 16.	閑話	156
chapter 17.	龍	170
chapter 18.	頭が9つ	179

chapter 1. フォークランド諸島

ゲートを通過して辿り着いた先は、抉れた月が空に浮かんだ何処かの草原だった。

「時間帯は夜みたいだ……。何処の国だろう」

やけに冷え込む。時計を見ると2018年6月20日午前1時54分と書いてある。それで冬みたいに寒いってことは、ここは多分、南半球だ。もしそうだとしたら冬みたいどころか、冬そのものだ。

コートを取り出して羽織り、寒さを凌ぐ。それからふたたびサイクロンに跨り、草原を後にした。

「人家はあるにはあるけど……」

街の中にある建物は、全て壊れていた。しかし見たところ地震で崩れたわけでも、ガタがきて崩れたわけでもないようだ。なぜならあちこちに焦げや溶かされた痕が見られるからだ。どうみても人為的に壊したとしか思えない。

「普通の道具や兵器でこんなことが出来るはずがない……」

じゃあ聖遺物絡みか、と言われても腑に落ちない。ピンポイントで壊れることの説明がつかないから。大抵、広範囲でおかしなことになるし。

そして一番、気になっているのが、人が一人もいないことだ。人の気配が感じられないんだ。

「この理由はわかった。見てきた建物のあちこちに血の痕があるものの」

つまり殺しだ。でも誰が何のために。

考えていると遠くの方から誰かがこちらに歩いて来るのが聞こえた。数は2人くらい。

急いで建物の横にあるゴミ箱の陰に隠れた。直ぐに逃げ出せるようにするために。

「こんな島、もう誰も来ないよ」

「本当、首領も何を考えているのやら。あの技師なんか逃がしたところでどうってことないのに」

物陰から見ていると歩いてきたのは、2人の私だった。恐らく、前に鹿児島島のドライブインで私を襲った彼奴と同じ奴。悪夢だ。この世界は、あの首領に攻撃されたらしい。

「折角、帰ってきたのに……」

しかし動揺している暇なんてない。急いでギアを装着して、2人を追いかけた。

2人が別々の方向に移動したのを確認して、私は近くにいた方にショルダータツクルを叩き込んだ。

転倒して起き上がろうとしたところで背中を蹴り飛ばし、上にのしかかって起き上がれないようにする。

「静かにしろ」

アームドギアを取り出して頭に10回ほど叩きつけ、動かなくなつたのを確認して、死体を仰向けの状態にさせる。本物の私と違いがあるか確認する為だ。

「右胸にハーケンクロイツが描いてある。どうやって誤魔化そう……」

戦闘員みたいに、簡単にすり替わる事ができる訳ではなさそう。どうする？

「サインペンで無理矢理描いてみたけど……」

ところどころ歪んでいるから怪しまれそう。まあ、それでも構わない。情報だけ聞き出せば、もう1人には用はないから。

「取り敢えず、彼奴がどこに行つたのか見ておこう」

バイザーで探るとまだそんなに離れていないことがわかった。直ぐに追いつけそうだ。

「へえ……、ここでエルフナインちゃんと二対一で鬼ごっこしていると。お話聞かせてくれてありがとうね」

左胸に腕を突き込み、絶命させる。戦闘員相手には散々やったけど、自分と同じ顔の人間にこれをするのは、やっぱり気がひける。

「まさかS・O・N・G. が壊滅していたなんて……。しかも生き残りは、どうもエルフナインちゃんだけみたいだし」

これからどうしよう。

「先ずはエルフナインちゃんを見つけないと。あの子だけだと危ないから」

さつき聞き出したけど、ここは東フォークランド島といって、大昔のいざこざの時に作られた地雷原がある島らしい。エルフナインちゃんがわざわざ地雷原に飛び込むような馬鹿な真似はしなれないと思うけど、何かの拍子に入り込んでしまっているかもしれないから急ぐに越したことはない。

サイクロンであちこち走っているうちに、破けたユニオンジャック旗が掲げられた場所に出た。

建て看板を見ると、イギリス空軍マウント・プレゼザント基地と書いてある。確か普通の空港にもなっている場所だ。

基地の中に入ると地面のあちこちが凸凹していた。おまけにそこら中に飛行機の残骸が転がっている。手酷く荒らされたようだ。

「軍事基地だから狙われたんだ……」

あちこち見回っていると、二階から上が吹き飛んでいる建物の中で、窓越しに何か動いているのが見えた。

「あれは……」

建物の中に入り、懐中電灯を照らすと其処には久々に会うあの子がいた。

「久しぶり、エルフナインちゃん」

ビクツと震えてこちらを振り向いたエルフナインちゃんは、私を見て警戒していた。無理もない。私と同じ顔の二人組に追いかけて回されてきたのだから。

「み、未来さんの偽物？ あれ、二人連れじゃない……」

「二人連れてこいつらのこと？」

サイクロンで引つ張ってきた二人組を、エルフナインちゃんのところに放り投げる。

「大丈夫だよ、其奴ら死んでるから」

「えっ、じゃあ……貴女は……」

「信じてもらえるかわからないけど、本物の小日向未来だよ。ついさっきこの世界に帰ってきたの……」

chapter 2. これからどうする

「S・O・N・G.の皆は、本当に海の底に沈んだの……」

「はい。僕は運良く脱出できて、この島に流れ着く事ができました……」

エルフナインちゃんから何でこの島にいるのか、あとS・O・N・G.の皆がどうなったのかを聞いた。さっき私の偽物を締め上げて、ある程度の情報は引き出したけど、それだけじゃ不安だから。

それで聞いてみたところ、状況は思ったよりも酷かった。

まずS・O・N・G.がエルフナインちゃん以外、生き残りがいないのは確からしい。私の偽物がS・O・N・G.に入り込んでいて、気付いた時には職員は殆ど偽物にすり替えられていたそうだ。

それと響がS・O・N・G.壊滅の数日前から行方不明になっているらしい。端末に付けてあるGPSも壊れているのか反応せず、探しようがなかったとか。

「エルフナインちゃん、確か響は居なくなるまで私と一緒にいたんだよね」

「はい」

「其奴に拐われたんだ……。そして生死不明……」

最悪の事態も想定しておかなければいけなくなった。もしかしたら響が土に還っているかもしれないなんて。帰ってきてこれか。いや、元はと言えば……。

「私が興味本位でショッカーの後をつけたから……」

あんなことしなければ、私の偽物が出回る事もS・O・N・G.の皆が居なくなることも、響がどこに行ったかわからなくなることもなかったのに。

「ごめんなさい、エルフナインちゃん……。私が迂闊なことをしたばかりに……」

自分の迂闊さからこんなことになってしまったことに、自責の念から涙を流して謝った。

いつそのこと、死んでしまいたい。この身体じゃ、迷惑かかるだけ

だからそれもできないけど。

「お、落ち着いてください。いきなり頭を下げられても、何のことだか分かりません」

「そ、それもそうだね……」

ただ泣いたってエルフナインちゃんには、訳がわからないだろうし。

「それでその組織が未来さんを捕まえて……」

「頼みもしないのにサイボーグにされて、細胞と神獣鏡のデータを盗まれたらしくて、偽物が作られたの……。本当にごめんなさい。あんな連中の後をつけなければ良かった……」

これまでの経緯を説明して改めて頭を下げる。

「事情はよく分かりました。頭をあげてください。確かに後をつけたのは不味かったですけど、お話を聞く限り、ショッカーは元々、貴女を狙っていたようですから、未来さんだけに責任があるとは思えませんよ」

「そういつてもらえると嬉しいよ」

「それよりも僕の方もごめんなさい。並行世界を3年近く彷徨っていた上に、そこまで過酷な目に遭っていたなんて……」

「それこそ気にしないで。あの場合、他の方法なんてなかったし、私自身の被害は自己責任の部分も多いから。それよりも……。これから2人でどうしようか。S・O・N・G.の皆は行方不明の響以外もういないし、島の外は正体不明の怪物のせいでめちゃくちゃ……」

エルフナインちゃんから教えてもらったんだけど、少し前に、聖遺物の研究機関とパヴァリアの残党やそれとは無関係な錬金術師を狙ったテロが続発していたらしい。ただ犯人の見当が誰にもつかないうちに、パツタリとやんだそうだ。

そして私が帰ってくる3日前に、航空戦力のある施設が一斉攻撃を受けたんだ。そしてその犯人が私の偽物だった。一つの施設につき、

90人くらい襲いかかってきたらしい。

そいつらが散々踏み荒らした後、明らかに人間ではない怪物が私の偽物の第二波とともにあちこちを襲撃して、世界の主要な軍事拠点は軒並み壊滅。救援要請を受けて、対処に向かう途中だったS・O・N・G・も大西洋で息の根を止められた。

「世界中が怪物と私の偽物に踏み荒らされているのは間違いない。蹴散らさないといけないけど、どこから手をつけたものか……。それに響の行方も気になるし……」

問題はそこだ。南大西洋の離れ小島から脱出したところで、怪物退治をしないと響を探すどころではなくなるのは、火を見るよりも明らかだ……。でも何処から手を付けたものか。

「未来さん、襲撃された場所は世界各地にあります。被害状況がどこも同じかどうかはわかりません。場合によっては、荒らしたまま撤収している可能性もあります。まずは其処から調べてみましょう。組織の規模が大きくても、地球全体を占領するのは無理がありますから」

袋小路に陥っていた私にエルフナインちゃんが助け船を出してくれた。考えてみれば、シヨツカーは必要がない拠点をあっさりと放棄していたし、この島にも2人しか兵隊がいなかった。そんなに重要じゃない所には、大した兵力を置いていない可能性が高い。

「要するに、この島みたいに無人になっているような所は放っておくってことね」

「そうです。それに敵の拠点の周辺地域は、戦力が厚くなっている筈ですから」

「なるほど。でもそれをどうやって調べるの？」

「衛星写真です。ただ敵が衛星を破壊していなければできてる話ですから、上手くいくかどうかは申し訳ないですが分かりません」

「ああ……。そのまま残してるかどうかはわからないものね……」

でも人工衛星ともなるとないと困る物が多いから、多分そのままの可能性の方が高い。流用した方がどう考えても安上がりだから。

「とりあえずパソコンのある部屋を探しましょう。もしかしたら壊れ

ずに済んでいるものがあるかもしれないから」

「駄目ですね。自家発電機も壊されているようでは……」

盲点だった。予備のバッテリーまでも破壊されているなんて思わなかった。

「どうしよう……」

私の胸を開けて、中の原子炉を電源代わりに……なんて考えたけど、危ないからそんなことできるはずがない。もし扱い方を間違えて爆発でもさせたら洒落にならない。

「出発の時に携帯バッテリーは貰ったけど、数に限りがあるし……、そうだ！」

「どうするんですか」

「何とかなるかもしれない！ ダメ元で頼んでみる！」

急いで端末でプラネテューヌへ連絡を入れる。出発前に動作チェックで親父さんとも通話できたから、異次元のプラネテューヌでも通話ができる筈。

30秒後、聴きやすい声がスピーカーから聞こえた。無事、繋がったようだ。

「もしもし、イストワールさん。未来です。緊急事態発生です」

「何があったんですか」

「以前、プラネテューヌに私が来た時に話した組織が、私の世界を制圧しています。私が所属していた組織は、2人を除いて全滅。そのうち1人は、行方不明です」

「何ですって！ 状況はかなり悪いようですね。こちらに退避しますか？」

「ちよつと待つてください。同行者と相談するので」

流石に直ぐに退避するかどうかを私の一存で決めるのは不味い。エルフナインちゃんの意見を聞かないと。

「エルフナインちゃん、どうする？ 一度、この世界から離脱する？ 私は離脱してもいいと思うんだけど。流石にこのままだと形勢不利だから」

「本来ならそうした方が良いでしょうけど、放置しておく余裕もありませんし、次にこの島に降り立った時に、ここに戦力が集まっている可能性がありますからやめた方がいいと思います」

それもそうか。確かに私が帰ってきたことは、遅かれ早かれ気付かれるだろうし、万全の状態に戻ってきたところでそこを叩かれたら意味ないし。最低でも響を見つけてからでないと、逃げ出しても意味がなさそうだ。

「分かった。ここはエルフナインちゃんの意見に従うよ」

電話を待機状態から元に戻して、通話を再開する。

「お待たせしました。今すぐに退避することはしません」

「では代わりに必要な物資をお送りします。他に何か必要なことはありますか？」

「そうですね……。ダメ元でお願いしますが、そちらからこの世界の様子を探ることってできますか？」

「具体的には……？」

「衛星写真や監視カメラなどで、此方の世界の様子を見ると感じます」

「監視カメラは無理ですが、衛星写真なら可能ですよ」

「本当ですか。助かります。この島から出ようにも状況が探れず困っていたんです」

「こちらの時間で3日ほどかかりますが、それでも大丈夫ですか？」

「それくらいなら大丈夫です」

この後も必要な物資の供給についての取り決めなどをして通話を終えた。

「取り敢えず、情報と物資に関しては、外部からの支援は受けられそうだよ」

「それは良かったです。焦土作戦を取られる可能性もありますから」
「ただ少し時間がかかるから、直ぐにこの島を出るのは無理みたいだ」
「ではそれまでにこちらでも使えそうなものを探しましょう。といっても、この島では大したものはないようですが……」

太陽が出てきたところで、サイクロンを動かして軍事基地から離れる。確かに何にもない。あるのは原っぱと穴ぼこだけ。オフロード車だから問題ないけど。

「それにしても未来さん。いつの間にバイクに乗るようになったんですか」

「記憶喪失になった時に免許取ったんだ。筋がいいってことで、レースにも何度か出させてもらえてね、最後の方では2位か3位くらいまで食い込めるようになったんだ」

「凄いですね……。ただ空を飛べる神獣鏡を装着して、何でバイクに乗っているのかは疑問がありますが……」

「それは考えないでちょうだい」

chapter 3. 改造魔人

「白神山地にある遺跡に、異形の集団ダーク・エンジェルズが集まっていた。」

「これで皆揃いましたな。それでは乾杯」

白服の男の音頭に合わせて、ワイングラスの腹がぶつけられた。

「地球全域の征服も完了したことだ。後は我々の支配領域の分割でも考えようではないか。ゼネラル、貴方の意見をいただきたい」

ワインを飲み干した大男が、ゼネラルと呼ばれた白服の男に呼び掛ける。

彼はワイングラスをテーブルに置き、直ぐに口を開いた。

「確かに参謀の仰る通り、制圧には成功した。しかしながらまだ我々に抵抗しうる者は残っている」

「ほう、それは」

集まっていた者が、ゼネラルを注目した。

「小日向未来。神獣鏡の使い手だ……」

その答えを聞いた一座は、皆笑い出した。

「誰かと思えば、あの改造人間か」

「恐るるに足らん。墓の副葬品ごときに何ができる」

ひとしきり笑った後に、誰が討伐しに行くかが話し合われた。

「俺に任せてもらおう」

胸を叩いて名乗り出たのは偉丈夫の参謀。しかし直ぐに横槍が入った。

「小日向未来を討伐した者は、現状、功績がどんぐりの背比べである魔人達のリーダーになれる」というルールをゼネラルが出したためだ。この条件ならば我も我もと名乗りをあげるのは、当たり前前だ。

結局、最初に名乗り出た参謀が討伐を担当することになり、会議はお開きになった。

不満気に遺跡を出て行く魔人達を見て、1人残ったゼネラルはほくそ笑んでいた。

「存分に潰しあえ」と……。

帰還から3日後、イストワールさんからの情報と物資が届いた。

「現状、まとまった戦力が駐屯しているのは、え……日本だけ？ 他はなし。あれ、意外と敵さんは展開していない？」

「どういうこと？ 日本以外は荒らすだけ荒らして、後はもうほったらかし？ 何考えてるんだ、一体……。」

「先ずは近場の南アメリカ大陸を目指しましょう。此処よりは物資もある筈です」

「うん。敵はいないようだしね」

「それはどうかな」

声がして後ろを振り返ると、いつぞやの白服の男が立っていた。咄嗟にエルフナインちゃんを庇う。味方じゃないらしいから。

「確かに大した戦力は置いていないさ。今はな」

「今は？」

「一つ忠告しておく。命が惜しければこの島から出るな」

「そう言われてもね……。響を探さないといけないし。」

「忠告どうも。でもそれは無理。響を探さないといけないから」

「そうか……。ならば好きにするがいい」

白服はくるりと背を向けて、そのまま何処かへ行ってしまった。

「何しに来たんだろう……。」

彼が敵なのか味方なのか本当によく分からない。鹿児島で私を暴走させたかと思えば、命令とはいえ早く帰れるようにゲームギョウ界へと連れて行ってくれたこともあった。

でもあんな格好の知り合いはいない。誰だ？

「未来さん、お知り合いですか？」

「いや、向こうは私をよく知っているそうだけど、誰だかわからないんだ。どうも敵らしくて私を暴走させた事もあるけど、手助けした事もあるからよく分からなくて……。」

エルフナインちゃんの質問にも、歯切れの悪い答えしか返せない。

本当に覚えがないから仕方ないけど。

それよりも島を出るなっつてどういうこと？ 恐ろしい奴でも来るわけ？

この疑問の答えは、大陸で明らかになった。

港に繫留されていたモーターボートをマニュアル片手に動かして、大陸のどこかの町まで辿り着いた。それはいいんだけど……。

「えーつと、此処どこ？」

置いてあるのは、スペイン語の標識や看板だから此処がどこだかわからない。アルゼンチン辺りだと思っただけ……。困ったな、英語かドイツ語の標識さえあれば……。

「リオ・ガジエゴスというらしいですよ」

あたふたしているとエルフナインちゃんが読み上げてくれた。有り難いけど、ちよつと恥ずかしい。あの時、無理してでも一文字さんにくつついていけばよかった。

「地図によると……、かなり南の方のようですね」

「南か……、此処から北アメリカの方まで行くのか……。オートバイだとかなりかかりそう」

ガス欠とかの心配はないけど、舗装されている道路だけじゃないだろうし、サイクロンの最高速度にエルフナインちゃんが耐え切れるはずが無いからかなり時間はかかると見ていい。でも現状では他に移動手段はない。

「エルフナインちゃん、何日かかるかわからないけど、北を目指そうか……」

「はい……。それよりも未来さん。妙だと思いませんか？」

「何が？」

「ここ、とても暑いんですよ。冬なのに」

「言われてみれば……」

確かにこの街、妙に暑いんだよ。海の上なんか寒かったのに。上着

を脱いでもまだ暑い。いつそ全部脱ぎたくなる。

「この街だけが暑いなんてことある？」

「ありえませんが」

「ここから離れてどこかで涼もうよ」

「そうですね」

サイクロンを走らせて街から離れようとした時だった。

道路に偽物の私が5体飛び出してきたんだ。ファイアパターンが入った真っ赤なものが。

「暑苦しい見た目だ……。エルフナインちゃん、下がっててね……。変身……」

ギアを装着しながら、早速1人目に食らいつき、顔に左手でパンチを叩き込む。

ぶっ飛ばしたところで、すぐに首にコードを巻きつけ、斜め後ろから飛びかかってきた2人目掛けて投げつける。

3人組を近くの建物のショーウィンドウに叩きつけてから、アームドギアできついのを1発浴びせてから残り2人を探す。するとエルフナインちゃんが捕まりそうになっていた。

「ちよつとグロテスクだけど……。エルフナインちゃん伏せて！」

ミラーデバイスを取り出して、刃を展開させ手裏剣のように投げつける。

しかし伏せてほしくない2人まで伏せてしまい、空振りに終わった。だが問題ない。アームドギアを二挺取り出して、2人にビームをお見舞いしたから。

残り2人が停止したのを見て、エルフナインちゃんに駆け寄った。

「大丈夫だった？」

「はい、なんとか……。未来さん、いつのまに格闘戦が出来るようになったんですか……」

「改造人間相手に戦ううちに覚えたんだよ。そんなことより、早く離

れよう。ここも安全じゃない」

サイクロンのエンジンを吹かせて、改めて街の外へ急いだ。

街から離れても暑さは変わらなかった。異常気象か？

「暑い……」

「何だか、街から離れるほど暑さが増してませんか……」

「そんな気がするよ。タンクトップに着替えたのに……、これ以上暑くなったらどうしようもないよ。それにしても、何で曇り空でこんなに暑いのに」

「確かにそうですね。それに熱もどちらかといえば、近くにあるような感じなんです。ストーブのように」

「じゃあ私達は焚き火に近寄る羽虫みたいなもの？ 此の先に大きなストーブみたいなのがあると」

「もしかしたらそうではないかと」

「まいったな……」

ボリビアの方に抜ける道は、此処が最短ルートなのに。

「仕方ない。遠回りになるけど、パラグアイに抜ける道に行こう」

「その必要はない！」

2枚目の張りのある声とともに、鉄のロボットのような物が出てきた。誰だ。

「お前が小日向未来か？」

「そうだけど、貴方は？」

「首領直属の精鋭部隊ダーク・エンジェルスの1人、参謀だ」

随分とファンシーな名前の組織だ。ダーク・エンジェルスって。子供向けアニメにありそう。

「その参謀さんが、私に何の用？」

「お前よりもお前の首に用がある」

「賞金首ってこと？」

「その通り！」

答えるや否や、参謀は肩に背負っていた鉄球を投げつけてきた。急いで飛び退くと、私の立っていたところはアスファルトが盛り上がっただけでなく、溶けていた。

空中でギアを装着し、相手の正体をバイザーで探る。どう考えてもただの人間じゃない。聖遺物を使っている人間かあるいは……。

「解析完了……、ブリーシנגガメン。聖遺物……」
ネフィリムやゴライアスのように聖遺物そのものが動いてるみたいだ。

インカムマイクを通して、エルフナインちゃんに情報を伝えて、参謀に向き直る。

「聖遺物なら神獣鏡の力でどうにか出来るはずだ……」

こちらに目掛けて飛んできた鉄球を躲して、懐に飛び込みシヨルダータツクルを食らわせる。すると肩にジユツと嫌な音と嫌な臭いがした。焦げている。

「未来さん、ブリーシングガメンは炎を操る聖遺物です！ 無闇に近寄らないで！」

なるほど、だからこうなったのか。もっと早く知りたかったが、そうそうそんなことは言ってられない。

アームドギアを取り出して、数発軽いのを撃ちながら距離を取る。しかしこの程度じゃ、倒れてくれなかった。

「分かってはいたけど、大技を叩き込まないと駄目か……」

展開したアームドギアに光を集め、参謀目掛けて発射する。普通に撃つよりも威力は強いからどうにかなるはず。なのに……、全く堪えている気配がない。

「これでも駄目だなんて……」

嫌な予感がして、エルフナインちゃんにサイクロンに乗って安全な場所まで退避するように指示した。運転はこちらの自動操縦で何とかすると言つて。

その後、あれこれ試してみたけど、何一つ通用しなかった。

おまけにミラーデバイスは熱で溶けてしまうし、アームドギアも鉄球が直撃してヒビが入ってしまった。

「神獣鏡の光程度では、俺には傷一つつけられん！」

「そ、そんな……」

聖遺物相手には滅法強い神獣鏡が効かないなんて……、打つ手なしじゃない。

「今度はこちらから行くぞ。覚悟しろ！」

火の玉になった鉄球を振り回して、こちらに突進してきた参謀。アームドギアを脚に投擲してひっくり返そうとしたけど、蹴り壊されてしまった。

半ば自棄で突進して、右腕のアームカノンを胸元に突きつけ発射するも、案の定全くダメーシが入らない。

「せめてこれくらいは効いて欲しかったなあ……」

乾いた笑いが漏れた後、鉄球を手放した参謀に掴み上げられ、地面に頭から叩きつけられた。

気絶する間も無く、ジャイアントスイングされて転がっていた鉄球に背中からぶつかった。

「あがあ……」

焼け焦げる肉の匂いがして堪らない。

その臭いと痛みに顔を歪めながら立ち上がるも、もう勝ち目がないのは火を見るよりも明らかだった。

もう駄目だ……。両腕は壊されて、両脚も潰された。抵抗できない。

頭を掴まれて、まな板の上の鯉のように何もできずにいる。

「このくらいすれば、問題なからう。では連れて帰ることにするか」

「私を……どうする気……」

「ゼネラルに引き渡すだけだ。後は知らん」

ゼネラルとかいうのに引き渡されてからどうなるのかは、大方の予想は付いている。殺されるか、再改造されて操り人形にされるかの二つに一つだ。可能性としては命がなくなる方が高い。

死にたくないよお……。まだ響に一度も会えてないのに。

「では行くぞ」

「あ……、あ…………」

自分の行く末を予想して、身体が震え出した。今までに死にかけてことなんか何度もあるのに、今度ばかりはどうしようもないと自覚したからだろうか。怖くて涙まで出てきた。

「こ、殺さないでください……」

怖さのあまり、情けなく命乞いまでしてしまった。あの人達に顔向けできない……。

そのまま私は連れさらわれ、参謀の捕虜になってしまった。

chapter 4. 弱虫

鉄格子付きのトラックに乗せられ、峠道を移動している。このままチリに出て、太平洋経由で日本に連れ帰るつもりらしい。

逃げ出そうにも、枷で体を固定されていて、周りを参謀と私のコピーが陣取ってしっかり見張っているからとてもじゃないけど無理だ。それに手足の怪我が酷くて碌に動くこともできないし、そもそも逃げ出したらもつと恐ろしい目に遭わされそうだから逃げる気も起さない。

いつそのこと舌を噛み切ろうかとも考えたけど、あれはただ痛いだけで直ぐに死ぬ事はないらしいからやめた。

そういえばエルフナインちゃんは無事に逃げられたのだろうか。サイクロンは街に引き返すように操作したから、上手くいけばボートに乗って島へと逃げ込めるはずだ。それにイストワールさんには、いざという時のあの子の回収も頼んでいる。

私はもう駄目だけど、せめてあの子だけは生き延びてほしい。この世界の最後の生き残りとして。

峠の下りに入った所でおかしなことになった。急にトラックが滑り出したんだ。

「参謀、スリップです！ ブレーキが効きません！」

「何だと！ この道は冬でも問題なく利用できる筈だ。なのに何故……」

「参謀！ もうダメです、飛び降りてくださいー！」

その言葉を聞いた参謀と偽物は、トラックの荷台から飛び降りた。私を残して。

勿論、体を碌に動かせない私は逃げ出せるはずがない。そのままトラックとともに、谷底に真っ逆さまに落ちていった。

「うわああああー！」

気がつくど鬱蒼とした森の中に放り出されていた。周りに連中はいない。助かったのか？

「いたた……」

辛うじて治っていた左腕にアームドギアを握らせ、杖代わりにして体を起こす。鉄板はまだ体に固定されているから、亀のようにしか動けそうにない。

「はあ……、はあ……」

どこでもいいから逃げないと。こんな所見つかったら、参謀どころか偽物にもやられる。それにやけに寒い。さっきまで暑いところだったから余計に寒さが肌に突き刺さる。ギアには断熱機能があるとか言ってたけど、まるで意味がない。

「風邪ひいちゃう……」

この天気はどうなっているんだ。

「さ、寒い……。凍え死んじやうよ……」

傷が治りきつてなくて、体力も消耗している状態では、寒さの中を碌に動ける筈がなかった。

だんだんと意識が遠のいていく。折角助かったのに、こんなどこだかわからない所で死ぬなんて……。

ああ、お父さんとお母さんがおいでおいでしているのが見えてきた……。どう考えても行っちゃダメなんだけど、もういいかな……。もしかししたら響も向こうにいるのかもしれないし……。

「おい！　いたぞー！」

「参謀の間抜けめ……。賞金首をこんな所に捨てていくとは」

なんだかガヤガヤ音がし出した。参謀という言葉からして、多分、ダーク・エンジェルスの関係者だ。参った。逃げようがない。

「こうもあつさりと捕まえられるとは、少々拍子抜けしましたな。師

団長殿」

「なあに。参謀の奴が下拵えをしていたからな。造作もないことさ……」

翼さんのような水色のカラーリングの偽物と水色の鎧みたいなものを着た鳥人が話をしている。話の内容からして、トラックをスリップさせた犯人はこいつらしい。怪人同士で内輪揉めを起こしているのか？

「さあ、引き揚げるぞ！」

「ら、乱暴にしないでください……」

鉄板から引き剥がされて、森の外まで引きずり出され、待つていた輸送機に荒々しく放り込まれた。魔人の強さを思い知り、弱気な言葉しか口から出てこなくなってしまった。

「大人しくしていれば何もしないよ。情け無いね、私達のオリジナルは」

監視役の偽物から嘲笑されても、何も言い返せなかった。それでも悔しさから睨み付けたけど、それが癩に触ったらしく、動けない私を踏みつけてきた。

「あんまり生意気な態度取ると、ここで凍らせるよ」

「ひっ……、ごめんなさいごめんなさい。もうしませんから勘弁してください」

「そうそう、それでいいの」

治りきっていない両足で、這い蹲って土下座して機嫌をとった。こんな偽物なんか傷さえ治れば倒せる。そう思って、ここはじつと我慢した。

輸送機が空に飛び立ち、飛行場の上を旋回して西へと進路を取った

時だった。

左の翼から鈍い音がした。

見張り役が窓の外を見ると丸い穴が空いていたらしい。それも何か大きな球でぶち抜いたようなものが。おまけにそこから燃えていて、もう飛べそうにない状態だったそうだ。

そんな状況だから輸送機は直ぐに降下を始めて、さっきまでいた飛行場に着陸した。するとそこにはあの参謀とその兵隊が待ち構えていたんだ。

「参謀、一体どういうつもりだ！」

「どういうつもりだとは、盗人猛々しい奴だ。峠に罠を仕掛けて、俺の手柄を横取りしておいて、よくそんな口がきけるな」

外で師団長と参謀のいがみ合いが見える。どうもこの組織、結束力は皆無らしい。私の首の取り合いで足を引つ張り合っているもの。

しばらくすると言い争いが酷くなって、とうとう決闘沙汰になり、お互いに武器を取り出して戦い出した。私の偽物もお互いに攻撃を始めて、支離滅裂な状況になってしまった。

でも私にとってはまたとないチャンスだ。足も手もどうにか動かせるほどには治ったから、拘束具を引きちぎり、こっそりと逃げ出す機会を伺った。

すると兵隊の1人が発射したビームが輸送機の方に飛んできた。それを見て、私は反対側のハッチに取り付いた。

ビームが当たったのを確認して、ハッチをこじ開けて脱出する。そのまま爆発する輸送機とは、水平に脇目も振らず全速力で飛んで逃げる。

一息ついて振り向いた時には、もう誰も追ってきてはいなかった。「た、助かった……」

近くにあった材木小屋に1日身を隠して、怪我を完全に治し、逃したエルフナインちゃんを探す事にした。

「不味いな……。チリに入ってしまったているから、アルゼンチンにま

た戻らないと……」

神獣鏡のバイザーで現在地を探るとチリの辺りに反応があった。エルフナインちゃんは、捕まってさえないなければアルゼンチンか島のどちらかにいるから、そこまで戻らないといけない。

「早く見つけないと。魔人対策も考えないといけないし」

神獣鏡が何の役にも立たない以上、そこはどうかしない。

港の近くのつぶれたスーパーでエルフナインちゃんを見つけた。どうやら捕まえられずに済んだようだ。この子は賞金首にされていないようだから狙われていないのかも。

「神獣鏡の聖遺物分解能力が効かなかったんですか？」

「うん。どの攻撃も全く効果がなくて、歯が立たなかったんだ。それで捕まっちゃって……」

神獣鏡が使えないというのが分かるとエルフナインちゃんの顔も曇った。

「神獣鏡を使えないようでは打つ手が……。しかも効果が無さそうな魔人は1人ではないとなると……」

「他に倒す方法を考えないといけないけど、聖遺物を壊す方法なんて思いつかないし……」

頭をひねってみたけど、聖遺物のことなんか殆ど分からないからどうしようもない。

「ああ、もう。水をかけて消えてくれたら助かるのに……」

火の魔人ならそれで消えたらいいのに。でもあの氷の鳥人とやり合ってもビクともしなかったし。

「ブリーシंगाメンはあくまでも炎を操る首飾りですから、火が消えても元の木阿弥……。いえ、そんなことはないかも……」

「どうしたの。まさか本当に水をかけるの？」

「そんなことしませんよ。ダメで元々ですけど、首飾りは黄金でできていますから……」

「本当に効果があるのかな」

「やるだけやってみましょう」

2人で夜の化学工場に忍び込み、お目当てのものを探す。

「えっと、この辺りに薬品の保管庫があるようですね。未来さんは向こうの棚を探してきてください」

「分かった……」

貰ったメモに書いてある薬品を探す。目立たないように、懐中電灯じゃなくてペンライトで探しているから探しにくい。表記に英語も入っているから、まだましだけど。

「学校の準備室にすらロクに入ったことがないから、こういうのは大変だよ……」

ラベルに描かれた髑髏マークが笑いかける中、やっとお目当ての薬品をみつけた。

「濃塩酸……。これだ」

瓶を30本拾ってきた籠に入れ、エルフナインちゃんの所へ持っていく。

「これだけ集めたよ」

「お疲れ様です。僕も必要な物は見つけたので、ここからは引き揚げましょう」

コソコソとリュックサックにガラス瓶を詰めこんで、その場を後にする。

「急ぎましょう。ブリーシंगाメンが僕達の居場所を突き止めるのも時間の問題でしょうから」

「ブリーシंगाメン……」

あいつが襲ってくる事を考えて、急に身体が震え出した。ダメだ、私。完全に怖がってしまっている。

「未来さん……？ どうしたんですか……」

「ごめんね……、エルフナインちゃん。みつともないところ見せて

……。死にかけた事なんて何度もあるのに、本当にどうしようもないことなんて一度もなかったから……。そこまで私を追い込んだ彼奴が怖い……。だからあ……」

ポケットに突っ込んでいたスキットルを取り出し、エルフナインちゃんが止めるのを聞かずに、中身のキツイウィスキーを一気に飲み干す。

「こういうの飲まなきゃ……やってられないのお……。ごめんねえ……。装者が私だけしか居ないのに……。居ないのに……。このざまでさあ……。居なくなつたみんなと違って……。一度やられたくらいでえ……。びびつちやう弱虫でえ……。ごめんなさい……」

情けなさから涙が出る。スキットルを投げ捨てて、泣きながら頭を下げて謝る。何で私なんかを神様という奴は生き残らせたのか。ずっと強い翼さんとかクリスとかを海の藻屑にしちやってさあ。アールコールで怖いのを紛らわそうとしている弱虫なんかよりずっと勇気があるのに。

「わたしがあ……。たたかわないといけないのに……。こわくて……。しかたないのお……」

唯一の戦力である私が怖がってたら駄目なのに、涙と震えが止まらない。

「未来さん……。怖いと思うのは仕方ないです。だって全く歯が立たなかった相手とまた戦えという話になるんですから。しかも対策もあてになるか分からない代物です……。ですが……」

エルフナインちゃんが頭を撫でてくれた。

「今度は僕も一緒に居ますから。失敗しても未来さん1人だけにはしません」

「本当?」

でもエルフナインちゃんもどうなるかわからないのに。

「こんなに震えている未来さんを1人にしておくのは、不安ですから」「エルフナインちゃん……。ごめんね……。それとありがとう……」

一晩かけて、あちこちの工場や学校からお目当ての薬品を掻き集めて、町の中央にある学校のプールにじゃんじゃん注いだ。

貴金属店から失敬した金をプールに投げ込み、液体の出来具合を見る。すると問題なく溶けていった。成功だ。

「王水瓶も出来上がりました。持って行ってください」

「ありがとう。あとはあいつが来るのを待つだけか……」

王水がなみなみとはいったビール瓶を抱えて、フェンス越しにプールの外を見る。そろそろ参謀か師団長のどちらかがここを嗅ぎつけてもおかしくない。

「エルフナインちゃん。渡した銃の使い方は覚えておいてくれた？」

「はい」

魔人や兵隊相手じゃ気休めにしかないけど、ないよりはマシだろうからPPKを渡しておいた。丸腰で放り出すわけにはいかないから。

「可愛がってあげてね、オンボロだけど……」

朝日が昇る時に周りの温度が上がりだした。この様子だと、嗅ぎつけたのは参謀だ。

「こんな所に隠れていたか！」

相変わらずのハリのある声とともに、鉄球でフェンスを叩き壊して参謀がプールによじ登ってきた。

それを見て、私は抱えていたビール瓶を参謀の身体目掛けて投げつけた。

「せいっ」

瓶は左肩にぶつかり割れた。中の王水がかかって、左肩と頬から煙が上がっているのが見えた。

「ぐわッ……」

プールからずり落ちる音が聞こえた。追い打ちをかけようとプールサイドから下を覗くと鎖が飛び込んできて、私の首に巻きつき下へ

と引きずり落とした。

そのまま下で待ち構えていた参謀の角の上に落つこち、お腹を刺し貫かれた。

「いぶっ」

流石に耐えきれず血を吐き、腕をだらりと垂らした。おまけにお腹からジュウジュウ肉の焦げる匂いがする。堪らない。しかしこちらも負けじと参謀の背中に瓶を叩きつける。

「ヴッ」

背中に王水を浴びて堪らず前のめりに倒れた参謀。その勢いで私は角から解放されて、鉄球の近くに転がった。

鉄球を急いで掴み、参謀の背中に叩きつけて、階段を登りプールの上に逃げ込む。

奴もすぐに起き上がり、プールサイドに駆け上がってきて、私を後ろから体当たりをしてひっくり返す。

倒れたところで肘打ちをくらい、胴体に更にダメージを入れられる。のしかかられているから抜け出せない。

参謀の腕が首に伸びて、思い切り締め上げてきた。

「ヴアアッー」

「今度は生け捕りにするつもりはない」

不味い。今度ばかりは本当に殺される。飛蝗になっても抜け出せそうにない……。

あと少しで首からポキツという音がたちそうになった。その時だった。

後ろの水道の陰から瓶が飛んできて、参謀の頭にぶつかった。こちらにも多少はかかったけど、問題ない。

王水で参謀の頭は半分溶けてしまい、左肩へのダメージも更に酷くなった。そのせいで力が抜けてしまい、私を締め付ける力も弱くなった。

その隙をついて、参謀の拘束から抜け出して、瓶の置き場所へ逃げる。

そこから3本持ち出したところで、後ろから鉄球が飛んできた。

とつさに飛び退いて躲したところで、中の瓶が全て叩き割られた。もうこれで頼みの綱はプールだけになった。

参謀の方を見ると半分だけの頭でこつちを見ている。流石は魔人の頭の半分がなくても死んだりしないようだ。

向こうはもう得物が無い。残っている武器は、あの右腕と足だけ。左腕は溶け落ちたみたいでもう無い。

しかしこつちも楽観視できない。体へのダメージは向こうよりも入っているから。

「ごうなつたら……、ぎげん……だけど……」

右腕のアームカノンをいつでも使えるように展開しておく。勿論、あいつにぶち込むつもりなんかない。

プールサイドを移動して、あいつの胴体に掴みかかる。

押し合いへし合いしている時に、コードに巻きつけた瓶を奴の目にぶち当てて、目を完全に見えなくする。此方のほっぺたにもかかったけど、あとで傷は塞がるから放っておく。

動きが止まったところで大外刈りをかけて転ばせ、両足を掴んでプールに放り込もうとした。でもまだこの瀕死の屑鉄は、足を振り回して抵抗してくる。

「いいがげん……、あきらめろ……!」

残しておいた二本の瓶を頭に叩きつけて溶けかけのアイスクリームみたいな状態にして、足をかけて引き倒し、右腕で小脇に抱える。火傷に響くけど、この際だ。

「おつごぢろ……」

王水のプールに入れようとしたところで、まだ生きていた右手で私の右腕を掴み、道連れにしようとしてきた。でもそれくらい見越せない程、私も考えなしじゃない。

「ば……が……」

アームカノンを撃って、右腕を壊して空へと逃げた。

参謀はそのまま王水に落っこち、二度と上がってこなかった。

「おわつだ……、じぬがどおもつだ……」

「エルフナインちゃん、あのどきはありがどう……」

「なんてことないです。それよりも未来さん、お疲れ様でした」

あの後、エルフナインちゃんに連れられて、学校の保健室らしき場所
所で治療してもらった。ほぼ全身を火傷していたから少し危なかつ
たらしい。

幸いプラネテューヌからの物資で薬はあったから、それを塗りつけ
てどうにかなった。後はナノマシンが体を治すのを待つだけだ。

「それにしても、魔人というのはあれほどの力を発揮するのですね。
以前に比べてずっと強くなった未来さんが、これほどの怪我をして
やっと倒せたのですから」

「だおぜたの……、わだじのおがげじゃないよ……」
「えっ」

「エルフナインちゃんがいだ。だからだおぜたの……」

そもそも今回の作戦を考えたのだからエルフナインちゃんだ。ブ
リーシंगाメンが元々、黄金の首飾りという事を知っていたから、ダ
メ元とはいえ王水を使った作戦を考え出してくれたんだ。

この子が居なかつたら、今頃私は死んでいたに違いない。

「ありがどね……、ごれがらもごんなごどばがりだと思っげど……、よ
ろじぐね……」

「(こちらい)そ……」

chapter 5. アマゾン奥地の銀世界

アルゼンチンを抜けて、ボリビアに入り、そこから更にペルーへ行こうとした。そこから太平洋に出て、サイクロンでメキシコ辺りまで行こうと考えたんだ。

でもそうは行かなかった。目の前にある壁のせいだ。

ボリビアとペルーの国境に、東ドイツも真つ青な不細工な壁が建っているんだ。試しに叩いてみるとかなり硬い。恐らくサイクロンでぶち破るのも無理なくらい。

「壊せそうですか?」

「3日かけて叩けば何とか……」

「迂回路探しましょう……」

「迂回路ねえ……、あると思う?」

壁は南北のずっと先まで続いている。ベルリンの壁どころじゃない。まるで万里の長城だ。何処へ行こうと太平洋へと出られなくなるつもりらしい。

「よその国を経由しようか。アメリカに出るのに、太平洋経由でないといけないわけじゃないから」

「そうですね。ですがここから急ぐには、ブラジルかバルベルデを通るしかありませんよ」

「どつちが早く着く?」

「バルベルデの方です。ブラジルだと、相当な回り道をしないとダメです。それに最短ルートだと、ベネズエラを経由しないとカリブ海へと出られないようですから……」

「ベネズエラか……」

国の情勢が最悪だと聞いていたけど……。必要な物資が手に入ることの中々ないというし。とは言っても、もう一つの選択肢がバルベルデというのもなあ……。ちよつと前まで国の中が大荒れだったから、どうも行きたくない。

「バルベルデって、多国籍軍が攻め込んで以来、状況は好転したの?」
「かなり微妙です。旧政府軍の残党がゲリラ化して、あちこちでテロ

が起きていましたから。あちこちに不発弾や地雷も残っているようですし」

危ないままだ。私は地雷原だろうが、核兵器の爆心地だろうが問題ないけど、エルフナインちゃんはそうは行かないからね。

「エルフナインちゃん、ブラジル経由で行こう。それでまだマシな国を通って、カリブ海に出ようよ」

その後、サイクロンを走らせて、ブラジル国境へと向かった。するとここにもバリケードが作られていて通れなかった。

止むを得ず、私達はバルベルデへ行くことになった。

「バルベルデ共和国国境まであと3キロです」

「いよいよか……」

人の気配がないとはいえ、治安が安定していないバルベルデへ入るわけだから、緊張して肩に力が入る。ほぐしておいた方が良さかもしれないけど、別の理由でそれは無理だ。

「寒い……」

異様に寒いんだ。赤道近くなのに、私が閉じ込められていた強制収容所なみに寒い。

「気温が一桁なんて、この辺りではあり得ないことです」

そこまで下がっていたのか。バルベルデに近づくにつれて、どんどん下がっている。着く頃には、きつと氷点下になっているに違いない。

「チェーンつけた方がよさそうだ。ちよつと止めるね」

もしかしたら道が凍っているかもしれない。安全には万全を期すに越したことはない。

「酷い吹雪だ……!」

本来ならば熱帯雨林に覆われた国であるバルベルデは、雪と氷に埋もれていた。

国の中心に近づくにつれて、吹雪が酷くなり、とうとうサイクロン号が動かせなくなってしまう。おまけにエルフナインちゃんが寒さのあまり寝そうになってしまい、顔を叩いて目を開けさせた。

「うかうかしてられない。早く寒さをしのげる場所を見つけないと……」

でも周りにあるのは、雪の重みで崩れ掛かった廃屋だけ。入ったところではしばらくすれば圧死するのがオチだ。

「でも雪しかないんじゃない？……、そうだ！」

なら雪の中に入ればいい。簡単な事だ。

エルフナインちゃんを背負って、建物から離れたよく雪が積もっている空き地に行き、斜めに深く穴を掘った。

人2人分入れるぐらいの空間を作り、それから周りに低い壁と屋根のような物を作って、雪が入りにくくしておく。これだけしておけば、一先ず寒さはしのげる筈だ。

穴に入り、スープ缶を持ち歩き式の小型コンロで温めて、エルフナインちゃんに飲ませた。

「落ち着いた？」

「はい。ありがとうございます」

「良かった……」

「未来さんもどうぞ……」

「ありがとう」

半分残ったスープを飲み干し、空き缶で雪をすくってコンロにかける。飲み水が多いに越したことはないから。

「ここが南米だなんて信じられないよ。アラスカの間違いじゃないの？ クリスが見たら腰を抜かすよ、絶対」

「僕たちが前にきた時は、蒸し暑い国だったんですけどね……」

「気候変動もここまで酷くなったんだね」

「そんな訳ありませんよ。大方、聖遺物が原因でしょう。局地的にこんな気候になるなんて、それくらいしか理由は思いつきませんよ」

「てことは……、この辺りにあいつらがいると……」

「でしようね」

こんな気候にしているってことは、恐らく雪か氷に強い改造魔人だ。大体、誰なのかは想像がつく。この間、会ったから。

エルフナインちゃんを防寒用の寝袋に入れて休ませておき、私はコーヒーを片手に辺りを見張っていた。夜襲をかけられる可能性があったから、寝るに寝られなかったんだ。寒さで武器も殆ど使えないし。

「ルウイー製のレーザーライフル一挺でどこまで持つか……」

野生動物くらいなら素手でも勝てるけど、こつちを襲いにくるのはそんな手合いではないから油断は禁物。

穴の出口から外を見張り、いつでも銃が撃てるようにしておく。バイザーの反応も逐一確かめながら、常に神経を張り詰めておかないといけない。

「次に寝られるのは、この国を抜けてからになりそう……」

それから4日間は何もなかった。

5日目の夜明け前に、此方が疲れてきた頃を見計らったように、ビームが飛んできた。

急いで寝袋から引つ張り出したエルフナインちゃんを背負い、草津の時と同じギアを装着して雪面を滑走する。アームドギアに刃が付いているから、普通よりも接近戦がやり易い。おまけに気休めにしかないらないけど、手持ち武器がもう一つあるから、いつもよりは安心できる。

早速飛び出してきた1人の胸にビームを撃って倒し、道路へと飛び出す。

すると建物の瓦礫の中から一斉に攻撃が来た。トーチカか何かだったらしい。

「うわあ！」

「口を開くな！ 舌を噛む！」

悲鳴をあげたエルフナインちゃんに乱暴に言い放つてから、スラスターを吹かしてこれを躲す。でも全部は避けきれず、右足のスラスターと左腕のコードを溶かされた。アームドギアにも穴を開けられている。

しかし此方も負けじとビームをばら撒いて反撃し、兵隊をあぶり出して、接近戦を仕掛けた。

まず斜め上から飛び蹴りをしてきた1体を伏せて躲し、アームドギアで逆袈裟にがら空きの背中を斬りつける。

背中から落ちた其奴の首を左手で掴み、背後から体当たりを仕掛けてきた奴に投げつけて転倒させ、そこに私も飛びかかって、思いつきりアームドギアを叩きつけて2人の頭を潰した。

その時、別の1体が私を横から蹴飛ばした。

咄嗟に雪の上にエルフナインちゃんを放り出し、背中から倒れると其奴が私にのしかかってきた。

「あつー！」

この間、チリで私を散々笑い者にした奴だった。

「また会ったね」

あの時と同じムカつく顔で笑いながらマウントポジションをとり、私の顔を殴った。

頭に来て、膝の突起をこいつの股間にぶつけて前に押し出し、胴体を引つ掴んで真横に放り出す。

急所をやられて動きが鈍くなったところで体重をかけてお腹を踏み付け、口にライフルをねじ込んで撃ち込み、トドメを刺す。ああ、同じ顔をした改造人間を手にかけているのに、とつても清々しい。

「終わった……、ざまみろ……」

雪の上に放り出したエルフナインちゃんを背負い、寒さをしのげる場所を探す。襲われた以上、さっきのところに留まるのは危険だか

ら。

「さつきはごめんね。急に放り投げたりして」

「気にしないでください。僕は大丈夫ですから。それよりも次の拠点を探さないと……」

とはいえ、見れども見れども雪、雪、雪。建物の崩れた集落に隠れられそうな場所はない。こうなったらジャングルに入って、木の穴でも探すことにするか。

ジャングルに入り、水面が凍ったアマゾン川を渡ると変な物があつた。

雪が凹んでいる所があるのが見えて、気になって掘り返してみると氷でできた重い扉が出てきた。

それを開けて中に入ると、冷凍庫のように寒かった。外の方がまだマシなくらい。氷の扉を維持する為には、このくらいの寒さでないといけないのかもしれない。でも私達2人には、ただ寒いだけだ。特にエルフナインちゃん。さつきから震えているもの。

「エルフナインちゃん、外に出る？」

「いえ……、現状では未来さんから離れる方が危ないので……、大丈夫です……」

そうは言っても唇が紫色になっていて、とても大丈夫そうには見えない。

「まずいようならいつでも言つてちょうだい」

通路を進んでいくと階段があり、それを登ると奥にギリシヤにありそうな石造りの神殿と地底湖があった。

「何これ……、ただの神殿じゃないよね」

「こんな所にギリシア風の神殿があること自体が変ですよ……」

神殿の奥に進むと液晶パネルが嵌め込まれた石柱が置いてあった。雪の絵が書いてある。

バイザーを閉じてみると、ポパイと反応が出た。あの船乗りなんかいないのに。まさかこの名前？

「ねえ、ここポパイって言うらしいよ。これが元凶?」

「恐らくそうだと思います。南米の何処かにポパイという先史時代の気象兵器があると聞いた事がありました。これがそうだったんですね」

「そんな名前なら、ほうれん草の缶詰が降る天気にしてほしかったよ」
缶詰なら非常食になるし。あまり美味しそうじゃなかったけど。

「これは僕が操作をしてみるの、未来さんは周囲の警戒をお願いします」

「分かった」

流石に何も仕掛けてこない筈がない。あの連中が来たってことは、師団長も何処かに潜んでいるに違いない。

バイザーを使って、周囲の反応を探る。不思議と参謀の時よりも怖くはなかった。直接痛めつけられてないからだろうか。

「うわっ」

少し寒くなってきたとき、エルフナインちゃんの悲鳴が聞こえた。

慌てて駆け寄ると、コントロールパネルに小さな両手がびったりとくっついていた。

「どうしたの!」

「手が凍りついてしまつて……。画面が少し湿っていたのにそのまま触ったのがいけなかったみたいです」

「直ぐに剥がせそう……。ではないね」

「ええ、お湯を少しずつかけて溶かすしかないかと……」

そうは言ってもお湯がない。沸かすにしても空き缶がないから無理だ。

「暫く動けないか……」

他に方法がなく、2人で頭を抱えた。その時だった。

地底湖から水音が聞こえて、師団長がハルバードを振りかざして飛びかかってきたのは。

「キエーツー！」

怪鳥音とともに振り下ろされたハルバードをアームドギアで受け止めた。参謀ほどではないが、魔人だけあつてかなり重い。

「手が……………痺れる……………」

アームドギアで跳ね飛ばして、ビームを牽制に4発発射する。

それには構わず、参謀はハルバードを突き込んできた。背後にエルフナインちゃんが居るから避けられない。

「考えたな！」

止むを得ず、左手を突き出してこれを防いだ。掌にパイクが突き刺さったところで、アームドギアで左腕を吹き飛ばす。とても痛いがこのくらい我慢しないといけない。

「狩りをするときに罫を仕掛けない猟師がいるものか」

「そりや……………そうだ……………」

私の腕が刺さったままのハルバードを構えて、師団長は横なぎに払ってきた。

少し足を浮かせてそれを踏んづけて、動かさないように力を入れる。

「足を退けろ」

「嫌だ」

「そんなにこの斧が気に入ったか？」

「うん」

「ならばくれてやる」

師団長は持ち手の部分を引き抜き、そのまま私の頭の左側面に叩きつけてきた。

「ぐっ」

そこに追い討ちをかけて、持ち手の先から弾丸が発射されて右耳に当たった。どうやら銃になっていているらしい。通りで太い訳だ。

今のでバイザーが壊れたらしく半開きになった。こうなったら邪魔にしかならないから、バイザーの基部を吹き飛ばして排除する。

「次は炸裂弾だ……」

「さっきのだけじゃないのか……」

避ければ、エルフナインちゃんにぶつかる……。当たれば、こちらがドカン……。さあてどうする……。待てよ、次は炸裂弾だって言ったよね……。

そうだ、エルフナインちゃんにあれが当たれば……。手が吹き飛ぶ恐れもあるけど、その時は私が責任を持って何とかすることにしよう。

炸裂弾がエルフナインちゃんの手の位置にくるように、体勢を低くする。

「死ね」

発射されたところでこれを避けて、師団長に体当たりする。

「くうッ」

肩のあたりが凍りついて痛いのを我慢して、地底湖に突き落とす。重い鎧を着けているから、当分は逃げ出せない筈だ。

その後直ぐに取って返して、エルフナインちゃんの様子を見ると、火傷と霜焼けこそしているけど、何とかパネルからは解放されたようだった。

「大丈夫だった?!」

「何とか……。ですが、もうポパイは制御不能です。バルベルデ共和国は、未来永劫に永久凍土になります」

「そっか……」

となると、この国の何処かで眠っているクリスのご両親や友達も永久に氷の下か。出来れば掘り返してあったかい所に連れて行きたいけど、多分無理だ。

しみりしていると水音が聞こえた。あの鳥、直ぐに上がってきたか。

「エルフナインちゃん、下がってて」

スラストアーを動かして、師団長が置いて行った斧を滑りながら引つ

掴む。

「くれるというならありがたく頂戴しますよ」

魔人同士の合戦にも使われたんだ。当然、通用する筈。

斧をぶら下げて、湖から上がってきた師団長と対峙する。

向こうさんには棒つきれ以外の武器もあったのか、何処かから取り出した抜身の剣を下段に構えている。

お互い一気に飛びかかり、得物を噛み合わせる。ハルバードよりも軽い。助かった。

剣を跳ね上げて、腰のアームを射出してそれを捕まえ握り潰す。

武器を無くし逃げようとしたところで、またまたアームを使い、今度はさつき砕けた石柱のかけらを掴み、背中に投げつけた。

背中にかけらがぶつかり、バランスを崩して墜落した師団長の上ののしかかり、斧を後頭部に振り下ろした。

「ギエアッ！」

断末魔とともに頭をかち割られた師団長は、溶けて無くなってしまった。

「参謀よりも簡単に倒せた……」

「生き返る〜」

「コロンビアに温泉があつて助かりました……」

私達は今、コロンビアのペレイラにある温泉に入っている。

あの後、暫くあの神殿に霜焼けと凍傷が治るまで滞在し、治ってからは雪の中からサイクロンを掘り出して、積雪量がマシなところまで2日間手で押していったんだ。

そこまで出たら、後は一直線にコロンビアを目指した。旅行番組で温泉があるのを見たことがあったから。

ずっと雪の中にいたからお湯が恋しくなったんだ。

「エルフナインちゃん、傷の方は大丈夫？」

「はい、僕はもう痕が残ったくらいです。未来さんは……」

「大丈夫だよ。腕も元通りだし、傷なんか元々あるものだけしかないから」

「右足にかなりの数ありますね……。いつこんなについたんですか？」

み、右足のことはあまり触れないでもらいたい。今話したくないし。

「このことは、全部終わってから教えてあげる」

「そうですか。それにしてもナノマシンは便利ですね。傷が塞がりやすくなるのですから」

「ほんと、これだけは助かる機能だよ」

無かったら、今頃五体不満足もいいところだ。

温泉から上がり、適当なコテージを探して、そこで作戦会議。

「これからアメリカの方に抜けるとして、中米経由で移動するか、カリブ海経由で移動するか、どちらにします？」

「うーん。確かコロンビアの北の方って、手付かずの自然がそのままって聞いたことがあるから、そこだけはカリブ海に迂回した方が良さそう」

「ではカリブ海を經由して中米の何処か適当な国に上陸するということで良いですね」

「うん。若しくはカリブの島に寄りながらアメリカまで渡るというのもいいよ。とにかくアメリカに着きさえすればいいから。聖遺物の研究機関がある所に行けば、魔人退治に役立つ物が転がっているかもしれないし……」

最初に装着した神獣鏡もアメリカ製だったしね。

「そうですね。さて、今日と明日は休んで英気を養いましょう。1週間弱雪の中にいたからもうくたくたです」

「本当だね。それじゃあ明かりを消して、ゆっくり寝ましょう」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

日はまだ高かったけど、2人で泥のように眠った。久々の命の危険がない睡眠だったから。

chapter 6. ゴーストタウン紀行

カリブ海のど真ん中で、私達は遭難していた。運のないことに、ハリケーンにぶつかっちゃったんだ。お陰で乗っているボートは転覆寸前。しかもエンジンがこわれて航行不能ときたものだから、近くの陸地に急がせる事も出来ない。絶体絶命だ。

「ボートの縁から手を離さないで！ うわあっ！」

高波に揺られて落ちそうになったエルフナインちゃんの腕を掴んで引つ張り戻す。このままだと、遅かれ早かれ2人とも魚の餌になるのがオチだ。

ヒップホルスターからP38を取り出して、サイクロンを固定していた鎖を撃つてこれを壊す。

そして自動操縦で海に飛び込ませてから、私は神獣鏡を装着してエルフナインちゃんを抱えて空へと浮き上がった。

「空が上がっても状況は同じか……」

適当な陸地を探さないといけないけど、雨と風が強くてまともに飛ぶのもキツイ。そもそも視界が悪くなるからバイザーが使えず、自分達がどっちに飛んでいるのかもわからない。おまけに風の強さもどんどん酷くなり、スラスターが押し負けるようになった。

それでも無理やり飛んでいたけど、とうとう勢いに負けてしまい、2人して大荒れの海に落ちてしまった。

「未来さん、未来さん！ 起きてくださいー！」

「う……、あれ。ここはどこ？」

エルフナインちゃんに揺さぶられて目を覚ますと、何処かの砂浜に打ち上げられていた。見た目からして海水浴場らしいけど、何処なのか分からない。

「助かったのは良いけど……」

体を起こそうとしたら、頭の上に重いものが落ちてきた。頭を摩りながら顔を上げると、茶色い物が転がっていた。

「いったあ……！ 今度は何？」

「椰子の実です。未来さんの頭にぶつかって、真つ二つに割れました」
椰子の実があるってことは、何処か暑い所なんだろうけど、それだけじゃどこだか分からない。

「中米かカリブの島の何処かだと思いますが、ここだと正確な場所まではわかりませんね……」

「サイクロンはないから遠くに移動できないけど、この辺りを一回りしてみようか」

「はい。でもその前にこれをお腹に入れてさせてください」

そう言いながら、ヤシの実を流れ着いた木切を使って食べ始めたエルフナインちゃん。

それを見て私も近くの椰子の木を蹴飛ばして、落ちてきたものに木の枝を使って穴を開けて、水分補給をした。

「あの、未来さん。ギアを使って飛ばせば簡単に採れたのでは……」

「疲れちゃったの。それに雨の中を飛ぶのは、もう勘弁……」

風こそ収まっているけど、雨はまだ勢いよく降っている。雨宿りできる場所を探さないと。

砂浜から奥に進むとコテージやホテルがあった。どうもリゾート地らしい。とはいえ人の気配がないから淋しい。それにこれまで見てきた街に比べて、どういうわけか損壊は少ない。私とエルフナインちゃんを始末してから、ここをリゾートとしてあの連中は再利用するつもりだったのだろうか。魔人がこんなところで遊んでるなんて想像できないけど。

「聖遺物に遊びなんて概念があるのかな……」

「あつたら興味深いですね。研究材料にはもってこいです」

「そうかもね」

そんなことを話しながら、街に入る。見たところ歓楽街らしいが、ここも人っ子一人いない。まるで終末もののお話みたいだ。

「ここに来るまで人の姿を全然見かけていませんね。盛り場のようで

すけど、シーンと静まり返っていて気味が悪いです」

「本当だね。ゴーストタウンって言葉の通り、幽霊が出そう……」

探検と考えると面白いかもしれないけど、店の照明や信号機の一部が点いたままというのは、かえって怖くなる。それで誰かいるのか覗いてみれば、赤黒いものが床についていたりするのだから、余計に怖い。仏さんが転がってないだけマシかもしれないが、これでも中々肝が冷える。

「肝試ししに来たんじゃないのに……」

「前に司令とみたホラー映画を思い出しそうです……」

「そんな物、思い出さないで！」

暗くなる前にここが何処だか調べたい。あんまり気持ちの良い場所じゃないから。胸の中に魔除けのできる鏡があるとはいえね。

無人の売店のレジからお金を取り出す。無論、持ち出すつもりはない。ゴーストタウンでは、そんな物なんの役にも立たない。

お金なら、発行している国の名前くらい書いてあると思つて調べてみたんだ。これが米ドルやイギリスポンドだったらややこしい事になるけど、幸いな事にレジから出てきたのは別のお金だった。

「Bank of Jamaica って書いてあるね。ということ
は、ここジャマイカだ」

良いところに流れ着けた。美味しいブルーマウンテンが手に入る。あれ高いから親父さんも中々買わなかつたんだよね。

「嵐が過ぎたら、ブルーマウンテン仕入れに行かない？」

こんな時に浮かれてしまうのは良くないかもしれないけど、これくらい良いよね。食料も何もかも海の底に沈んでしまったから。

「近くで調達できるなら構いませんよ……。僕も眠気覚ましにコーヒーは欲しいですから」

「まさかブルーマウンテン山脈があんなに遠いなんて……」

ここがどこだか調べたところ、西部のネグリルという町だったんだ。そして肝心のブルーマウンテンを手に入れるには、島の反対側まで行かないといけなかった。神獣鏡で行っても、エルフナインちゃんを抱えていかないといけなから時間がかかる。諦めるしかなかった。

「ああ、残念……」

「まあまあ。クーヒーくらい、隣にあるキューバでも手に入りますよ。それよりもこれからの予定を考えましょう。さっきの書店で手に入れた地図もありますし」

「うん。カリブ海は予定に無かったからね。ここからアメリカまで行くのは簡単？」

地図をめくって調べていたエルフナインちゃんが、私の質問にちゃんと頷いて答えた。

「はい。キューバへ渡れば、アメリカはもう目と鼻の先です。フロリダ海峡を渡って、キーウエストに辿り着けば、後は陸路でフロリダ半島に渡れます。ただ難点が一つありまして、そこから日本に向かうまでに、聖遺物の研究施設が一箇所しかないんですよ」

「ないの？」

「アメリカ大陸を北上して、ベーリング海峡とカムチャツカ半島を経由して千島列島を渡れば、根室に辿り着けます。この間にある研究所は、テネシー州にあるオーク・リッジ国立研究所だけなんです」

エルフナインちゃんの指の動きを辿ると確かにそこだけにしか研究所はない。でもマリアさん達は、もつと西の方にいたって聞いたけど。

「マリアさん達のいたところは？」

「ロスアラモスなら今年の1月に閉鎖されて、発破解体されました。施設の規模が大き過ぎたらしく、費用削減の為にオーク・リッジに移転したんです」

「そうなんだ……。これだと研究所が壊されていたら厄介な事になるよ」

パワーアップに繋がりそうな聖遺物なり何なり手に入れないと、こ

の先どうしようもなくなる。特訓でどうにかなる相手ではないし、そもそも攻撃の性質を変えない限り話にならない。

「まさか映画館探してアクシオン映画を見たところで、あいつらに勝てる術なんか見つかるわけないし……」

「かなり遠回りになります、ヨーロッパ経由で日本に向かうのはどうですか?」

「ヨーロッパ?」

「はい。ヨーロッパならアイルランドのキラシャンドラやドイツのドレスデンに研究機関がありますから、もしオーク・リτζが駄目でも何とかなるかもしれません。キャロルのダウルダブラも、元はキラシャンドラで保管されていた物でしたから……」

「なるほどね。でもアメリカからヨーロッパに渡るのって、私達の動かせるような小型のボートじゃ無理だから、適当な船と船乗りさんが見つけれられたらの話だね」

チャールズ・リンドバーグよろしく大西洋横断飛行をする事も出来なくはないけど、あまり現実的ではない。サイクロンや荷物を持って飛ぶ事なんてできないし、何よりエルフナインちゃんの体が持たない。長時間ぶっ続けで空を飛んでいたら、この子がまいってしまうのは目に見えている。どうしよう。

「今は海が鎮まるのを待つてから、まずはキューバを目指しましょう。後のことは、それからでも遅くはありません。それにアメリカで掘り出し物が手に入れば、そのまま北上すれば良いのですし」

「そうだね。悩んでても仕方ないか。それよりも今夜の寝床なんかじゃないと……。波に揉まれて疲れちゃったよ」

「幸いリゾート地ですから、それに関しては心配無さそうですね」

「これから先の事も、何の心配もなければいいのに」

特に襲われた形跡のない海岸沿いホテルの一室で、濡れた服を脱いで、2人でベッドの上に倒れた。あのまま着続けていたら、間違いく風邪をひいてしまうからね。

濡れたものを干してから、2人で抱き合つて毛布に包まっていた。これ自体に意味があるかどうかはともかく、私の体温でエルフナインちゃんをあつたためるくらいの効果はあつたようだ。唇の色に赤みが戻ってきている。

「未来さんの体温が思ったよりも高くて助かります……」

「熱くない？」

「大丈夫です。人肌よりもずっと暖かいです」

窓ガラスがガタガタと揺れ出した。さっきまで雨だけだったのに、どうやら風まで吹いてきたらしい。

「また嵐か……。いつまで続くかな……」

「分かりません。今の季節は、ハリケーンが起りやすいですから」

「こんなことなら無理してでも、直接パナマに行けば良かったかも。いやでもそれなら研究所まで行くのが、大変になるからそれはそれでダメだ……。それにパナマにはパナマ運河があるし……。橋を落とされてたらどうしようもないや……」

「どのみち嵐にぶつかっていたかもしれません。それならまだ雨風を凌げるこのの方がまだマシです」

雨足が強まり、風の勢いも増してきた。部屋の窓ガラスは大丈夫だろうか。ホテル用だからちよつとやさつとのことじゃ、壊れないと思ふけど心配にはなる。

夜中に物音がして目が覚めた。ドアをトントントンと叩く音だ。

「つたく……。こんな時間に誰？ ルームサービスなんか頼んでないのに……。えっ？」

寝惚け眼を擦りながら半身を起こした時に、妙な事に気がついた。このホテルには、私達が来た時は既に無人だった。つまりホテルのボーイなんかいるはずもない。

サーッと血の気が引いて、隣で寝ているエルフナインちゃんを揺り起こした。

「み、未来さん……。一体どうしたんですか……」

その言葉が終わらないうちに、またドアノックが聞こえた。それを聞いたエルフナインちゃんの顔も青くなった。

「今の何ですか……」

「分かんない……」

意を決してギアを装着し、ドアノブに手をかける。バイザーには、聖遺物とのみ表示が出ている。どんな聖遺物なのかはわからないが、どうやら私とは別のベクトルにいる元人間だった方々ではないらしい。

「魔人かもしれない。こっちに来て」

「は、はい」

ベッドのシーツを身体に巻き付けさせ、寝る前にメンテナンスしておいたPPKをエルフナインちゃんに持たせておき、外からは死角になる場所に立たせる。

「いくよ……、せえのっー」

ドアを思い切り開け放つとバシャつと身体に何かかけられ、思わず尻餅をついた。

「うわっ！ な、なに……？ 臭い……」

かけられた物を指で掬ってみると、生臭くてベタベタした赤い物だった。舐めてみると鉄の味がする。血だ。

犯人を見届けようと顔を上げると、右眼だけが入った髑髏と両手の骨をくつつけた盤が宙にふわふわと浮いていた。今度は何の魔人だ?!

「カカカカ……。今日の所はこれで勘弁してやるさ……」

そういつて髑髏は、私の顔に盥を投げつけてきた。

横に転がってこれを避けて、アームドギアから1発髑髏目掛けて発射する。躲されてもめげずに攻撃するが、小さくてすばしっこいから当たらない。

「勘弁してやるというに……」

その声とともに真横からヒュンと何かが飛んでくるのが聞こえた。しかし咄嗟の事だったから反応が遅れて、左目にモロに当たってしまった。

「ぎゃあッ！」

堪らず左目を押さえて、仰向けに倒れる。よくしなる棒で引つ叩かれたみたいだ。

「次に会った時は、残った右目をもらおうか。クカカカ……」

そう言いながら、髑髏は両手を連れて部屋から出て行った。でも痛くて追いかけることができなかった。

「何なのよ……、もう……」

「未来さん、大丈夫ですか?!」

死角から飛び出してきたエルフナインちゃんに抱え起こされた。

「大丈夫じゃなさそう……。左目でエルフナインちゃんが見えないから……」

どうやら潰されてしまったらしい。外傷による物だから多分大丈夫だと思うのだけど、参ったな。片目じゃ戦うのが大変だ。

「電気屋から持ってきた方が良かったんじゃないの?」

「いえ、軍用スコープの方が耐久性は良いと思いますから」

近くにある国防軍基地の倉庫から持ち出した狙撃銃のスコープをテールの上と並べて、2人で品定めをしている。別に人を撃つわけでも、バードウォッチングに行くわけでもない。新しい左目の材料を選ぶためだ。

「義眼の材料を決められるなんて贅沢な話なんだろうけど、どれもこれも良く見えそうで迷うよ」

「あまり壊れやすい物には、手を出さないでくださいね」

「分かってるよ。こっちも何度も壊されたんじゃ堪らないからね。ショッカーもどうせなら目も肌くらい硬くしてくれてもよかったのに」

「まさかナノマシンが壊れるとは思いませんでした」

「私もだよ」

目玉が摘出され、空っぽになった左目を押さえながらそう返した。「しかもプラネテューヌの生産工場と倉庫が大火事で全焼だなんて、

本当にツキがないや。エルフナインちゃんがいなかったら、どうにもならなかったよ」

「ありがとうございます……」

「どうですか？」

「うん。よく見えてるよ」

左目に嵌め込んだ義眼は、ビデオカメラみたいに任意の倍率に映像を調節できる優れ物だった。流石、技師をしているだけのことはある。

「バイザーなしでの狙撃もできるね。有り合わせの物でここまでの物ができるとは思わなかった」

これならアームドギアじゃなくて、ライフルで狙撃するのも簡単になる。

「不具合があった時のために、ストックは用意してあるので、必要な時はいつでも言ってください」

「ありがとう。さてと持ち物も乾いたし、物資もある程度は届いた。それに武器も……」

銃砲店の奥から引つ張り出してきたモーゼルM98ライフルを両手に持つ。この他にも色々あったけど、この子が一番肌に馴染んでいく。

「使い方知ってるんですか？」

「うん。ドイツ製の銃なら粗方使ったことあるから。今度撃ち方教えてあげるね」

「ありがとうございます。それと……、すみません。戦闘では殆どお役に立てなくて……」

「いやいや、全然そんな事ないよ。アルゼンチンでは、エルフナインちゃんがいなかったら絶対に死んでいたし、それに今はこうして義眼を用意してくれた。十分役に立ってる」

「そうでしょうか……？」

「そうだよ。だから自信を持って。さてと……、お日様が出てきたか

「はーいー」

「はーいー」
こうして私達の短いリゾート暮らしは終わりを告げた。けりがついたら、今度は響も入れて3人で行きたいな。勿論、今回のような嵐の中のおっかなびづくりの旅行じゃなくて、のんびりとしたリゾート旅行として。

chapter 7. 毒霧

ジャマイカを出発してから10日目の夜、サトウキビで有名なキューバの首都ハバナに、私達は辿り着いた。

「結構かかったね。ここまで来るのに……」

とつぷりと日が暮れてしまっているから、宿探しも大変そうだ。スペイン語もそこそこ読めるようになったから、うっかり見過ごすなんてことはもうないと思うけど。

「まさか島の南東部のグアンタナモに行ってしまうとは、計算外でした……。それに……」

「酷いものだったね。あの基地」

「ええ。噂には聞いていましたが、あそこまでとは……」

キューバ島に上陸する時に、方位が少しずれて、上陸予定地のサンティアゴ・デ・クーバではなく、あの悪名高いグアンタナモ基地に流れている。それで9ミリルガー弾欲しさに恐る恐る忍び込んでみたら、ゴーストタウンの比じゃないレベルの怖い空気が漂う場所だった。

ショツカーのKZ 並みに寒気がする場所なんか後にも先にもあそこだけしかない。

「収容所なんてどこもあんなものさ」

「見たことあるんですか?」

「あれよりマシンなところに暫く閉じ込められて、あそこ並み、いやもしかしたらそれよりも悍しい場所を一度見たことあるよ。その後、ショツクで1週間寝られなくなった」

人間を人間らしく扱わないとどうなるか、あの光景は死ぬまで忘れられないと思う。

「それはまた……」

「ああいう光景は二度と見ないようにするに越した事ないよ。さて……、明日はいよいよ海の向こうのアメリカ合衆国入りか」

「今までの国よりも荒れ具合は酷い可能性が高いです。気を引き締めていきましょう」

次の日の朝、フロリダ海峡に面した海岸まで行くと水平線の向こうに紫色の霧が立ち込めているのが見えた。

「あつちにアメリカがあるんだよね」

「その筈ですよ。方位は合ってますから」

コンパスとにらめっこしているエルフナインちゃんの言う通り、アメリカのある北東の方角に、例の物がある。

「アメリカ大陸に人はいないようだし、まさか毒ガス？」

「だとしたら厄介ですね。一体何のガスなのかわからないことには対処のしようがないですし、それに物資が汚染されていてダメになっている筈です。ここで補給は済ませていかないと」

厄介なことになった。四六時中、ライダー型のギアをつけてないといけない。流石の私も生身で毒ガスには太刀打ちできないもの。

深緑と黒がベースの野暮ったい見た目のギアを装着して、サイクロンに跨る。

「準備はできました？」

「はい。いつでもどうぞ」

防護服を着て、アシモのような見た目になったエルフナインちゃんがサイドカーに乗ったのを確認して、エンジンを吹かせてカリブ海に飛び込んだ。

「確かハバナとキーウエストの間は、170キロくらいだったよね」

「はい。正確には171キロです」

「なら1時間半で着くよ。天気も良いし、波も荒くないから、カリブの水をまた飲む事にはならないだろうね」

「海の水は飲み飽きました。塩っぱくて苦いのは、もう御免です」

キーウエスト島に近づくにつれて、霧が濃くなった。それとともに

頭のバイザーに、霧が有毒物質である旨の警告が表示された。

「成分は……、シヨッカー製のトルネードに似ている……」

確かアウシュヴィッツなどのKZのガス室で使われていたツイクロンBの改良品だった。毒性が増しているのは勿論だけど、気体の重さも増したことから大気中にばら撒いても効果があるようになってるんだ。だから外で使っても、密室に流し込むのと同じ状態になると本郷さんが言っていた。でもコストパフォーマンスがかなり悪いとかで、製造数は他のガスの10分の1以下ってガス保管庫の資料に書いてあったような。実際に倉庫の中には30個くらいしか缶は無かったから、多分嘘ではない。じゃあ何故こんなに充満しているんだろう。

「こつちでもガスを作っていたか、それとも魔人の成分か何かか……」

兎に角、アメリカ全土が謂わば巨大なガス室と化しているわけだ。ずっとこの格好でいないと死ぬのは避けられない。

「エルフナインちゃん、防護服は絶対に脱がないでね」

「このガスの正体が分かったんですか」

「うん。シアン化水素の毒ガスだよ。簡単に散らばらないようになってるけど……」

「となると、この辺り一帯はガス塗れですね。除染作業が大変そうです」

「できそう？」

「薬品さえ揃えてもらえたらどうか……。でもこれだとフロリダ半島への上陸もままなりませんよ」

「一先ず、汚染されていないところを探そう。全部が全部汚染されているとは思えないから」

そう言っただけキーウエスト島から距離を取り、大西洋を北東に進んだ。

半日かけて海を走ると霧が出ていない島を見つけた。バイザーによるとプレジャー島というらしい。

サイクロンを走らせて海岸に上陸し、島の中を調べてみると、特に有害物質は検知されなかった。ここならある程度はマシと見ていいようだ。

農村で小さな納屋を見つけて、プラネテューヌから送ってもらった除染用のスプレーをお互いにかけて、中に入った。

「ここは何とか大丈夫みたいだけど、アメリカがこの有様だとユーラシア行きは確定になりそうだね」

「ええ。大西洋横断の方法を考えましょう」

防護服を脱いだエルフナインちゃんは、早速地図と鉛筆を取り出してルートの構築に取り掛かっていた。ただ当初の予定のルートとは違い、大西洋には陸地が少ないから簡単には立てられそうになかった。

「ここから真っ直ぐ東に行くという方法は無理そうだね」

「その場合だと、短くとも2日間は陸地に上がれないと思います。カリブ海の時のように遭難すれば、今度こそ2人揃って大西洋の藻屑となります」

「やっぱりそこが問題か……」

流石に半日以上の上陸は無理だ。高速道路のSAのように休憩できる場所がある。しかしそんなものは何処にもない。

「南に引き返してプエルトリコ辺りからアフリカ目指して行くのも……、駄目だ。大して変わらない」

「南が駄目なら北はどうでしょう。北極圏を通過することになりますけど、陸地はまだ多いです」

「具体的には何処をどう通るの？」

「このままカナダまで北上して、まず北極諸島を目指します。そこからはグリーンランドとアイスランドを経由して、スコットランドへ行きます。このルートなら直接大西洋を横断するルートや南に引き返してプエルトリコやカーボベルデ、アフリカ大陸を経由するルートよりも、海上を走行する時間が短くなる筈です」

確かに距離としては北ルートの方が陸と陸の間が短い。ただちよつと心配な事がある。

「毒ガスの広がり具合で、このルートも駄目になるね」

今の所、アメリカ本土だけにガスは発生しているけど、広がり具合によっては隣接している北極諸島も汚染されている可能性も高くなる。そうなると南ルートと大差ない状態になってしまう。

「そうですね。その為にも先ずはガスの出所を破壊しましょう。ガスの広がりを抑えないと日本列島も危なくなるかもしれません」

「取り敢えずイストワールさんに連絡して、衛星写真を撮ってもらって、それを分析しようか。闇雲に探しても仕方がないから」

「毒対策の為の亜硝酸アミルも頂けそうなら頼んでおいてください。複製の為の機材は錬金術でどうにかできますが、薬品は信頼性の高い既製品を使いたいので」

「分かった」

夜になって、衛星写真とエルフナインちゃんが所望していた亜硝酸アミルが届けられた。

懐中電灯に黒紙を巻きつけたのを吊るし、その下で写真を2人で見る。

「どうやらテネシー州が、一番濃度が濃い地域そうですね……。中でも酷いのが、オーク・リッジ周辺です……」

「ということは、件の研究所周辺はガス塗れ……。ああ、なんてこった……」

地図と写真を見比べながら、ガスの大体の出所を予想するとその街だった。これでは聖遺物があつても危なくて使えない。

「毒ガスで聖遺物が駄目になることってあり得る?」

「僕が知る限りでは、そんな事は無かつたと思います。ですが、もしかするとそういう性質の物もあるのかもしれない。それに無事な物でも除染せずに使うのは、言うまでもなく危険です」

何だかオーク・リッジに行く気が無くなってきた。何のメリットも無い可能性が高いからだ。この様子だと、街自体が魔人に一度破壊されているだろうし、その時に聖遺物なんか駄目にされている筈だ。連

中は、わざわざそんな物残しておくような馬鹿では無い。

「いつそのこと、オーク・リッジは捨て置かない？」

「駄目ですよ。毒ガスを止める必要があるのを忘れたんですか」

そうだった。まあ、発生装置が置いてあるだけかもしれないし、行くだけ行ってみよう。

「プレジャー島からオーク・リッジまでは、片道で大体8時間ほどですね」

「片道8時間か……。脱出までに防護服が持つかな？」

耐久性が最も高い物を送ってもらったのだが、それでも一回の使用につき17時間が限界になっているからね。だから道路事情次第で、エルフナインちゃんはかなり危ない状態になる。

「緊急用に小型のガスボンベを取り付けて置きましたから、いざという時はそれを使います」

「さつき防護服を改造していたのは、それだったのか……。なら良いや。いつでも出られるように……」

そこまで話した時だった。妙な音が外から聞こえたんだ。何かが飛んでくる音。

直ぐに懐中電灯を消してギアを装着し、レーダーで敵の正体を探りつつ、サイクロンがいつでも発車できるようにエンジンを掛ける。サイドカーの風防も閉じておく事を忘れない。

「何が来たんでしよう」

「今調べている……。兵隊だ」

「未来さんのクローンですか」

「そう。久しぶりのご対面ときたよ」

しかし一向に降りてくる気配がない。でもただの偵察かと思いきや違った。

連中の代わりに空から爆弾が降ってきたんだ。

爆発と同時に小屋をサイクロンで飛び出す。まさかシンフォギアを使って、空襲を仕掛けてくるとは思わなかった。いつの間に、神獣機は爆撃機になったのか。

兵隊は次々と爆弾を落としてくる。ただ私達を直接狙っている訳ではないようで、そこら中の家や畜舎、牧草地にもドカドカ落としていた。どうやら逃げ場を無くして、このまま蒸し焼きにでもするつもりらしい。

「単車を火車に……。ははあ……。地獄への直行便ということか……。面白くないね」

まだ火の車に乗せられる程、歳を取った覚えはない。そのうち乗せられることになるのは、目の前で燃えている火を見るよりも明らかだが、今すぐに切符を使う羽目になるような腕は生憎持ち合わせちゃいない。

「エルフナインちゃん、ちよつと空の旅に出るよ……！」

240キロまで加速し、倒れた看板をジャンプ台にして、空中へと飛び上がる。

滑空しながらアームドギアを取り出して、目に入った3体に閃光を発射する。

「おや……」

狙い撃ちしたわけではないからあつさりと躲されたが、動きが鈍い。多分、爆弾を積んでいるからノーマルタイプより重いのだろう。「見かけは同じだ。なら爆弾が積みそうな場所なんかたかが知れている」

1人の足目掛けて細めの光線を浴びせる。するとそこから火を噴いて、爆発を起こした。

「少しは入れる場所を考えろ。ダーク・エンジェルス」

舌打ちをして、アームドギアを構え直す。おそらく向こうの爆弾もアームドギアの一種だろうから、無限に湧き出す物に違いない。重さから逃げられない筈だから掃射で簡単に片付く。

「おわつとー」

しかしそうは問屋が卸さなかった。背後から増援が攻撃してきた

んだ。しかも動きが素早い。やられた、あの爆撃機は囚か。前にいる連中も扇は使えるから挟み撃ちされる形になる。おまけに下を見ると紫の霧が立ち込めている。どこに行こうとマシな状態にはならない。

「迂闊だった」

仕方がないからサイクロンを霧の中へと降下させた。あのまま滑空を続けて、移動手段を叩き潰されるよりかはマシだ。奴さん達もこれを狙っていたのだろうし。

舗装路を見つけて着地し、エルフナインちゃんの安否確認をする。

「エルフナインちゃん、予定よりも早く突入したけど大丈夫？」

「今のところ大丈夫です。それよりもサイクロン号の損傷具合の方が心配です。走行に問題はなさそうですか？」

「走行には問題ないけどね……。いつもに比べたらスピードは50キロほど落ちそうかな」

降下した時に受けた攻撃の所為で、エンジンの調子が悪くなってしまったようで、あまりスピードが出せそうにない。

「80キロくらいがやっとだろうから、一刻の猶予もないよ。直ぐに行こう」

国道74号線の標識を見つけ、一路西へ向かう。

スピードが落ちているから、大体片道9時間程になる。さつさと力タをつけないと、エルフナインちゃんが酸欠で死ぬ。ガスボンベは壊されたらどうにもならないから、あまり当てにはできない。

「酸素入りのガスボンベはどのくらい持つ？」

「急造品なので3時間がやっとなです」

「解毒用のアミルのボンベもそのくらい？」

「はい。ただこちらはそれ程使う機会はないかと。未来さんにも一つお渡ししておきます」

「ありがとう」

ガスボンベを受け取り、マフラーの中に仕舞い込む。

「御守りがある分、心配の種は減ったな……」
対策に対策を重ねるのは、大事なことだ。」

chapter 8. 中毒

国道74号線は、俗に言う酷道と化していた。

至る所穴だらけで、走り難いつたらありやしない。サイクロンはオフロード車だからまだ良いが、普通の自動車なら碌に走れない状態になっている。

「おまけに周りは廃墟だらけ……。ジャマイカと違って、基礎が少し残っているだけだ。これが経済力と軍事力にものを言わせてきた超大国の末路だとすると、物悲しいな」

これなら開拓時代の方が絶対に物があつただらう。何にもない荒野ではなかった筈。

「草一本すら生えてないですね。他の毒素も含まれていそうです」

「でも枯れ草も枯れ木もないよ。単純に焼き討ちか爆撃されたという線もあるかも」

「今となつては知る由もないですね。知つたところでどうにかなるわけでもないでしょうけど」

オーク・リッジに辿り着くと、そこはもぬけの殻だった。あつたのは、大きな煙突の付いた炉と制御装置だけ。私達が来る前に逃げ出したか、はたまた前に一杯食わされた時と同じで、これ自体がそもそも囷か。

向こうとて、こちらがいつまでも毒ガスの中を動き回れる訳ではない事ぐらい把握している筈だ。それに私達がここに必ず来るとも恐らく踏んでいたに違いない。魔人との実力差を手っ取り早く埋めようとするなら、聖遺物が保管してあるここを捨て置かない訳がないから。

「聖遺物ももう無いだろうね」

「肝心の施設がこの有り様では、もう……」

エルフナインちゃんが目を向けた先には、砂地が広がるだけで何も無い。こんな所探してもゴミ一つ見つからないだろう。

「仕方ないから機械だけでも壊していくか」

制御装置の電源を落とし、蹴りを5発入れて使えなくする。残ったガス炉もアームドギアを投げつけて、煙突を倒壊させて破壊しておく。

「何処に行こうか？」

「手掛かりになる物でもあれば……、あれ？ 装置の中に何か入ってますよ」

制御装置にできた穴にエルフナインちゃんが身体を突っ込んで、四角い物を引っ張り出してきた。開けてみると液晶画面とDVD用のディスク挿入口が有る。ポータブルDVDプレイヤーだ。

「何でこんな物が」

「ディスクは……、入ってますね。でも何も書いてないから、内容は分かりません」

「一先ず再生してみる？」

「罠の可能性がありますが、現状では敵の行方が分からない以上、このディスクも調べないといけませんね。そうしましょう」

こうして2人で砂の上に腰掛けて、DVDプレイヤーを起動させる事になった。こればかりは不発じゃないことを祈る。

電源を入れると、10秒ほどしてから本編が始まった。

「よくぞ、ここをめつけたねえ……、ヒツヒツヒ……」

画面に出てきたのは、造花のような頭の魔人だった。見かけによらず、魔女みたいな話し方をする。

「でもねえ……。アジトはここだけじゃないのさ……。ほれ、この通り……」

そう言っただけで地図を画面いっぱいに映し出した。見ると地図の上には、赤丸が付いた場所がここを入れて合計6箇所ほど有る。全部大西洋の近くに有るけど、南はジャクソンビル、北はカナダのプリンスエドワード島と範囲が広すぎる。

「アタシは、この中のどこかにいるよ……。でも1時間おきに移動す

るから……。アタシを倒したければ、よく見極めて行動するんだねえ……。ヒツヒツヒ……。全部のアジトを壊せば良いと思うかもしれないが……。お前たちにそんな時間はとてもないだろうさあ……」

映像はここで終わり、代わって10秒という表示が出た。

嫌な予感がして慌てて投げ捨てると、プレイヤーは空中で爆発した。

「古臭い手を使う……。それよりもどうしよう」

あんなにアジトがあつたのでは、とてもじゃないけど手が回らない。

一個一個潰したんじゃ、2人とも死んでしまうのは目に見えているから、そんな悠長な事はできない。

「恐らく近場には、逃げ込んでいないと思います。僕達を自滅させる為には、少なくとも9時間は逃げ回る必要があります。敵がそこまで把握しているとは思えませんが、なるべく長く僕たちを引っ張り回そうとするはずですよ」

「なるほど……。となるとここから近いアトランタとジャクソンビルは候補から外れるね……」

残りはニューヨーク、ポートランド、プリンスエドワード島とかなり離れた場所ばかりだ。

「じゃあニューヨークに急ごう。ここからニューヨークまではどのくらいかかりそう?」

「直接行けば大体14時間かと……」

14時間だと、制限時間をオーバーしてしまう。

「ボンベはどのくらい持つ?」

「3時間です」

全然ダメだった。

「仕方がない。海を目指そう」

来た道を引き返してノースカロライナ州に戻り、一路大西洋を目指す。

「エルフナインちゃん、呼吸の方は問題ない？」

「はい、なんとか。でもボンベ無しだと、もう1時間も持たないです」「そう……。こっちもちよつとばかし危なくなってる」

バイザーに50分以内にガスのない場所に行けって警告が出る。なぜかは知らないが、シンフォギアを装着していても、こんな所に長く居るのは不味いらしい。酸素のない宇宙ではなんとも無いのに。

「やった、海だ！」

残り20分で海沿いの街に辿り着けた。

ほつと胸を撫で下ろしていると、空からヒューツと音がした。

サイクロンを加速させてそこから離れると、後ろから爆発音が聞こえた。どうやらそう簡単には通してくれないようだ。

「エルフナインちゃん、ここの通行料はいくらだろうね」

「僕たちの命を差し出せば、大人しく通してくれると思います」

「確かにそうだね。でも私達貧乏だから関所破りというか」

エルフナインちゃんを抱えて、宙に浮き、仰向けの状態でアームドギアから光線を乱射し、空爆できないように上空の兵隊を散らす。

そのまま地面スレスレの状態で飛びながら闇雲に光線をばら撒いて東に急ぐ。

「未来さん！ 前！」

そう言われて前に目を向けると、道が二股に分かれていた。バイザーに近道と表示された右の道に進路を取り、猛スピードでそこに突っ込んだ。

しかしこれがいけなかった。というのもこの道は両側に建物が連なり、道も少々細かったんだ。

おまけに軌道修正したときに、対空攻撃を休めてしまった。それで態勢を立て直した兵隊達が、建物を崩しにかかったのだから堪らない。

瓦礫にぶつからないように、巡航速度を落とさざるを得なくなるし、そのせいで相手に追い込みやすい状況を作ってしまった。し

かも毒が回ってきたのか、身体の動きが鈍くなっている。

「うわッ！」

「グッ！」

遂に瓦礫の一つに頭から突っ込んでしまい、失速して地面に叩きつけられた。

「いつつ……。エルフナインちゃん、大丈夫？」

「未来さんが抱えていてくれたので、何とか……。でもスーツの損傷が酷い上に……」

「そこから先は言わなくてもいいよ。兵隊どもが私達を取り囲んでいて逃げられないでしょう」

こつくりと頷いたエルフナインちゃんが目を向けた先には、20人の兵隊がアームドギアを構えて立っていた。そして私の目が向いている方向やその他の場所にも夥しい数の兵隊達が待機している。

「通行料の取立ってってこんなに厳しいんだね。私、知らなかったよ」

「料金を支払っても……。見逃してくれそうにないですね……」

兵隊達に捕まった私達は、アトランタに連行された。そこに魔人ごと、ドクトルがいたんだ。近場ならかえって探しに来ないだろうって考えていたんだと。それを聞いたエルフナインちゃんは、愕然としていた。

「僕の判断ミスでした……。ごめんなさい……」

「気にしないで。私こそ、判断ミスで細い道を選んでごめんなさい」

これが、別々の独房に放り込まれる前に交わした最後の言葉。この「最後」が「最期」にならないように、無い知恵を絞っているが、良いものが思い浮かばない。

それに閉じ込められる前に吸わされたガスのせいで、手足に力が入らない。だから手足を縛っている縄を引きちぎることもできない。こういう時の為に用意していた道具を使おうにも、身につけているものは、ほぼ全て取り上げられたからそれも無理。飛行艇の話の時のルパン三世みたいに、下着しか残ってない悲惨な状態。

でも早く逃げ出さないと、私もエルフナインちゃんも何をされるか分かったものじゃない。

「ふぬぬぬ……」

何とか拘束を解こうと、私はひとり手足をばたつかせていた。

「お姉様あ、お飲み物持ってきましたよお」

拘束を解こうと悪戦苦闘していると、見張り役のクローンがペットボトルを持って、監房の中に入ってきた。

「どうせ解けないんですからあ、そんな御無理をなさらなくてもお」
「うるさい」

自分と同じ声と顔をしたやつが、甘ったるい喋り方をするのは、気持ちが悪いつたらありやしない。

「どうせ明日には殺すつもりなんですよ。もうほつといてよ」

「拗ねないでくださいよお、みつともない。それよりもこれえ」
「いらない」

そんなシヨツキングピンクの気泡の立っている液体なんか飲めるわけない。

すると一向に飲もうとしない私を見たクローンが、ニタリと笑ってこんなことを言い出した。

「そっかあ。それならあのチンチクリンに飲ませますねえ」
「待って！」

エルフナインちゃんに、そんな不気味な物を飲ませるわけにはいかない！

「私に飲ませて！」

「それが人にものを頼む態度ですかあ？」

「の、飲ませてください。お願いします……」

「そうそう。人に物を頼む時は、腰を低くするものですよお」

そう言いながらペットボトルのキャップを開けて、飲み口を私の口の中に押し込んだ。

ピンク色のどろっとした液体が、喉に流れてくる。

味は意外な事に甘くて美味しかった。それに身体がなんだかふわっとする。

「これ、何?」

「教えるわけないじゃ無いですかあ」

空のペットボトルを片手に、クローンは出て行った。

その後、6日間はあのジュースを飲まされ続けた。

変な見た目なのに、美味しくて飲むのをやめられない。だんだん飲む量が増えてきて、最後には飲んでないと身体の節々が痛み、イライラするようになった。頭もぼーっとして、ジュースのこと以外は、何も考えられなくなった。

「もつろ……、もつろ……、くらさい……」

ジュースをたくさん飲みたくて、呂律の回らない舌で懇願しながら、看守さんに縋り付く。

「でもねえ、これ以上は飲ませるなってドクトルが」

「そんなの知らないよお。なんれもするから……、おねがい」

「あーあ、完全に依存症になってるよ。まあ、良いや。分かった。明後日、お前と一緒に捕まえた奴を殺せば、好きなだけ飲ませてやるよ」

一緒に捕まえた奴? エルフナインちゃんのこと? そんなのダメ。絶対に出来ない……、出来ない……。でも……。

「いいよお。ころすからあ、いっぱいのみませてえ」

身体が言う事を聞いてくれなかった。ジュースがないともうまともにも身体が動かないって。

「キヤハハハ。1週間前は彼奴を守る為に飲んだのに、今度は飲む為に殺そうとするなんて傑作だねえ」

エルフナインちゃん、ごめんなさい。私、ジュースの奴隷になつてしまいました。

あの子への申し訳なさを感じながら、2リットルのペットボトルでジュースを注ぎ込まれて、私はうっとりしていた。

墮落してしまつた次の日、私は怪しげなカプセルが3台並んでいる部屋に連れてこられた。

「これ、らに?」

「調整器だ。ジュースの成分を増幅させる事ができる」

「すつごおい……、あら?」

真ん中のカプセルにエルフナインちゃんが入れられていた。そつか、エルフナインちゃんも墮ちちやつたんだ。なら私も気兼ねなく深みにはまれるよ。

「お前はこのカプセルだ。早く入れ」

「ふあい」

カプセルの中に押し込まれて、生温いジュースに溺れてウトウトする。こんなことならもつと早く墮ちていれば良かった……。

エルフナインちゃんを始末する日の朝、もつと入っていたかつたけど、カプセルから出される事になった。

「ほら、ギアを装着してみろ」

「ふあい……」

ボケた頭のまま、聖詠を詠唱して、神獣機を装着する。

エクストライブモードになつていたのは有難いけど、何だか紫色が毒々しくなつていて、白の部分も所々この兵隊のギアと同じシヨツキングピンクが混じつた趣味の悪い配色になつている。髪の毛も白とピンクの2色になつている。

おまけに首に大きな枷が取り付けられていた。結構重いし、動き難い。

「これ、外してくれませんか?」

「ダメだ。逃げられたら困る」

「そんなことしませんから。これじゃ動き難いです」

「つべこべ言うなら、ジュースは今後一切やらん」

それはやだ。あれがないと生きていけない。慌てて看守さんに頭を下げた。

「ごめんなさい。わがまま言いませんから、それは勘弁してください」
「ふん」

枷に繋げてある鎖を持った看守さんに引き摺られて、刑場に向かう。

「エルフナインちゃんは何？」

「彼奴ならお前と入れ違いでカプセルから出した。あとはぐっすり寝込んでいたから見張りが楽だった。今も刑場でおとなし……」

その言葉が終わらないうちに、私が行こうとしているところから爆発音がした。

「な、何だ！」

看守さんが鎖を手放して駆け出し、刑場に入ろうとした時に足に火炎放射が直撃して爆発した。

「何があったの？」

私も中に入ろうとすると、鎖をぐっと引っ張られた。

「今、入っていけない」

声の主を確かめようと振り返ると、どこかで会ったような白服の人がいた。

「お前の相方を暴れさせている。ドクトルの部隊ももう間もなく壊滅するから暫く待て」

「そ、そんなあ……。それじゃ、ジュース飲ませてもらえないよお……」

「それならレシピでも探せば良いだろう。では……」

そう言い残して、白服の人は消えてしまった。

「あ、あれ。ここは……」

気がつくのと、僕は壊れた金の豎琴を片手に、ただっ広い広場の真ん中で倒れていました。周りを見回すと、ドクトルや部下のコピー未来さんが息絶えています。何があったのでしょうか。

「えっと、確か僕は……」

未来さんとは別の独房に閉じ込められてから、怪しげな液体を目が

覚めている間、ずっと飲まされていました。

3日間飲まされ続けて、その後1日放置された後、禁断症状に耐え切れなくて、ずっとあれを飲ませてもらうことを条件に、未来さんに手をかける事を了承してしまいました。

それからは3日間、液体で満たされたカプセルに閉じ込められて、未来さんと入れ違いで独房に戻されてから……、ダメです。そこからの記憶がありません。思い出そうにも、何にも出てこないです。

「敵の脅威は一先ず過ぎ去ったから、未来さんと合流しないと……」
直ぐに未来さんを探そうとしましたが、身体が全く動きません。それどころか痛くて痛くて仕方ないです。

「グアアアッ！ き、禁断症状が……」

あの液体の呪縛からは、まだまだ逃れられないようです……。

エルフナインちゃんの悲鳴が聞こえて、ボケた頭が覚めた。

鎖を引き摺りながら急いで刑場に飛び込むと、そこでエルフナインちゃんが目を見開いて、体をガタガタ震えさせていた。

「エルフナインちゃん！」

「え、液体……。液体が……」

謔言のようにジュースのことを呟くのを見て、私は急いでエルフナインちゃんを抱えてカプセルのある部屋に向かった。

そして使われた形跡のない物を叩き割って、そこから溢れ出したジュースをエルフナインちゃんに飲ませた。

「禁断症状が治まればいいけど……」

飲ませてから暫くすると、エルフナインちゃんが息を吹き返した。

「こ、ここは……」

「カプセル室だよ……」

「未来さん、無事だったんですか……」

「いや、無事じゃないよ。エルフナインちゃんと同じで、ジュース無し

じや生きていけそうにない体だから……」

「そんな……」

でもそんな事、今はどうでもいい。ジュースに取り憑かれていたとはいえ、とんでもない事しようとしていたのだから。エルフナインちゃんが暴れていかなかったら、今頃取り返しのつかない事態になっていた。

「それよりもごめんなさい。ジュースと引き換えに、貴女を殺そうとしました」

「未来さんもそうだったんですか……。実は僕も同じ取引を持ちかけられて、乗ってしまっただです。ごめんなさい……」

お互いにお互いを襲おうとしていた事が分かって気まずくなり、明かりのない部屋の中で2人して黙り込んでいた。何を話せば良いのか分からなくなつて。

「そうだ……」

あの弾丸の事を思い出して、すつと立ち上がる。

「どうしたんですか……。未来さん」

「持ち物を処分されてさえないなければ……」

通路を走つて、私たちの荷物の置き場所を探す。

闇雲にドアを破壊して回ると、14個目のドアを壊した時に私の目当ての部屋を見つけられた。

「良かった……。処分されてなかった……」

「はい。でも何で持ち物を？」

「今回みたいな事があった時に、うってつけの物があるんだ……」

ワルサーP38の弾倉から弾を取り出して、一番奥にしまっていた弾丸を納屋で拾った9ミリルガー弾用のデリンジャーに装填して、エルフナインちゃんに手渡す。

「これは？」

「Korrison 弾を装填しておいた。もし私がエルフナインちゃんに襲いかかるような事があれば、それを私に撃ち込んで。改

造人間殺しの強力な弾だから、当たれば一撃で倒せる」

「そんな銃、受け取れませんよ……。未来さんを撃つなんて、僕にはとても……」

「いや、今回の事で自分がいつ獣に戻るか分かったものじゃないって十分自覚したから、絶対に持つていて欲しいんだ。何かあつてからではもう遅いから。私の事を支えてくれてるエルフナインちゃんには、絶対に手をかけたくないの。お願いだから持つていて下さい」

返そうとするエルフナインちゃんに、無理矢理持たせる。自己満足なのは分かってはいるけど、この子には迷惑かけてばかりだから、これくらいはしておきたかった。

「分かりました……。でも条件があります。逆の場合は躊躇せずに僕を葬り去ること、あとこの銃を使わせないようにすること。この2つを吞んでください」

「分かった……。絶対に守る」

「絶対ですよ」

「うん」

それからはアジトの中を2人で手分けして、例のジュースのレシピや成分表を探し回った。脳味噌をぐずぐずにしかねないあれを作るのは気が引けたが、2人とも禁断症状が酷いことになっているし、解毒剤を作るのにも必要だったから。

1時間掛けてそれを見つけ出し、材料も残っていた物を掻き集めて、早速エルフナインちゃんが調合に取り掛かってくれた。

「エルフナインちゃん」

「何ですか？」

「魔人や兵隊達が黒焦げになって息絶えていたけど、あれはエルフナインちゃんが皆んな倒したの？」

「覚えてないです。カプセルから独房に戻された後の記憶が無くて……。フォークランド諸島で出会った人の声が聞こえた事までは、どうにか思い出せたのですが……。後は壊れたダウルダブラの竖琴を

持って倒れていた所からしか記憶にないです」

「そうなんだ……。実はその男、私の前にも現れて、エルフナインちゃんを暴れさせたって言ってたものだから、ちよつと事情を聞いておきたくて」

「ということは、あの人が僕に何かしら細工をして……」

「あるいは、あの子が守ってくれたのかもしれないね。彼のカラクリか、或いはジューズが起爆剤になって出てきたとか」

錬金術に関しては門外漢だからそんな事があるのかは知らないけど、あつたらあつたで悪い事ではない筈。エルフナインちゃん、放浪生活中も余った部品でそういう研究していたもの。

「そうかもしれないですね」

「きつとそうだよ。いつの日か会えるさ。それまでは……、絶対にエルフナインちゃんに、デリンジャーを使わせるような事はしない」

「お願いしますね」

「勿論」

2人がジューズ作りに精を出している頃、白神山地にてゼネラルは事の次第を首領に報告していた。

「アルラウネの奴は、あの2人を同士討ちさせようとしていたというのだな？」

「はい。しかしそのような事をすれば、貴方の目的の達成に支障を来すことになるのは、目に見えていました。その為、誠に勝手ながら、例の人造人間の中に眠る人格を暴走させ、ドクトル・アルラウネを始末させました。独断専行をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「いや、気にする事はない。お前の言う通り、あの2人のうち1人が欠ければ、聖遺物全てを破壊することが不可能になる。それでは元も子もない。独断専行は決して褒められた物ではないが、私の目的に沿った判断ではあるし、影響自体も殆どと言っていい程ない。そもそも魔人同士の手柄争いも今に始まった話ではない。その事を処罰したところで話は進まんだらう。この件については、不問に処す」

「ありがとうございます」

「但し、以後は慎め」

「肝に銘じます」

「それとゼネラルよ……。お前自身は、破壊されることを躊躇していいかい？」

「それはどのようにお答えすれば宜しいでしょうか？」

「芯から思っている事を話して良い。ここでお前が吐露したことは、全て忘れる事にする」

「分かりました」

一拍置いてからゼネラルは再び口を開いた。

「躊躇していない訳ではありません。道具と雖も一欠片も壊れることなく、最期を迎えたい物ですから。なれど……」

「なれど？」

「私を壊す人物がよく知っている者ならば、不思議と抵抗は無いのです。そしてただ壊されるのではなく、戦って壊されともなれば、全くと言っていい程、恐怖も戸惑いも感じません。これが私の本心です」

「そうか。良く分かった。その日までに十分に準備を整えておけ。下がってよい」

「はい。失礼しました」

chapter 9. デュラハン

まだ日本なら残暑が厳しい頃である夏から秋に差し掛かる時期でも、北極圏は寒かった。バルベルデも寒かったけど、やっぱり本物の北極圏の寒さは身に染みだ。

おまけに兵隊の群れが、どの海峡にも待ち構えているから一々相手をしなくちゃいけなかった。でもこれは大した問題じゃない。この時に体の調子がおかしくなっていることが分かったんだ。

具体的には、戦っている最中に体の動きが急に止まってしまったこと、それと物の動きがゆっくりと見えるようになったことの2つ。どちらも兵隊を蹴散らしている時に起きた症状で、原因は不明。

私の攻撃のスピードも急激に上がっているから、戦闘では別段問題ないんだけど、いったいどうしたんだろう。

アイスランドの温泉地へトルロイグで、私とエルフナインちゃんは冷え切った身体を温めていた。1ヶ月近くかけて北極圏を通過してきたから、お湯があるのは本当にありがたい。

「やつとこさヨーロッパに入れたね。明日か明後日には、いよいよアイスランド入りかな？」

「そうですね。海が荒れてさえないければ、スコットランドに順調に辿り着けると思います。遅くとも明後日には、アイスランドに入れると思いますよ」

「それは良かった……。それにしてもスコットランドか……」

スコットランドと聞いて、3年前のことを思い出す。

「あれは辛いし、怖いし、痛かったなあ……」

「どうしたんですか？」

「いえね、前に政治家の手伝いをロンドンでした事があるって話したでしょ。その時にね、貧困層向けの物資の横取りをする連中がいてさ、そいつら突き止めたのは良いんだけど、振り返りにあつて捕まって、スコットランドの元強制労働キャンプに連れ込まれてしまっ

「たんだ」

「そういえば、前にそういう場所に閉じ込められたことがあるって話してましたね。それでどうなったんですか」

「酷いもんだったよ。神獣鏡について聞き出そうと、死なない程度に電気を流されたり、ろくに食べさせもしないで20時間も野良仕事を休み無しで1人でやらされたり、サンドバッグがわりにされたりと、散々な目に遭ってね。最後は収容所を燃やして、何とか逃げ出せたんだよ」

「それは……、何とっていいのか……」

「でもシンフォギアのことをバラしたところで、1950年代の技術力しかないあの連中に分かるはずがないんだよね」

そう言って瓶に入ったジュースを一口飲む。

「脳味噌がセメントで出来てるような人達だったもの」

「そうですか……。ならこのジュースを飲ませた方が良くもしませんね」

エルフナインちゃんも一口ぐびつとジュースを飲む。

「確かに……、硬い脳味噌を溶かすのには、うってつけなのかも知れないね……」

脳味噌をグズグズにされた私達が言うのだから間違いない。

テントの前で焚き火を囲み、また2人でジュースを飲む。桃とさくらんぼを混ぜたような味で、ずっと飲んでいたくらい甘くて美味しい。

「もうやめられそうにないね……。解毒剤なんか無いし、飲み続けないと私達死んじゃうらしいし……」

ここまで来る途中にあった全てのドクトルの基地の中を探し回ったのだけど、見つかった解毒剤のレシピは殆ど偽物で、飲まないで死んでしまうレベルにまで依存を酷くしただけだった。プリンス・エドワード島で本物は見つかったんだけど、調合にはドクトルの体内にある毒素が必要で、作る事なんて最初から無理だった。

結果として、2人揃って重度のジュース依存症患者になってしまっただけだった。

「薬物依存等と違って、治療などすれば希望がまだ見えるわけでもないですからね……。でも止められるとしても、僕にはその自信がないです……。今だって、溺れるくらいこれを飲みたくて……」

「私も……。本当はそうしたい……」

禁断症状を抑えるのに必要な量だけ飲むということにして、1日につき1リットルまでに行っているけど、全然足りない。一気に20リットルぐらい飲みたい。飲みたい、飲みたい、飲みたい。飲みたい。起きている間は、他のこととしていないと、それだけしか考えられなくなってしまう。

「全部片付いたら、半永久的にジュースを作り続けて、どんどん口に流し込んでくれる装置でも作ってみようかとも思ってます……。アトランタのアジトでは、身動きの取れない状態でタンクから絶え間なく注ぎ込まれてましたから……。そのくらいしないと、もう満足できそうにないです……」

「ああ……。それ魅力的……。想像しただけで気持ち良さそうだと思うもん……。出来たら私にも使わせて……」

「いいですよ……。2人で溺れましょう……」

結局、私達2人はもう深みに嵌って、堕ちるところまで堕ちるしかないみたい。でもそれならそれで良いと思えてしまう。だってどうすることもできないんだもの。

「もう寝ようか……。起きていたら飲みたくなるから」

「そうしましょう」

焚き火に水を掛けて消し、テントの中に引き揚げて毛布を被る。

「私が寝ている間にこっそり飲まないでね」

「未来さんこそ。おやすみなさい」

「おやすみ」

朝の5時に目を覚まして、出発の準備をする。天気は晴れ。大西洋

は平穩無事。

「ようやくチェーンが外せるね」

タイヤから外したチェーンをサイドカーに仕舞い込み、テントをリユックサックの上に巻き付ける。

「エルフナインちゃん、スキットルにジューズは入れ終わった？」

「はい。今日1日分のは、用意できました」

手渡されたスキットル5個のうち、1個を飲み干して空にする。もう食事の代わりになってしまった。

「一先ずは、首都のレイキャヴィクを目指せばいいのかな？」

「はい、そこから大西洋に入って、後はスコットランドまでひたすら走らせてください。天候がこのままなら半日くらいで辿り着ける筈ですから、多少寄り道しても問題はないと思います。本命のアイルランドには、明日到着予定と考えておいてください」

「わかった。早速行こうか」

こうして私達は、状況打開に繋がりそうな聖遺物を探しに南へ向かうのだった。

「機雷は設置されていませんね」

「見たいだね。それが怖いからサイクロンで来たけど、ボートでも大丈夫そう」

浮遊機雷を警戒して、ボートは避け、サイドカーに沿岸警備隊の武器庫から失敬したMG3を取り付けたんだけど、その機雷も敵襲もなかった。

「浜辺で待ち構えているのでしょうか？」

「かもね。上陸した途端に一斉掃射とか」

「身震いしますね」

そう言いつつ、エルフナインちゃんはサイドカー内蔵の無線機を弄っていた。フォークランド諸島を出た時から生存者がいないか探す為にしているのだけれど、未だに誰とも通信が取れずにいる。

「どうだろう？ ヨーロッパには、誰か生きていそう？」

「駄目ですね……、何の反応も……」

そこから言葉が続いていない。

どうしたのか気になり横を見ると、注意深くダイヤルを回しているのが見えた。

「どうしたの?」

「話しかけないでください。今、この辺りでヒットが……。繋がった!」

「生きている人が居たの?」

「はい!」

エルフナインちゃんが笑顔でそう返した。生き残りは、私達2人だけじゃなかったんだ。

「相手の位置は特定できそう?」

「はい。北アイルランドのロンドンデリー周辺です」

「キラシャンドラは近い?」

「サイクロンで1時間くらいの距離ですね」

「そこそこ近いね。分かった。それでこれからどうしようか。直接アイルランド島まで行く?」

もしかすると生存者の人が魔人に見つかるとはかもしれないし、なるべく早く会った方が良い気がする。

「そうですね。2時間長く海の上にいることになりましたが、生存者の方と合流できるならすべきかと思えます。グレート・ブリテン島は別に無視しても差し支え有りませんかから」

月が空に昇る頃、城壁が聳え立つ港町に辿り着いた。

「ここが、ロンドンデリー?」

バイザーだとこの辺りって指してるけど、月明かりしか照明がないからよく分からない。アイルランドは、一度も行った事がないものだから。

「間違い無いです。あの城壁は、昔見たことがありますからよく覚えてます」

「ここに来たことがあるの?」

「はい。ずっと昔ですけど、一時期住んでいました。ただ実際に住んでいたのは、キャロルなんですけどね」

エルフナインちゃんから意外な言葉が出た。あの子、ここに住んでいたらしい。南フランスのトゥーロン出身とはこの子から聞いていたけど、それ以外のプロフィールは分からずじまいだったから。

ともかくエルフナインちゃんが、この辺りに詳しいのは間違いない。案内役がいてくれるのはありがたい話だ。

「この地理に詳しい人が居て助かったよ」

「もう当てになりませんよ。250年も前の話ですから」

「あらら」

それじゃ、確かに無理だ。江戸時代の地図で東京観光するようなものだもの。

市内の建物には、目立った損傷は無かった。ここは戦場にならなかったのか? でも屍肉の臭いがするから、どうも引つかかるんだよね。今まで通って来た所は、大体ドンパチ騒ぎにあったのが分かる状態だったもの。世界一平和な国として知られているアイスランドですら、首都のレイキャヴィクは荒れ果てていたし。

「かと言って、住民がそのまま生活している訳でもない……」

何があったの、ここ。後ろと上から私達をつけている奴に、聞いたら教えてくれるかな。

「エルフナインちゃん、気付いてる?」

「はい。何人来てますか」

「私の勘だと、10人はいる」

「逃げ切れそうですか」

「わかんない。やるだけやってみるけど……」

私の言葉を聞いて、金物屋から持ち出した斧を取り出すエルフナインちゃん。私は私でアームドギアを取り出して、襲撃に備えておく。

「斧なんて使ったことあるの?」

「シャトー建設の際に何度か……。でも武器として使うのは、これで初めてです」

会話を終えてから1分もしないうちに、敵さんが襲いかかってきた。

3人ばかりが真上から飛び込んできたのを、サイクロンを左にドリフトさせて躲し、閃光を落ちてきた連中に浴びせる。

しかしこれまでの連中と違って、閃光が当たる寸前で飛び退り、建物の壁を蹴ってこちらに飛びかかってきた。

乱戦になるとアームドギアが邪魔になるから、サイクロンから飛び降りつつこれを1人に投擲し、腰にぶら下げていたワルサーP38を引き抜いて、効くかどうかわからないけど、残り2人にぶっ放す。

すると意外や意外。2人とも左胸を撃ち抜かれてひっくり返った。

「へっ？ 嘘でしょ？」

9ミリルガー弾喰らったくらいでやられるなんて……。私なら当たったら痛いくらいで済むのに。この子達はそうじゃないの？

「うわっ……、このっ！」

でも考えている暇は無かった。エルフナインちゃんが、新手の兵隊相手に苦戦していたから。

斧を受け止められて放り投げられたこの子を受け止め、地面に着地する寸前でワルサーを撃って、敵の額に風穴を開ける。相手にバイザーが付いていないから助かった。

「大丈夫だった？」

「おかげさまで。まだ安心はできないようですけど」

「まあ、1分あれば片付くさ」

取り返した斧をエルフナインちゃんに渡して、私は蝗の様に四方八方から飛びかかって来る兵隊に立ち向かった。

飛びかかってきた兵隊は、さっきアームドギアを足にぶつけたやつも含めて7人。まあ、そこそこの数。武器は、マリアさんが使ってい

るようなダガーと右腕についている機関銃。さつき戦った連中のことを考えると、こいつら機動力重視でかなり脆い。

「ゆっくり見られるから敵のことを探りやすいや」

ダガーを使って切りかかってきた1人を左手で殴り倒して獲物を奪い、左から来たやつとの右腕に突き立てる。

そいつを蹴り飛ばして後続の2人を躓かせ、右斜め後ろと前から襲いかかってきた奴に対抗しようとした時だった。

ガクンと身体から力が抜ける感覚がして、体の動きが止まってしまった。不具合だ。

向こうもその事に気がつき、私の喉を搔つ捌こうとダガー片手に目の前のやつが飛びかかってきた。

でも一足早く再起動が完了し、目の前の奴に右腕でアッパーカットを叩き込み、後ろから機関銃を発射しようとしていた奴には、後ろ蹴りを見舞って沈黙させた。

「一丁あがり」

「お疲れ様でした」

「怪我はない?」

「大丈夫です。やはり攻撃の速さが上がっていると、それなど時間はかからずに済みますね」

「うん。でも体が一々止まるのは、なんとかしたいよ」

話をしている時だった。目の前の建物から3人の新手が飛び出してきた。

「しつこいなー」

相手にしようとする、別の方角からワルサーよりも大きな銃声が3回して、兵隊が全員倒された。

「誰?」

「お邪魔だったかい」

聞き覚えのある声が出て、声が出た方を見ると此処にいないはずの人がいた。

「ハンナさん……」

オセアニアでお世話になったハンナさんが、拳銃片手に立っていた。どうしてここに？

「暫く見ないうちに随分変わったじやないか」

「は、ハンナさん……。どうして……」

「あー……。半年前にミクが入った地下道に潜り込んでな、それでここに来たんだよ……」

その言葉が終わらないうちに、ハンナさんに飛びついてしまった。

「ち、ちよつとミク。苦しいって……」

「し、知ってる人がいて良かった……。良かった……」

そのまま堰を切ったように涙が出てきた。エルフナインちゃんと2人だけで、ずっと行動していて心細かったからかな。

「その分だと、ここまで来るのに相当苦労してたみたいだねえ」

「うん……。あのね、あのね……」

勢いに任せて、今までの事をぶち撒けようとしたら、手で制された。エルフナインちゃんを置いてけぼりにしているって。

「今の住処だ。狭い所だけど、ゆっくりしていいよ」

あの後、ハンナさんのアパートに連れてきてもらった。

当然のことながら、ロンドンのアパートよりもずっと綺麗な部屋で、家具も多い。戸棚には、エルフナインちゃんと交信した時に使ったらしい無線機も置いてあった。

「前は、ここから南にあるキャバンの鞆工場の寮に住んでただけど、近くの施設に怪物が出た事件があつてさ。それ以来、ここに住んでるんだ」

「施設ってキラシヤンドラにある研究所？ 私達、そこに行こうと思ってるの」

「あそこならもう潰れてないよ。そうそう、そこに勤めていた友達が、

ポロポロになってこれを持ってきてさ」

そういつてハンナさんが、キッチンから大きなコーヒー缶を持ってきた。

「コーヒー缶がどうしたの?」

「中身はコーヒーじゃない」

手渡された缶を開けると、ヒビだらけの黒ずんだ腕輪が入っていた。

「これ何?」

「シエム・ハの腕輪っていうらしいんだが……、どういうものなのか、詳しくは知らないんだよ……。どうい物なのか聞き出す前に死んじゃったから。2人はどういう物か知らない?」

「私は知らないけど、エルフナインちゃんは知ってる?」

「はい。シエム・ハというのは、先史文明期の神の1人です。そのシエム・ハの右腕に埋められていたのが、その腕輪です。偽の未来さんが現れた3日後に南極で見つかったのですが、無力化していることが分かって誰も引き取らず、アイルランドの研究所で引き取る事になったと聞いています」

「ってことは、こいつ自体にはもう何の力もないってこと?」

「そういう事になります」

「なあんだ」

エルフナインちゃんの言葉に、ガックシと肩を下ろすハンナさん。私も何とか腕輪を一発逆転の秘密兵器に使えないかと考えていたものだから、当てが外れてガツカリしていた。

「それ、良かったら2人にあげるよ。私が持っても役に立ちそうにないから」

「あ、ありがとう……」

「何だか申し訳ないや」

「快く貸してもらえましたが……」

久しぶりに柔らかいベッドの上で2人寝ていた。疲れているだろ

うからって、貸してくれたの。でもその代わり、ハンナさんにはソファで寝てもらっているのが申し訳ないから寝つけないんだ。

「シエム・ハの腕輪か……。何の力もないとなると……。パワーアップは厳しいかも……」

どうしよう。これまではどうにか倒せてきたから良いけど、そろそろ厳しくなって来るだろうし。せめて互角に戦えるぐらいにはならないと。

「神の力は抜けきっていますし……。その証拠に真ん中の宝玉が壊れています」

「それさえあれば、あの時の響並の火力は得られたかもしれないんだよね……。神の力がそこらへんに転がってないかな……」

腕輪を翳して天井を見つめる。

「神の力が、道端のゴミみたいに転がっていたら大変ですよ」

「だよねえ……」

これ以上、考えても無駄だから前に貰ったぬいぐるみを抱えて寝ようとした時だった。

「あっ」

ぬいぐるみを見て、これを作ってくれたプルルートが、どうやって女神になったのかを思い出した。

「どうしたんですか?」

「神の力ではないけど、女神の力なら何とか手に入るかも……」

ベッドから降り、廊下に出てメールでイストワールさんに連絡を入れて、プルルートに取り次いでもらうように頼んだ。

すると10分後に通信が出来るようにしてもらえた。

「どうしたのお」

「いきなりで申し訳ないんだけど、女神メモリーって簡単に手に入る?」

「簡単じゃないけどお、手に入れる事はできるよお」

「無理は承知でお願いしたいんだけど、1個大至急見つけてもらって、私の世界まで送ってもらえないかな? あれがないと、私の世界が危ないんだ」

「良いよお」

割とあっさり了承してくれた。流石に女神の力の源ともなると、渋られるかと思っていたから。

「この世界で使うならともかくう、別の世界ならそんなに問題ないからあ。それにいい」

「それに？」

「そっちが潰れたら、あの時の可愛いミクちゃんまで遊べなくなっちゃうしい、ピーシエちゃんが悲しむからあ」

「そ、そう……」

私はすっかりおもちゃ扱いらしい。

「お昼寝の時間返上して今から探すからあ、待っててねえ」

「うん、ありがと。全部片付いたら遊びに行くね」

「はいはあい。色々揃えて待ってるねえ。もう一度、良い声で鳴かせてあげるう」

「お、お手柔らかに……」

「当てはつきそうかい？」

「ハンナさん……、起きてたの？」

部屋に戻ろうとすると、ハンナさんがドアを開けて出てきた。

「エルフナインからあんたが急に外に飛び出したって聞いてさ。様子を見に来たんだ。それで首尾はどう？」

「悪くないね」

「そりや良かった。ところでコーヒーでもどう？」

いつの間にやら用意されていたマグカップを受け取り、口に運ぶ。久しぶりに人が淹れたコーヒーを飲む。

「このこのコーヒーは、やっぱりあの大鋸屑とは違うね……」

あのガソリンのような酷い味のヴィクトリー・コーヒーを思い出すと、自然とこんな言葉が出てしまう。いつも飲んでるコーヒーと同じ味なのに。

「ほんと、もうあんなには戻れないよ。良いところだね、ここ」

「でももう何にもないよ。怪物に踏み荒らされて」

「見張りがいないだけマシさ。オセアニアじゃ、ミクがいなくなつてから半年後に、また前のやり方に逆戻りしちゃまって、息苦しくって息苦しくって……。政治屋やるのもきつかったんだ……。だからさ、思い切つてミクが通つた地下道に潜り込んだんだよ。穴を溶接して完全に塞いで、ロンドンに繋がる道をダイナマイトで崩落させてさ。あいつらが追いかけて来られないようにして、逃げ出してみたら……。向こうよりもずっと自由な暮らしが出来たもの。それにミクとも再会できてさ。物がなくても、ずっと幸せだ……。」「そっか」

コーヒーをまた一口飲む。

「ねえ、ハンナさん。私ね、ここに来るまでに美味しいコーヒーの淹れ方を覚えてきたんだ。今度、淹れてあげるね」

「へえ……。そりゃ楽しみだ。生き延びることが出来たら飲ませておくれよ」

「うん。でもその為に、お客さんを片付けないとね……。つたく、呼んでもないのに」

いやーな気配がアパートの周りから漂ってきたのを感じ取り、私はワルサーP38の安全装置を下ろしてスライドを引き、いつでも撃てるようにした。

「ハンナさん、マグナムの弾は残ってる?」

「ちよい待ち……。12発分はある。今入っているやつも含めりゃ、15発かな」

「そんなに余裕ないね。私もだけど」

予備のマガジンも含めて、残りの弾は16発。MG3も持って入ったけど、あんな物とてもじゃないが、室内では使えない。

「籠城するのは、不利だな……」

神獣鏡を纏いながら、私はそう呟いた。

部屋に戻り、リビングのドアに箒を立てかけて心張り棒代わりに

し、動かせる家具をその前に置いて、バリケードを作って侵入を難しくしておく。

「サイクロンは、この部屋の真下に止めてあるけど、そこまで行くのが……」

窓の外に兵隊の群れが居るから迂闊なこととはできない。

「PPKでは歯が立ちませんから、僕の場合は斧だけであそこまで行く事になります」

でもそれだとエルフナインちゃんが危ないのは、火を見るよりも明らかな話だ。さつきそれで1人倒すのがやつとだったから。

「となると、私とミクでエルフナインを守りながら逃げるしかないか」
「うん。まあ、その前に下ごしらえはするけど」

そう言いながら、窓の外にいる連中を散らす為に、MG3を発射可能な状態にしておく。

「いつそのこと、ミクが前やったように屋根を突き破って逃げる事が出来たら良いのに」

「そうしたいけど、空の上にも兵隊はいるだろうから無理だよ。それじゃあ、準備はいい？」

「良いよ」

エルフナインちゃんを抱きかかえたハンナさんがうなづいたのを確認して、私は窓を開け放ち、両手で抱えた機関銃をぶっ放した。

兵隊を機関銃で追い散らした私達は、窓からハンナさんを抱えてサイクロンに飛び乗り、東を指指して必死に走らせた。

「このまま何処へ行くつもり?!」

「特に決めてない! アイルランド島から逃げ出せたらそれでいい!」

でも敵さんはそう簡単には逃してくれない。上からアームドギアを使って、光線を雨やアラレのように降らせてきた。ハンナさんがS&W M66で抵抗しているけど、当たらない位置に逃げられてはどうしようもない。おまけに私も運転に必死で抵抗どころではなかつ

た。

そして攻撃を避けているうちに、サイクロンが岩にぶつかって横転し、私達は宙に投げ出されてしまった。

痛む身体を起こして、這いつくばりながら2人のもとへ向い、アームドギアを取り出して応戦しようとする、敵が何故か引き上げていった。

「何しに来たんだ？」

怪訝に思っていると、その答えが出て来た。かっぽかっぽと首の付いてない馬が引いている戦車が、目の前にやって来たんだ。

そしてそれに乗っているのが、この前ジャマイカで私の左目を叩き潰した魔人だった。そいつがあの時みたいに盥を抱えて、戦車から降りて来たんだ。

この前の予告通り、私の右目を潰しに来たのかと思いきや、奴は私に一瞥しただけで、ハンナさんの方を見てこういった。

「まだ死んでいなかったか……。まあ良し。今日は、小日向未来に用があるわけではないからな。用があるのは、ハンナ・オールウェイ、お前だ」

「どういう事さ？」

魔人は何も答えず、持っていた盥の中身をハンナさんにぶっ掛けた。

「血の入った盥に首無し馬……。まさかデュラハン?!」

「デュラハンって、確か人が死ぬのを伝え……」

エルフナインちゃんの考察通りだとすると、こいつはハンナさんに向こうに連れ去りに来た……? こいつの言動からしても、そのつもりで来たということが窺える。

「ハンナさん、逃げて！」

私の声に、ハンナさんは逃げようとするも、何かに絡まっているように、一歩も動けずにいる。どうしたんだ?!

「いやはやダグザの竖琴というのも、馬鹿にならん」

ダグザの豎琴……、ダウルダブラか！ あれの弦で身体を結え付けられてるんだ。拙い！

アームドギアを杖に立ち上がり、奴の前に立ち塞がる。

「大人しく退け」

「嫌だ……」

光線を連射して奴の胴体に当てるも、例によつて例の如く傷一つつきやしない。それでも構わず撃ちまくった。怯みでもしないかと思つて。

しかし痛くも痒くもない物に怯む筈もなく、手にした杖で私を簡単に突き倒し、ダウルダブラ・デュラハンはハンナさんの方に歩いていった。

それを止めようと右足にしがみつき、私は必死になつて懇願した。

「やめて！ ハンナさんを殺さないで！ 代わりに私はどうなつたつていいから！ 煮るなり焼くなり好きにしている！ だからあ……、だからあ……、殺さないで……。お願いだよお……」

鬱陶しそうに足蹴にされても、恥も外聞も無く泣きながら命乞いを続けた。

でも敵であるデュラハンが、私達に情け深い筈もなかった。

「終わったぞ。では今日はこれで」

そう言つて奴が姿を消した後、そこには左胸に短剣が深々と刺さつたハンナさんの冷たくなった身体があった。

テレビのスイッチが切れるような音がして、私の目の前が暗くなつた。悲鳴とともに。

chapter 10. もう限界

「なあ……、ミク……」

左胸に穴の開いたハンナさんが、口から血を垂らしながら私の首に手を掛ける。

「お前……、何であの化物を倒さなかった……？」

倒さなかったんじゃないやなくて倒せなかった。でもそんなこと言っただって納得してくれそうにない。

「その力があれば……、あいつにも勝てただろう？ それなのに……、それなのに……。まさか彼奴とグルだったのか……？」

私を絞め上げる手と声がドンドン小さくなっていく。

「お前と会わなければ……、まだ生きていられたのに……」

恨み言と共にドロドロとハンナさんは溶けて、血溜まりだけがあの人の立っていた場所に残った。

「私と会わなければ……」

「またお前の犠牲者が増えたな」

後ろから声がして振り返ると、首がひん曲がった海蛇男が私を見て嘲笑っていた。

「いい加減自覚したらどうだ。ヒーローごっこしたところで、犠牲者しか出ないって……。それも他ならぬお前のせいだ……」

「そんなことない……」

「前にいる連中を見ても……、それが言えるか？」

そう言われて前を見ると、身体の何処かしらが欠損している人やずぶ濡れの人が恨みがましい目で私を見ていた。その中には、S.O. N.G. の職員の人もいる。恐らく潜水艦で溺死した人達だろう。

「みんなお前の軽率さが生んだ犠牲者だ。お前が……」

「やめて……、それ以上言わないで……」

「お前さえいなければ、そいつら死なずに済んだのになあ」

「いやああああ！」

悲鳴を上げて飛び起きた。

寝汗で身体も寝床もぐっしより濡れていて、シーツも毛布もぐちゃぐちゃになっている。

「酷い夢……」

ハンナさんを殺された日からずっと、見るのはこの夢ばかり。仮面ノ世界で戦っていた時に見たものよりもキツイ内容になっている。

「私がいるからこうなった……。そんな事ぐらい分かってるよ」

フラフラと寝床から立ち上がり、顔を洗おうと洗面所に入って鏡を見ると、桃みみたいな色合いだった髪が雪みたいに真っ白になっていた。今の私みたいに生氣のない色。

「目玉は黒みが入ってきてるのに……」

ますます見た目から人間味がなくなっていくっている。

カウンターに置いてあるジンの瓶を腕輪を右腕で引つ掴み、これまたカウンターにあったシェイカーに注ぎ込む。

それにジュースと棚にあったテキーラを注ぎ込んでめちやくちやに振り回し、グラスに注いで口に流し込む。

「不味い……」

こここのところ、何を口に入れても海水のように苦くてしょっぱい。あいつが私の口を馬鹿にしたのだろうか。

「もうやだよお……」

死んじまいたい。もうしんどい。

カウンターで頭を抱えていると、エルフナインちゃんが敵が来たことを知らせに来た。

「そっか、その手があった……」

私自分から死ににいく必要はない。奴等に殺して貰えばいいんだ。

「今行くよ……」

そう言っつて、私はエルフナインちゃんが止めるのも構わずに服を脱ぎ始めた。

「汗でベタベタな服だと重いから」

なんてことを言つて、一糸纏わぬ姿でエマニエル夫人よろしく背の高い椅子に腰掛けて、敵さんを待ち構えた。

最初からこうすれば良かった。

「やあ、いらつしやい。団体様ですか？」

微笑みを持つてお客さんに接する。

当然、何の返事もなく、ダガーを持った彼女たちが飛びかかってきた。それを一切抵抗せずに受け入れる。

瞬きする間も無く、身体が遊び終わった黒髭危機一髪の際のようになった。でも全然痛くない。え、何？ こんなもんなの？

「ねえ……、こんな鈍で私を殺そうとしたの？」

一人の首を掴んでキリキリと締め上げる。

「期待外れ。先に死ぬ」

「もうこんな馬鹿な真似はやめてください」

手当てをするエルフナインちゃんから小言をもらう。

「もし原子炉に突き刺さったらどうするつもりだったんですか」

「そうなつてくれたら、よーっぽど良かったのに……」

そうすれば一撃であの世に行けた。

「一体どうしたんですか」

「死にたいの」

「何で」

「私がいたら、どんどん人が死んでいくの。そんなの嫌だもん」

「誰にそんな事吹き込まれたんですか？」

「私の犠牲者全員。本当に説得力あるよ。私の手に掛かった人や偽の私にやられた人がみんなして言うんだから」

「死んだ人間の戯言を真に受けてどうするんですか」

ため息混じりの答えが返ってきた。

「しようがないよ。本当の事だから」

「未来さん……」

「だからさあ、私を跡形も無く壊してほしいんだ。もうしんどいの」
夢の中だろうとあんなこと言われ続けて生きていける程、私の面の皮は厚くない。

「エルフナインちゃん、持ってきていたモーゼル銃で私の左胸を撃つてくれない？ 弾もある訳だし……」

「原子炉があるんでしょう？ 嫌ですよ。そんなもの、壊したくないです」

「じゃあ頭でも……」

「弾が貫通するんですか？」

「いや……、昔こめかみに当たった時に弾き飛ばした……」

「なら弾の無駄ですから諦めて下さい」

このままだと碌なことを考えないから、気晴らしした方が良いと言われたのだけど、良い方法が思い浮かばない。

何かいい案が浮かぶかもしれないから、外に放り出していたコピーの死体をとる坊主みたいにして、木にぶら下げようとしたら、頭に椅子をぶつけられた。勝ち目がないのに相手を刺激する気がつて。

仕方がないから寝室に引き籠もって、ウイスキー片手に部屋にあったトランプでエルフナインちゃんとポーカーをする。それよりM6でロシアンルーレットをやりたいって言ったなら、いい加減にしろとまた椅子を投げつけられたから渋々従った。

「ワンペア」

「スリーガードです」

「また負けか……」

ウイスキーを一口含んでから、トランプを切って配り直す。

「この腕輪が私のトランプになりやいいんだが……」

「それは例のメモリーが届けば分かりますよ」

「ならなかったらどうする？」

「その時は、もう仕方ないです。2人で楽になりましょう。隣にいる

のが、響さんじゃなくて、僕では不足かもしれませんが……」
「そんな事ないよ。道連れがいるなら嬉しい限りさ……」

力の抜けた乾いた笑いが出る。1人で死にたく無いのかね、私は。
「でもそうなくても、エルフナインちゃんとは別の所に行くことになるから、途中で別れだろうね」

「そうなんですか？」

「私が碌な場所に行かせてもらえる奴に見える？」

「見えません。自殺志願者が良い場所に行かせてもらえたなんて話、聞いた事が無いです」

「ここよか楽な所に行けるだろうさ。鉄屑の塊引き摺って、生き恥晒すよりはズーっと、ズーっと……。あはははは……」

その日の晩に、女神メモリーを含めた救援物資が届いた。

早速メモリーを腕輪のエネルギー源に嵌め込み、原子炉からエネルギーを送って様子を見る。見たところ特に様子に変化はない。

「どう？ 起動しそう？」

「駄目です。原子力エネルギーとメモリーだけでは、起動の為にエネルギーにはまだ足りません」

ノートパソコンで腕輪の状況を確認するエルフナインちゃんの表情は固かった。

「ファニックゲインが必要？」

「ええ、曲がりなりにも聖遺物ですからね」

となると、歌が必要か。私の歌で大丈夫かな。でも何を歌えばいいか、イマイチ良く分からない。

「何を歌えばいいの？」

「何か思いつきませんか？」

そう言われても何も思いつかない。シンフォギアみたく胸に歌詞が浮かびさえすれば良いんだろうけど、そんな物ない。

私が首を横に振ると、エルフナインちゃんは頭を抱えた。

「ここまで来て、とんだ問題が出てきましたね……。起動できないよ

うでは、どうしようもありません……」

「そう簡単には使わせてくれないか……。仕方がない。神獣鏡だけでどうにかするか……」

現状、勝ち目が無いが、もうそれしか取れる手段は無い。

「エルフナインちゃん、今からでも遅く無いからゲームギョウ界に退避して」

「未来さん」

「もう巻き添えを作りたくないの。お願い。ここでエルフナインちゃんまで死んだら、私……」

もう耐え切れない。嗚咽して、そこまで言えなかった。

「自己満足なのは分かっているけど……。最期くらい誰も巻き込まないようにさせてちょうだい……」

「荷物はまとめ終わりました。未来さん、くれぐれもお気をつけて……」

「うん。なるべく生き残れるようにはするから……」

「生きるのを諦めないでくださいよ。僕がいない間に自殺を試みることは、絶対に止めて下さい」

「約束するよ……。もう椅子が頭に飛んでくるのはごめんだからね……。そろそろ向こうも準備ができ……」

そこまで言った時に、今までと違って、頭を胴に乗せた姿のデユラハンが飛び込んできた。

奇襲に対応出来ず、顎に蹴りを喰らって壁に叩きつけられた私に、奴は大鎌を振りかざした。

「舐めるな……」

手元に転がっていたランプを胸元に投げつけて怯ませ、その隙にギアを装着しつつ組みついて、外へ押し出した。

でも向こうも直ぐに胴体から琴線を張り、パチンコの要領で私を弾き飛ばし、大鎌の後端に仕込まれていた機関銃で私に追い討ちをかけた。

「グウツ……」

弾幕に構わず突っ込み、飛蝗化させた右腕を大鎌目掛けて叩き込む。

鎌の柄を真つ二つにへし折り、畳み掛けて左足で上段回し蹴りを放つが、頭を外されて顔に火を吹き付けられた。

右腕でこれを防ぐも、デユラハンは更に分離した左手に持った鎌を振りかざして、私の右足を斬り払った。

「ギャア！」

膝から下を切り落とされ、私が前のめりに倒れたのを奴は見逃さなかった。

私の首に外した両脚を絡ませて締め付け、鎌を手放した左手で私の頭を掴んで、右手に握っていた機関銃の銃口を私の右目に押し付けた。

「お前の足には興味は無いが……、右目には用があるのでな……」

「ぐ、離せッ！」

「諦めろ。今日はお前を始末するつもりで来た。お前とて死にたいと思っていたところじゃないか。都合だとは思わんか？」

「そんな自殺同然の手なんかで……！」

エルフナインちゃんとの約束を破る事になるからそんな事絶対にできない。

せめて直撃は避けようとして、必死に顔をずらそうとするも、頭を掴まれているから逃げられない。

その時だった。モーゼルライフルの銃声がして、機関銃がデユラハンの右手から吹っ飛んだ。

音の出所をに目を向けると、腹這いになったエルフナインちゃんが、ライフルのボルトハンドルを引いていた。

「とんだ邪魔が入った……」

そう眩くなり、デユラハンは琴線をあの子の首目掛けて伸ばした。それを防ごうと、こちらも腰のアームを伸ばして琴線に絡み付かせて、全力で引っ張る。

「そんな物では……」

標的をアームに変えた奴は、空いた右手で鎌を掴み直して付け根から斬り落とし、続けて残った左足まで斬り落とした。

「グッ……」

「未来さんー!」

エルフナインちゃんがライフルで鎌を撃ち落とそうとしたけど、今度は向こうも気付いているから中々当たらず、弾を撃ち尽くしてしまう。弾切れになれば、装填に時間がかかるボルトアクション式では隙だらけになる。

「私の事はいいから逃げてー!」

その声であるの子が動くよりも早く、デュラハンが口から青い火の球を噴き出した。すると前と違ってアームドギアを持った兵隊が飛び出してきて、エルフナインちゃん目掛けて光線を浴びせた。

「うわあッ!」

「エルフナインちゃん!」

「よし……、そいつは湖に棄てておけ……。後で俺も行く……」

デュラハンは身体を元に戻して、私の上に馬乗りになり、この間の物と同じ短剣を胸から取り出した。

「では右目を貰おうか……。しかしその前に……」

首目掛けて短剣は振り下ろされ、私の喉元を刺し貫いた。

「大人しくしてくれ……」

月明かりの無いネイ湖湖畔に、デュラハンが小日向未来を抱えてやって来た。

「遅くなったな……」

「少佐殿。オリジナルはどうなりましたか」

出迎えたクローン兵に、彼は獲物を見せる。

右目と首、胸から血を流したそれは、最早生きているようには見えなかった。

「あのホムンクルスは……、もう放り込んだか……?」

「はい。まだ息はありましたが、かなりの深傷を負っていたので、恐ら

「このままでも大丈夫かと」

「ならよし。ではこいつをとつと放り込め……」

「宜しいのですか？　ゼネラルに引き渡しては……」

「ここから日本までこの死骸を運べというのか……？　その間に奪われては厄介だ……。ここに沈めた方が良く……」

「分かりました」

受け取った小日向未来の身体をクローン兵は、湖の真ん中に投げ込んだ。

「よしよし……」

作業が終わった事を認めたデュラハンは、待たせていた戦車に乗り、そこから去っていた。

chapter 11. 希望

湖の底で意識が戻った。首の皮一つ繋がったらしい。

でも両脚はなく、上半身はズタズタ。身体も中の機械のせいで浮き上がらない。これじゃ、そのうち溺死するのは目に見えている。

(でもそれでも良いかな……。浮き上がった所で、何かできる訳でもないし……)

もうエルフナインちゃんも死んでしまったに違いない。これ以上、生きていた所で……。

そこまで考えた時だった。あの子の体が流れてきたのは。

水面に浮かぶエルフナインちゃんの右手が、ピクリと動くのが見えた。最初は見間違いかと思ったが、2、3度動くのが見えて、なんとか残った腕で水を掻いて浮き上がり、あの子を小脇に抱えて陸の見えた方角へと最後の力を振り絞ってがむしやらに泳ぐ。

(せめてこの子だけでも……)

生きているのなら、ゲームギョウ界に避難させておかないといけない。火傷の具合が酷いから、急いで治療を受けさせないと、土左衛門になってしまう事は免れない。

どうにか陸地に辿り着き、バイザーを通じて向こうの世界に救難信号を送る。もうこれが限界だった。力尽きた私の意識は、ここで途絶えた。

気づくとベッドの上で寝かされていた。ここは……。

「ああ、良かった。意識が中々戻らないから心配したのよ」

「アイエフさん……」

どうやらプラネテューヌの病院に担ぎ込まれたらしい。

「エルフナインちゃんは……。グゲツ……」

体を起こそうとすると、胸と足が痛くて起き上がれなかった。喉も

痛くて声が出しにくい。それでも起きようとしたのをアイエフさんに制止された。

「無理しちゃダメよ。あの子なら大丈夫。怪我は命に関わるほどのものじゃなかったし、火傷も少し痕は残るけど治るようだから安心して」

「よが……だ……」

その言葉に安心して体から力が抜け、ベッドに倒れ込んだ。

「それにしても、ピーシエと互角にやり合ったあんたがあそこまでやられるなんて……、一体どんな奴を相手にしたの。良かったら教えてくれない？」

ほらっと、メモ帳とペンを手渡された。喋るのが辛いなら筆談でつてことみたい。

「要するに、あんたが装着してるパワードスーツの素材みたいな奴に、コテンパンにされたのね。手持ち火器のビームがまるで効かない上に、格闘もほぼ効果なし。おまけにそれぞれ特殊能力有りなんて……、こんなの相手によく戦ってきたわね。イストワール様から聞いてるけど、3体やつつけたんでしょ？ 大したもんじゃない」

アイエフさんはそう言うってくれるけど、実際のところ私が自力で倒せたのは1人だけ。残りはエルフナインちゃん無しでは倒せなかった。

「わたし、役立たず」

「えっ、どういうこと？」

「1人だとほぼやられてばかり。最初の奴には、全身火傷させられて捕まって怯えてただけだった。2人目にはどうにか自力で対処できただけど、3人目になんか、薬で言いなりにさせられてエルフナインちゃんに手を掛けようとしただけだったし、4人目の時は何にも出来ずにいつかお世話になった人を殺されて、あの子は大怪我。戦えるのが私しかいないのに、殆ど何にも出来てない」

本当に何のための戦力なんだか。置物と変わんないよ。

「それに切札になりそうな腕輪をまともに使う事すらできてない。足引つ張るのと人殺ししか出来ない。昔手を掛けたやつに言われた。お前がいれば死人が出るだけだつて。ほんとその通り……」

「もうそのくらいにしておきなさい」

メモ帳に続きを書こうとすると、アイエフさんが手でそれを制した。

「これ以上、自分を追い込むと碌な事にならないわよ。出来そうなことも出来なくなってしまうし」

「もう出来ることなんて無いです。精々、要らなくなつた機械みたくプレス機で潰されるしか」

「そう自分を卑下しなくてもいいから。あのエルフナインって子は、あんたを頼りにし続けてるんでしょ。考えてごらんなさいよ。役に立たない人間を当てにするかしら？」

「しないです」

「ならあんたは全くの役立たずじゃないわよ。あの子、いざとなれば、ネプ子なりネプギアなり呼び寄せることが出来たのに、ミクがいるから問題ないつて考えてたそうだし、信頼されてるのは確かよ」

「そんなの、気を遣つて言ってるだけかもしれないじゃないですか」

「あのね、自分の命に関わるような事に、気を遣つてなんていられる訳がないでしょう。一度や二度ならまだしも、何度も死にかけたのに助けを呼ばないなんて、余程の理由が無いと有り得ない話だから」

「その余程の理由が、私を信用してたつてこと？」

「そう考えておきなさいな。大丈夫。ミクが全くの役立たずだなんて誰も思っちゃいないから」

仕事があるからと言って、アイエフさんは病室を出て行った。

その時に新しい端末を手渡された。前の物は向こうに置きっぱなしだから、敵に奪われているかもしれないということで、データを移したものを用意してくれたみたい。

「まだ不安なら誰かに連絡してみたら？ 異次元ならここでも電話し

て大丈夫だから」

そう言われたけど、直ぐには電話する気にもなれず、もう一度眠りについた。

するとまたもや夢の中で、海蛇男や犠牲者の亡霊からの罵詈雑言を浴びせられた。それに耐え切れず、5分もしないうちに飛び起きて、喉が痛いのも構わずに立花レーシングクラブに電話をかけた。

すぐに親父さんが出てくれて、私の声の調子から良くない事が起きてると気付き、心配して何があったのか聞いてくれた。

そこで今の状況や元の世界の荒れ具合、亡霊に罵倒される夢ばかり見ていることなどを洗いざらいぶち撒けた。もう耐え切れないって言葉も付け加えて。

「また海蛇男が出てきたのか……。しかし幽霊の言う事なんか聞いてたら、身が持たなくなるぞ。無視するに限る」

「それが出来ないくらいに責め立てられてるから困ってるの」

仮面ノ世界では、2週間に1度見るか見ないかだったから無視すれば済んだけど、今は毎晩毎晩見続けている。とても無視などできない。い。

「といっても悪夢の対策なんてこれくらいしかないからなあ……。そうだ、麻由」

「何、親父さん」

「お前、海蛇男の言い分だけが全てだなんて思っただけか？」

「だって現に私のせいで大勢死んだんだよ!! それは否定できないじゃない!」

思わず大声を出してしまった。でも親父さんの声音は、落ち着いたままだった。

「それだけでもないだろう。なるほど、お前の事を悪魔のように見る者が居るのは事実だ。しかしな、同時にお前の事を大仰な言い方が、救い主として見る者がいるのもまた事実なんだ……」

「救い主? 私か?」

そんな馬鹿な話があるはずもない。

「怪人1人を仕留めた時、そいつが携わった作戦の毒牙にかかろうとしていた人が助かる事になるだろう。お前は意識していないようにだし、その人達も自分たちを救ったのがお前だなんて気付かないかもしれないが、彼らを救った事には違いはないだろう」

言われてみればそうだ。犠牲にした人もいるけど、その反面助けた人もいる。当たり前のことだから今まで目を向けてこなかったけど、それも事実といえは事実だ。

「麻由は、そんな人達の希望でもあるんだ。自分の事をただの悪魔だなんて思うことはない。未来へ彼らを送り届ける為の最後の希望だったんだから」

「でもこの間再会したハンナさんは、私に関わって死んだんだよ！
そんな私が希望なわけがないよ！」

親父さんにみっともなく当たり散らしてしまう。でもハンナさんにとつて、私はただの死神だったに違いないと思う。私に関わらなければ、デュラハンに目をつけられずに済んだかもしれないのに。だからあんなに恨み言を言ってくるんだ。そんな私が希望だなんて馬鹿げているにも程がある。

「俺はその人に直に会った事がないから知ったような事しか言えないが……、最後まで反撃や命乞いをしてどうかしようとしたお前を責め立てるような人なのか？ さっき聞いた話からして、どうもそういう人には思えんのだが」

「でも夢ではッ」

「待て待て。夢に出てきたんであつて、その人の亡霊がお前の目の前に化けて出たわけじゃないんだろう。それならハンナさんとやらが、本当にお前を恨んでいるかどうかなんか分からんじやないか。夢の中に出てきた物なんか、所詮はお前の妄想に過ぎないんだからな」

「あッー！」

確かにその通りだ。ハンナさんに直に責められたわけでもないのに、私は勝手に恨まれているとばかり考えていた。

「尤もこれは土の下にいるその人に聞いてみると分らんがな……。」

故人の胸の内なんか今更調べようもない事だから。責任を感じるのは良いことだが、やり過ぎては彼女もおちおち眠れないだろう」

「そう……だね……」

「それに行方知れずのお前の親友も、きつとお前が見つげに来ることを待っているだろうさ。ここでお前が潰れてしまったら、その親友もお前という陽だまりを浴びる希望を持ってなくなってしまう。これはまずいだろう」

「うん」

「だからどうか自分に絶望しないでくれ。大変なことなのは百も承知だが、できなければお前だけじゃなく、お前という希望を待ちわびている人間を絶望させることになってしまうから……」

「未来さん……、大丈夫でしょうか……」

怪我の具合や心の状態が酷いことになっていたあの人の事が心配ですが、少なくとも3日間は絶対安静と言われている以上、ベッドから離れるわけにはいきません。

「さつき目を覚ましたらしいですが、怪我の状態は良くなっても心に問題が残っている以上は……」

魔人退治と響さんの搜索は、こちらの方々に依頼するより他ないかもしれないですね。

そう考えていると、看護師のコンパさんが病室に入ってきました。でも体温や血液の検査に来たわけでもなければ、シーツの取り替えに来たわけでもありません。

車椅子にまだ歩けない未来さんを乗せて、ここまで連れてきてくれたんです。

「未来さん……」

運ばれてきた未来さんの顔付きは、ここに来るまでの自らに絶望しきったものではなくなっていました。しかしそれより前のものとも少し違ってきます。余裕の無さが少し緩和されて、これまでには無かった落ち着きを持っています。何があつたのでしょうか。

「エルフナインちゃん、怪我の具合は問題ない？」

「はい。未来さんはいかがですか」

「身も心も少しは軽くなったよ。ねえ、一ついいかな？」

「何でしょうか」

「私は貴女の役に立ててましたか？」

「急にどうしたんですか」

「聞いておきたいんだ。いつもエルフナインちゃんには、迷惑かけてばかりだったから」

「未来さんが居なければ、僕はフォークランド諸島で敵の手に掛かっていたかもしれないですよ。それに魔人だって、ほぼ全て貴女が迎え撃っているじゃないですか。そんな人が役に立っていないだなんて、全く思えませんよ」

僕の答えに安心した顔で、未来さんは言葉が続けました。

「そっか、ありがとう。それじゃあ、もう一つ。これからも一緒に戦ってくれませんか？ 頼りないかもしれないけど、お願いします」

頭を下げて頼む未来さん。ついこの間まで生きるのを諦めたがっていた人が、一緒に戦ってほしいと頼み込んできたことに少々驚きながらも、僕の口からは自然と「はい」という了承の返事が出てきました。

「ありがとう……、ありがとう……。頼りないかもしれないけど、これからもよろしくお願いします」

「（ちんぷん）そ……」

8日後、私達は退院して、元の世界に向かう準備を整えた。もつとゆっくりしていてもいいと言われたけど、あまり長居して向こうが準備を整えたら面倒な事になるから早めに出発することにした。

「この腕輪の威力も試したい事だし……」

考え方が少し前向きになったからか、頭にぼんやりと歌詞が浮かんできた。それを試しに唱えたら起動に成功。随分と都合の良い展開

だけど、偶にはこのくらいの事があってもいいだろう。

「それではお世話になりました」

「また何かあった時は、遠慮なく連絡してくださいね」

イストワールさんとの挨拶も程々に切り上げ、敵の反応があった北アイルランドのベルファストに降り立つ。

そこで出会った兵隊の1人を捕まえて基地の場所を吐かせ、そこ目掛けてアームドギアで砲撃した。

穴の開いた壁から兵隊が10人ほど出てきたけど、物の数ではない。1分も経たないうちに、全員地面に倒れ伏した。

「三下はもう十分だ！ 大将はとつと顔を出せ！」

すると頭の上にジャマイカで見た鞭がすつ飛んできた。

「おつとー」

これを難無く躲し、エルフナインちゃんとともに何処かの庁舎の屋根に飛び上がると、大鎌を振りかざしたデユラハンが待ち構えていた。

振り下ろされる直前に、その脇を潜り抜けて奴の後ろを取る。

そこにエルフナインちゃんを待たせて、私は早速腕輪起動の為に歌を口ずさみながら突進する。

そのまま腕輪から伸びる刃を使って大鎌を破壊し、左手に作り出した光球を胸元目掛けて投げつけて、奴の胴体を銀に変えた。これなら琴線はもう取り出せないだろう。

「グウツ……」

奴は体を分離したけど、そんな小手先の手段でどうこうできる筈がない。

再び球を今度は4発送りつけて、四肢を銀に変えて、残った頭目掛けて腕輪から伸ばした刃をデユラハンの首目掛けて突き込む。奴は火炎放射で迎撃するが、その程度の攻撃に怯む私じゃない。

刃が中の脳を貫くとデユラハンは動かなくなり、頭は刺し傷からヒビ割れて、最後は真つ二つになって爆発した。

「よし、一丁あがり……。ハンナさん……。終わったよ……」

「これからどこ行こうか」

「まずはユーラシア大陸に向けて移動してください。後はひたすら東を目指しましょう」

「それじゃあ、まずはブリテン島に渡ろうか。ユーロトンネル使つてさ」

「ならダブリンから行きましょう。大陸も近いですし」

ブリテン島に渡るために、アイルランドのダブリンを目指して、サイクロンを南に走らせる。

「エルフナインちゃん、この前の援護は助かったよ。まだお礼言つてなかったから今言うね。ありがとう」

「いえ、大した事じゃないですよ。それよりも未来さん、変わりましたね。僕が知らない間に何かあつたんですか？」

「今まで面倒見てくれた人と話をしたただだよ。それで少し希望を持てただけさ」

「そうだったんですか……」

「響やエルフナインちゃんにとつての希望に成れたら良いなって、思えるようになったんだ。気の持ちようが変わったの」

「響さんは分かりませんが、僕にとつてのある種の希望であることには、変わりありませんよ」

「ありがとう」

chapter 12. ベルリン

ベルファストを発ってから8日目の昼、ドイツのポツダムにあるパーキングエリアに入った。このところ、ノンストップでサイクロンを走らせていたから、流石に疲れが出たんだ。

パーキングエリアといっても駐車場とトイレがあるだけの簡単な物だったから、2人で近くの芝生で寝転んで身体を休めつつ、地図を開いて今後の予定を話し合った。

「間も無くベルリンに差し掛かりますね。大都市ですから宿泊場所の確保も簡単でしょうし、強行軍もこのくらいにしておかないと、身体にも良くありませんから、ここで一泊しましょう」

「そうだね。流石に1日1時間半の仮眠で巡航速度150キロを保つのは、そろそろしんどいところだったから……」

おまけに5日前からアウトバーンに入ってから、そのスピードを200キロに引き上げたのだからもうクタクタ。速度制限の無いところに折角来たのだからと上げてみたら、こうなっちゃったよ。

「ベルリンはすぐそこですから、ゆっくり行きましょう。急ぐ必要はないですから」

「分かった」

こうしてベルリンへと行く事になったんだけど……、おかしな街になっていたんだよ。自分がどこに居るのか全く分からなくなるくらいに。

アウトバーンからベルリン市内へと入ったのだけど、遺跡のような印象がした。何処もかしかも古めかしい建物ばかりで、日本なら文化財にでもさかれていそうな綺麗な物なんだけど、時代錯誤な感じが否めない。

「ベルリンって、こんな街だったっけ？ 写真だともっとビルが立ち並んでいたような……」

「並んでいますよ。ほら」

エルフナインちゃんが指差した先にあるのは、石造りのビル。綺麗なんだけど、それが何軒もあるのだから違和感を感じてしまう。写真で見るとようなガラス張りのビルやテレビ塔が無い。それだけならまだしもライヒスタークやベルリンの壁の跡地も綺麗さっぱり消えている。

その一方でベルリンにしかないような物、例えばオリンピアシュタデイオンや女神ヴィクトリアの像を天辺に戴いたブランデンブルク門といった物は、そのまま残されている。

「戦勝記念塔もありますよ」

「ベルリンにしか無い？」

「女神像があるのは、ベルリンの物だけですよ」

となると、やはりここはベルリンに違いない。でもなんでこんな街に？

結局、その日はドームの反対側にあるビル街の一角にあったホテルで寝泊りすることになった。近くにあつた大理石造りの凱旋門に負けないくらい壮麗な外観の建物で、部屋も前に泊まったジャマイカのホテルとは比べ物にならない程、豪華な内装で一流ホテルのお手本のような所だった。おまけにライフラインは生きていて、アメニティ類も完備。ここだけ別世界と言っても過言ではない。

「何だか凄い所に来ちゃったね……」

お風呂から上がり、久しぶりのベッドに2人で寝転がり天井を見つめる。

「ここだけ破壊どころか、街の改造まで行われているというのは……」
街の中を一通り見て回って分かったのだけど、エルフナインちゃんの言う通り、ベルリンは私の身体のように大改造を受けたようだった。総統官邸だのヘルマン・ゲーリング街だの、今のドイツならまず有り得ないような名前が出てくるし、明らかにナチの残党である彼奴らが何かしたとしか思えない。ダーク・エンジェルスもそうかは知らないけど。

しかも防犯設備みたいな細かい所は、今の時代のものをそのまま

使っているのだから、どこかチグハグだ。日本の城下町にある物のよ
うな景観に合わせたものならそう感じないのだろうけれど、そんな物
ではないから違和感しかない。

「しかし何でこんな街にしたんだか……。市街戦でも仕掛けるつもり
かな……」

だとしたら直ぐにでもここから離れた方がいいんだろうけど、もう
何日も野っ原で1時間だけ寝るといふことしかしてないから、ふかふ
かのベッドから離れたくない。

「エルフナインちゃん、今日はもう休もう。疲れた身体じゃ碌な事考
えつかないよ」

「そうですね。おやすみなさい」

「おやすみ」

そのまま何事もなく朝が来て、顔を洗ってから髪型を整えに鏡台ま
で行くと、昨日までは影も形も無かった化粧品が置いてあった。それ
もスキンケアやメイクアップに必要な物が、一式揃えてある。

「いつの間に……」

銘柄を見ると、資生堂やシャネルのような有名ブランドの物ば
かり。一体どこから用意したんだろう。目的は書いてあるから分か
るけど……。

「どうしたんですか、未来さん。おや、この化粧品は？」

「朝起きたら置いてあった」

「へえ……。爆弾ならまだしも化粧品ですか……」

一足遅く起きたエルフナインちゃんも急に出てきた化粧品を訝し
げに見ている。

「何でこんな物を用意したかは、ここに書いてあるよ。見てよ、これ」
化粧品を入れた黒塗りの箱には、「死化粧用」と白文字で書きつけて
あった。まさかこんな物を用意されるとは思わなかった。

「今日にでも襲いに来るつもりなんでしょうか」

「多分ね」

「気の早い相手ですね。死化粧をするには、まだ早い気がするのですが……」

そこまでいった時に、エルフナインちゃんがドアの下に封筒が差し込まれているのを見つけて、こちらに持ってきてくれた。開けてみると、朝食の案内とレオナルド・ダ・ヴィンチの最後の晩餐のコピーが入れてあった。

「最後の食事への御招待か……」

「どうしますか？」

畏のような気がするけど、無碍にするのも気が咎めるから行く事にした。用意されていた物でお化粧を済ませてから。

「意外とまともな食事でしたね。毒物は入ってないようでしたし……」

「うん。それに食事中の襲撃も無かったから落ち着いて食べられたね。さて……」

自室に戻り、荷物を纏めてホテルを出発する準備をする。同時にギアを装着し、手持ちのピストルとリボルバー、再度調達したモーゼルのボルトアクションライフルに弾を込めて、いつでも発射できるようにしておく。

「いつ襲撃されるか分からないからね。エルフナインちゃん、準備はいい？」

「はい」

アームドギアを片手に警戒しながら外に出る。今のところ敵影もなく、反応も無し。少なくともベルリンを出るまでこのままならいいのだけだ。

「サイクロンにも特に問題は出ていませんね」

「うん。それじゃあ行こうか」

そうして荷物とエルフナインちゃんを乗せて、いつもと同じように快調なサイクロンを走らせて、公道へ出た時だった。

後ろから路面電車が走ってきたんだ。でも人が乗っている気配は

なかった。

それで敵もいないようだからと、気を抜いたのが失敗だった。電車が武器を積んでいないという保証なんかどこにも無いのに。

並走していると、突然列車の窓が開いて、中からヒットラーの電動ノコギリこと、MG42が顔を突き出してきた。その数凡そ20基。あれで撃たれたらエルフナインちゃんは愚か、弾によつては私も危なくなる！

発射される前に、急いでサイクロンを加速させて列車を追い抜き、アームドギアを線路に投げつけてこれを破壊する。あの機関銃列車もこれで追いつけない筈。

「未来さん、前！」

しかし安心するのは、まだ早かった。今から侵入しようとしている交差点の右側から路面電車が走ってくる音が聞こえたのだから。

「つたく、準備のいい事で！」

列車がこちらに顔を見せる前に新たに取り出したアームドギアを乱射して線路を破壊し、一気に通り抜ける。できるなら車両を破壊したいが、近づくのはリスクを増やすだけだからこれが精一杯。

こうして目についた線路という線路を片っ端から破壊して逃げたら、今度は敵さんも学習したのか、MG42とロケットランチャーを装備した無人のトロリーバスを走らせてきた。今度は道路を走るから路面電車と同じ手は使えない。

「仕方ない、ちよつと危ないが……！」

少し減速させて、アームドギアから光線を機関銃を据え付けた運転席目掛けて打ち込んだ。しかし車体を貫通して炎上しているにも関わらず、まだ走っている。

「このままベルリンの外まで……、えっ?!」

振り切ってアウトバーンに侵入しようとした時だった。そのアウトバーンのインターが、壁で塞がれていたんだ。

「うわっ！」

急いで左折して脇道に逸れたから激突は免れたけど、インターを塞ぐ真つ白な壁はこの道にも沿って建っていた。そしてその先もずっと続いている。あのベルリンの壁みたいに。

「まさか僕達、閉じ込められたのでしょうか……」

「多分ね……」

その後、一度空から街を見渡した。その結果、私達は予想通りベルリンの囚人と化していた事が分かった。

「少なくとも、これから大通りを歩くことはできそうにないですね……」

「うん……。表通りには、路面電車やバスが待ち受けてるしね……」

「ええ、ですから今いるような路地裏などで活動せざるを得ません」

「ドブネズミみたい……」

しかしそうせざるを得ないのも事実。一步でも大きな道に出たらたちまち蜂の巣にされてしまう。

ただ脇道や路地裏がどこまでも安全な場所だとは限らない。どこに目や耳が置いてあるか分からないから。

細い道を辿っていくうちに、行き止まりにぶつかった。

ここを拠点に動くかどうか話し合っていると、目の前の建物の壁から大砲が出てきた。

そして慌てて逃げ出したのだけれど、どこをどう逃げたのか、逃げているうちに大通りに飛び出した。しかし幸いにも戦闘車両に出会わず事なく横断でき、胸を撫で下ろした時だった。

「ヴァアツ……！」

エルフナインちゃんが耳をつん裂くような悲鳴をあげて、何かと振り向いた時に顔に生暖かい鉄の味がするものがかかった。

「エルフナインちゃん！」

建物の庇の陰にサイクロンを止めてよく見ると、左腕が上腕部から

千切れていた。な、何があつた?!

とにかくこのままだと危ないから建物の中に避難しようとした時だった。

バシユツという音が遠くから聞こえて、サイクロンから降りようとした私の右胸から血が噴き出した。

「えっ……」

目の前にあつたショーウィンドウも割れ、その残った破片から私の右胸に大きな穴が開いているのが見えた。銃創だ……。それもMG 42よりもずつと大きな弾でしかできないものだ。連射してこないことからして、恐らくは……。

「スナイパーが居る! ヤバイ!」

急いで建物の中にエルフナインちゃんを抱えて駆け込むも左脚の太腿にもう1発銃弾がめり込み、私は床に倒れこんだ。

「ぐっ……」

幸いにもエルフナインちゃんを放り出さずに腕で支える事はできた。しかし左腕を失い、もうこの子は虫の息だった。

「プラネテューヌに助けを呼んでいる暇はない……。なら……」

シエム・ハの腕輪を起動させて、その力、といつても物質変換能力を応用して、傷口を塞いだ。1分しか腕輪を動かせない私には、流石に腕を再生させるほどの力は揮えないけど、これくらいの治療ならなんとかできる。

「せめてできることはしておかないと……」

「サイボーグ、マダシンデナイ」

未来達を狙撃した魔人アダムは、2人が駆け込んだ建物の向かい側のビルの屋上から、双眼鏡で獲物の様子を窺っていた。ターゲット2人が辛うじて生きていたことや未来がエルフナインの治療をしていることが、彼には気に入らなかった。

「ツギ、シエム・ハモドキ、ヒダリムネ……」

そう呟き、双眼鏡を地面に置き、欄干に立て掛けていた20ミリ口径のスナイパーライフルを手に取った時だった。

「待て待て、急ぐ事はない」

ゼネラルが狙撃に移ろうとしたアダムを制止した。

「ゼネラル、ジャマスルツモリカ？」

無然とした表情で答える彼に気にせず、ゼネラルはこう答えた。

「別にそんな事はせんよ。ただお前の花嫁の材料に無闇に風穴を開けるのも良くないだろうと思って、止めに来ただけだ」

「ハナヨメ……」

「前に引き渡した死骸を駄目にしたのを忘れたのか？」

「ソウダツタ……、スマン……」

「礼には及ばん。それでは……」

chapter 13. 教会での死闘

建物の奥に這いつくばって進み、ベッドが置かれている部屋を見つけて、そこに入る。

エルフナインちゃんをベッドに寝かせてから、太腿に突き刺さっていた弾丸を摘出して調べてみると、ショツカーの対戦車ライフルや機関砲でも使われていた20ミリ口径の徹甲弾であることが分かった。これならあの子の腕が千切れ飛ぶのもおかしくない。

「幸い重傷を負った時に備えて、輸血パックの類は荷物に入れてあったから助かったが……」

流石に義手はないからなあ……。だからといってベルリンで探し回るのは危ないし、通信が妨害されているのか、プラネテューヌとも連絡が取れないから、既製品の入手は困難だ。どうしたものか。

「ぐっ……」

方策に頭を悩ませていると、ベッドに寝かせていたエルフナインちゃんが目を覚ました。

「ああ、良かった！ 意識が戻って！」

「やけに左腕が軽いですね……。あっ……。こ、これは……」

左腕の殆どが無くなったのを見て、愕然としている。無理もない。私にとっては手足が吹っ飛ぶ事など、放っておいても生えてくるからあまり気にならなかったけど、そんな事がまず起きないこの子にとっては、取り返しのつかない大怪我でしかないからだ。

「一体何があったんですか？」

「こいつの仕業だよ」

手の上に弾丸を乗せて、エルフナインちゃんの目の前に持っていた。

「この20ミリ口径の徹甲弾で狙撃されたんだ。そのうちの1発が貴女の左腕に当たって、上腕部から下を吹き飛ばしたの」

「この大きさの弾丸が……。うぐっ……」

まだまだ傷が痛むようだ。何せ骨がある所を寸分違わず撃ち抜かれていたからね。痛まない方がおかしい。

ホテルから持ち出してきたジュースのボトルをポケットから取り出して、半分をエルフナインちゃんの口の中に流し込み、残りを自分で飲んだ。モルヒネみたいな物だが、それ同様に痛み止めとして使えるし、他にまともな痛み止めがない以上、こいつを当てにするしかなかった。

「禁断症状がだんだんキツくなってくるから、あんまり良い手では無いんだよな……」

「大丈夫ですよ。分量さえ守れば、毒でも薬になることなんかよくある事じゃないですか」

「なるほど、確かに」

「急造品にしては、割とまともな物が出来ました」

とにかく隻腕のままという訳にもいかないということで、私の予備パーツを通路に転がっていたマネキンの左腕の中に組み込み、エルフナインちゃんは義手を作った。あくまでベルリンを出るまでの間に合わせの物らしいが、ちゃんと指は5本とも動かせて、手の開閉もできるから性能はかなり優秀だと言える。

「それ、本当に間に合わせなの？」

「はい。やはりマネキン人形に使われているような素材ですと、これからのことを考えると強度が足りていませんからね。敵がこれ以上襲撃してこないというのであれば、この程度でも十分かもしれません。まずそれはないでしょうし」

確かに単なるプラスチックじゃ、何があつた時にあっさり壊れてしまうのは、火を見るよりも明らかだ。

「それはさておき、今回の敵の正体を考えることにしましょうか。とは言っても、今のところは使った弾丸の種類しか分かりませんが……」

「うん。しかもこれだけじゃ、敵さんの武器すら分からないよ。機関砲が大口径のライフルのどっちかだとは思うけど、こここのところの判断を間違えると2人揃って、蜂の巣にされる可能性もありうるから

ね。いや、この弾なら蜂の巣どころか挽肉か」

「やめて下さいよ。2度と精肉店に行けなくなります」

その後も話し合ってみたものの、考える材料がまるで無いから夜を待って外に出ることにした。危険なのは承知しているが、そこに居たところでどうしようもない。何の手掛かりも集まらないもの。

勿論、この辺りの電柱は破壊したし、線路は溶かしながら進めるようにして、襲われにくいようにはしてあるけどね。

とはいえスナイパーが何処に隠れているか分からないから、この方策もあくまで気休め程度でしかない。補助兵器を破壊しても、スナイパーの武器を潰さないことには、何の解決にもならないから。

「こういう時は、建物を尽く焼き払いながら突き進むのが有効なんだろうけど……」

「今のように逃げ場がない時にやれば、僕達が丸焼きにされる可能性が高いからできませんね。ああ、なんて不便な……」

「空から覗くというのも一つだけど、対空砲があるかもしれないからその手は使えない」

「結局、地べたを這いずり回るしか途はありません。敵の本拠地が空の上で無ければ良いのですが」

「そうなりやお手上げだよ」

尤もその場合、飛行機か何かに乗っている筈だから、それは無いと思う。機影もないし、熱源もバイザーからは感知されていない。

「そういやさつきも言ったけど、襲撃された時に敵の反応が一切無かったんだよね。バイザーからは、何の感知もされていなかった」

「これまでは、聖遺物の正体自体は大体掴めていたのに、それも無いですからね。ただ車両を遠隔操作していたことから、もしかしてこれが使われているのではないかと思う物がありますが、判断する根拠としては弱過ぎますからね。確証は無いです」

「当たりはついてるんだ」

「それだと決まったわけでは無いです。そもそもこの世界にはもう無

い物ですから」

「無い物がある可能性だつて捨て切れないよ。それにしても……」

大通りから横丁に入つて歩いているうちに、周りの建物がウエディングドレスなどの仕立て屋や写真店、それに新婚向けの家具屋やウエディングケーキの見本品が置かれたケーキ屋など、結婚式向けの品物を取り扱うお店が並んでいる所に入ったことに気がついた。

「ここで結婚式なんて挙げる人居るのかな」

「ほかに人がいるなら居てもおかしくないでしょうね。あの標識を見てくださいよ。近くにカイザー・ヴィルヘルム記念教会があるつて書いてあります」

「本当だ。お誂え向きだね」

そんな事を話していると、リーンゴーンと教会の鐘が鳴る音が聞こえた。今まで鐘なんか鳴らなかつたのに。

「敵さんでも居るのかな」

店先に一台ずつぶら下がつたカメラで、あそこから私達を見ていたのだろうか。

「教会が本拠地だなんて洒落た魔人ですね」

「確かに」

狙撃手に警戒しつつ、教会へと近づいた。

敵を刺激させない為に、敢えて神獣鏡を装着せず、モーゼルライフルを携えて近づく。幸いにもカメラらしき機器は教会周辺にはないから、ギアを装着しなければ、相手の警戒も緩む筈だ。甘い見立てだが、単に私達があそこを通り過ぎただけと考えるかも知れないし。

「サイクロンには別行動を取らせているから、何かあつた時はどうにかなる筈……。それにしてもエルフナインちゃん」

「何ですか？」

「何か臭わない？」

「臭いますね。何かが腐つたような酷い臭いが鼻につきます」

後ろから腐臭が漂ってくる。生ゴミとかじゃない。死体の臭いだ。

あれから発する臭いとおんなじ臭いが、少し離れた所からしている。しかも近づいてくる。

「これ、死臭だよ。ゾンビか何かか敵の正体かな？」

「ゾンビなら身体は仮死状態か、腐る前の筈ですよ。おそらく違います」

「とにかく対抗しないと」

エルフナインちゃんを庇いながらライフルを臭いのする方向に向けた時だった。

暗闇からぬうつとドイツ軍の野戦服を着た淡黄色の肌をした大男が出てきたんだ。2メートル以上の背丈を持ったそいつは、薄く光る緑色の目で私達を見下ろし、肩に担いでいた大きなボルトアクション式のライフル銃を私に向けて構えてきた。

「ソノホムンクルスカラハナレロ」

片言だがはつきりと聞き取れる声で、魔人は話しかけてきた。

「ハナレルナラナニモシナイ」

どうもエルフナインちゃんを狙っているらしい。私の事はどうでも良いようだ。

「何で離れないといけないのさ」

「サイボーグニヨウハナイ。モトハニンゲンダツタヤツナンカイライナイ。ホムンクルスガホシイ」

「だから何でこの子を欲しがるのさ」

「オマエニハ、カンケイナイ。ホムンクルスヲワタスノナラバ、コノマチカラダシテヤル」

「無理」

その言葉を聞いた魔人は、ライフルの引き金を引いた。

ギアを装着しつつ弾を避けて、話をしている間に遠隔操作をして呼び出したサイクロンにエルフナインちゃんを乗せて、その場から離れさせる。

そして急加速して懐に飛び込み、胸に体当たりを喰らわせる。そし

て続け様に右腕でストレートを叩き込み、ラッシュをする。

「ナンナンダ、イマノハ」

しかし全然魔人には効いておらず、私の腹に膝蹴りを喰らわせた。そしてライフルを手放して私の体を掴み、そのまま急降下した。脱出しようにも、力が強すぎて振り切れず、下にあつた教会の屋根へと叩きつけられた。

礼拝堂にまで落つこち、床から起き上がるとリボルバーで4発撃たれた。1発は頬つぺた、2発は両脚、1発は右腕。

「このッ……」

痛みを気にせずに、腕輪を起動させて剣を展開し突っ込むと、奴はリボルバーのグリップでこれを防いで後ろに下がり、近くのネイヴからさっきの物と違うライフルを取り出して、引き金を引いた。

「シネ……」

「甘い！」

だが慌てずに発射された弾丸に光球を投げつけて溶かし、ライフルにもぶつけて無力化させた。

剣を胸に突き込もうとすると、魔人は左腕で私の右腕を殴りつけてライフルの残骸にそいつを刺し貫かせ、更に両手で首を掴んで絞め上げた。

「ぐえ……」

苦しきから気絶しそうになるが、こちらも腕のコードを伸ばて奴の首にかけ、一気に締めつけた。

「グウツ」

流石に首を絞められるのは向こうも堪らないのか、拘束が弱まり逃げる事には成功した。だが呼吸を整える間に腕輪が停止してしまい、暫くしないと動かす事が出来ない状態に追い込まれた。

「手持ち武器は潰せたからまだいいが……」

あの馬鹿力とタフさを何とかしないといけない。

突進してきた魔人をバク転で躲して頭に後ろ蹴りを当ててよろけ

させ、アームドギアを叩きつけて倒した。

更にガラ空きの背中を一度踏みつけてから馬乗りになり、アームドギアで脳天をかち割ろうとしたが、そうは問屋が下さなかつた。

奴はネイヴを私の脇腹にぶつけて背中から叩き落とし、倒れ込んだ所を押さえつけて、口にさっきのリボルバーの銃身を捻じ込んできた。

「マダウテル」

その声とともに引き金が引かれ、私の後頭部が温かくなった。

「未来さん、大丈夫でしょうか」

サイクロンに乗せられたまま、あてもなく走り回っているのですが、急に動きが止まりました。未来さんの脳波で動かされている物ですから、あの人の身に何かあったとしか考えられません。

「前のように打つ手が無いわけではないですから、死んでしまったとは思えません……」

とはいえ魔人相手ですから何が起きても不思議ではありません。

どうしても気になって、教会まで様子を見に行こうとしたときでした。さっきの腐臭が漂ってきたんです。まさか未来さん……。

「ココニイタカ」

案の定、目の前にフランケンシュタインの怪物を思わせるさっきの魔人が現れました。そして未来さんを入れた麻袋を小脇に抱えています。手酷くやられたのか、顔に痣を作り、口と鼻から血を垂らしている、ぐったりとしていました。

「み、未来さん！」

「オマエハコウハシナイカラシンパイスルナ」

「い、いや……」

思わず後ずさるも大きな手で体を掴まれ、呆気なく捕まってしまうました。

「は、離してください！」

「コワガルコトハナイ。オナジジンゾウニンゲン……」

そこまで彼が話した時でした。顔にどろつとした物がかかったんです。

途端に魔人の腕の力が弱くなって、拘束から逃れることができました。どうしたのでしょうか。

振り返ると麻袋から剣が伸びていました。それが魔人の左腕を貫通したようです。

「は、はやく……にげ……」

「は、はいー」

こういう時に逃げないのは被害が増えるだけです。脇目も振らずに逃げました。

未来さん、必ず助けに行きますから、今だけはごめんなさい。

「ハハハ……、にげられたな……。ざまみろ……」

その言葉が終わらないうちにバツクブリーガーを掛けられ、地面に放り投げられて、蹴り付けられた。

「ジャマスルナ！」

「ぐふっ」

鳩尾に1発もらって咳き込むが、こちらも負けずに剣を足に突き刺して追い討ちをかける。

足を押さえて痛がる隙を突いて転がり込み、もう片方の足を引っ掛けて体勢を崩させた。

「おかえしだ……ー」

仰向けに倒れたその口に剣をぶっ刺して、そこから急いでエルフラインちゃんの後を追った。

「ググッ……」

未来に一撃を加えられた魔人アダムは、まだ死んではいなかった。

彼女が立ち去って暫くして後、傷の痛みに顔を歪ませながらもライフルを杖に立ち上がったのである。

「セツカクミツケタドウゾク……。カナラズハンリヨニ……。」
エルフナインへの執着心を胸に抱きつつ、痛む脚を引きずりながら
も彼は2人の後を追いかけるのであった。

chapter 14. 一難去つて

エルフナインちゃんの後を追ひ、ベルリンの街を滑走する。しかし体が痛むせいでいつものスピードが出せない。

「首の後ろを撃ち抜かれたのは痛かったな……」

おまけに急所を攻撃されたから苦しいったらありやしない。早いところ、あの子と合流してどこかで休まないと。

三叉路に差し掛かり、どこにエルフナインちゃんが逃げたのか探っている、背後からライフルの発砲音がして、脇腹を撃ち抜かれた。フランケンシュタイン擬きめ、もう追いついてきた。

「この野郎……」

道路沿いの建物をアームドギアで砲撃して崩落させて、生き埋めにする。

そして瓦礫を押し上げて出てきたところを、頭目掛けてアームドギアを投擲して転倒させ、その隙に取り落としたライフルを腕のコードで巻き取って奪い取る。

「これさえあれば……」

引き金を引いて脳天に1発食らわせ、ボルトを引いて次弾を装填する。頭に弾を受けても何事もなかったかのように動くから、今度は左膝を狙って発砲する。

「ウギッ！」

膝を抱えて蹲る魔人にもう1発お見舞いする為に、次弾を装填しようとしたが弾切れだった。3発しか装填されていなかったようだ。

仕方がないので、銃床でリボルバーを叩き壊して丸腰にし、残った体力で腕輪を起動させてケリをつけようとした時だった。

横から黒い影が飛び出してきて、私を横倒しにしたんだ。

「な、何だ?!」

重いライフルを放り投げて、押し退けようとする、と右腕に噛み付いてくる。その感触に覚えがあつて、そちらを向くと狼がいた。なぜ急に狼が？

考える間も無く、更に新手が5匹も飛びかかってきた。何とか4匹

は躲せたが、振り払った奴に足を噛まれて5匹目の体当たりを躲しきれず、体勢を崩した隙にのし掛かられた。

「邪魔だ……！」

ミラーデバイスを射出して、狼の群れ目掛けて遠隔操作し、全員に回転刃で斬りかかる。あつさり躲されたが、気にせず光線を浴びせかけて丸焼きにする。

「ふう、これでは……」

ただ狼を倒したは良いが、少々時間をかけ過ぎた。だから銃剣を取り付けたライフルで、フランケンシュタインが突き掛かつてくるのを阻止できなかった。

咄嗟にアームドギアの扇面で受け止めるが容易く貫かれ、更に回し蹴りを食らって近くの瓦礫まで吹き飛ばされた。

そして体の上ののし掛かられて、首に銃剣を突き立てられそうになる。振り落とそうにも重過ぎて無理だし、腕輪を起動する余裕もない。

苦し紛れにミラーデバイスで四方から攻撃してライフルを燃やし、一先ず串刺しにされるのは避けられたが、代わりに瓦礫を顔に5回叩きつけられて、穴という穴から血が流れた。

「いっ……！」

続けて口目掛けて右の拳を振り下ろしてきたのを、口を飛蝗化させて噛み付いて、手首から下を喰いちぎった。グニヤグニヤする上、屍肉の臭いがして堪らなかったが、今はそんな事どうでもいい。これどこいつの右手をダメにすることができたのだから。

節操もなく左手で手刀を振り下ろしてきたが、こいつも噛み付いて喰いちぎり、両手とも使えなくする。これでもうこいつは裸同然だ。フランケンシュタインもそれを悟り、私から跳ね退いて距離を取った。

「そいじゃ……、いくよ……」

腕輪を起動させて剣を展開し、全速力で突っ込もうとした時だった。何の前触れもなく起きた雷が、私に落ちた。生命維持機能の停止こそ免れたが、身体機能の殆どが麻痺してしまい、身動きが取れない。

元通り動けるようになるまで、暫くかかりそうだ。

フランケンシュタインの魔人も突然の落雷に面食らったようだが、直ぐに気を取り直してこちらに向かって突進してきた。しかし私の眼前にまで近づいた瞬間、奴にも雷が直撃し、私に折り重なる形で倒れ伏した。

狙い撃ちをしたかのように雷が落ちてくる。人為的にしたとしか思えないが、一体誰が……？

「ググウ……」

「流石はアダム。あの程度の落雷では転ばせるだけがやつとだったか」

アダムと呼ばれた魔人以外の声が私の前から聞こえた。どうやら別の魔人がコイツもろとも私を片付けに来たらしい。

「リユカーオーン、ドウイウツモリダ……？」

「どうもこうも戦闘能力を喪失した貴公を獲物もろとも片付けようとしたまでのことよ。その腕では碌に戦う事ができまい」

「ソナナコトハナイ……」

「現に追い詰められていたではないか」

足音がこちらに近づいて来て、覆い被さっていたアダムが新手の魔人に持ち上げられた。

「同士討ちは禁止されていないが。悪く思うな」

その言葉の後に、アダムの首が目の前にぼとりと落ちてきた。それにかけてバラバラに砕けた屍肉と端末が降ってきた。これであるのフランケンシュタイン擬きは、完全に破壊されたらしい。

「およそ3時間は動けん筈だ。今のうちに連れて行くとするか……」

首筋を手袋を付けた手で掴まれて、私はリユカーオーンに引き摺られて行った。

連れてこられたビルの屋上で仰向けに転がされている。まだ身体が痺れて動かせず、まな板の上の鯉のような状態からは逃れられずにいた。せめて何処か1箇所でも動かせたのなら何とかかなるかもしれない。

ないが、どこも動かさせないのでは目の前にいる人狼のリュカーオーンに反撃するどころか、逃げることもままならない。

「ゼネラルの奴め、まだ来ないのか……」

リュカーオーンは既にあの白服に連絡はしていたようで、苛ついた様子で奴の到着を待っている。私の麻痺が解けるにはもう少し時間がかかるのに、どうにも落ち着かない様子だった。

何をそんなに焦っているのかは知らないが、あいつが来るのが遅いに越したことはない。あと3時間ほどしてから来てくれたら……。

「済まない。遅くなった」

そんな期待を裏切るかのように、ヌツと白服が出てきた。

「遅いぞ！ 夜明け前だったからいいようなものを……」

「だから悪かったと言うに……。それで獲物は？」

「この通り」

「宜しい」

競りに出されたマグロの様に横たわる私を見て、白服は頷き、手に持っていたインスタントカメラで私と人狼の写真を撮った。

「この写真で貴公が仕留めたことを証明できる。この後、小日向未来が逃げ出さない限り、奪い合いをしても無効だ。安心されるがいい」

そういうなり白服はリュカーオーンに写真を渡して、踵を返して階段へと向かった。

「ゼネラル。この女はこれからどう扱おうと問題ないな」

「ああ。煮るなり焼くなり好きにすれば良いさ……」

に、煮るなり焼くなり……。まな板の上の鯉というのが、比喻どころか現実になりつつある。そうなったら洒落にならない。でも身体が動かせないままでは……。

「わ、わらひを……。ろうするき……」
ベンツの後部座席に乗せられ、ベルリン市内を走り抜けていく。

辛うじて動かせる舌で問い掛けると、直ぐにこう返された。

「眷属の狼の餌にする。この街の東の外れにまで呼び寄せたから覚悟

しろ」

つまり私はこれから狼に食べられるってこと……？ カカシ同然の状態なら頭や胸をかじられそうになっても避けられない。どうにかしてやめさせないと。

「そ、そんな……。 やめて……。 くらさい……。 わらひ、えさになんかなりたくない……。 なんれもいうこと……。 ききますから……。 それに……。 わらひなんかたへても……。 おいしくない……」

「お前をどうするかは、私が決めることだ。 お前にとやかく言われる筋合いはない。 そんなことよりも間も無く到着だ……」

「いや、おねがいを……。 」

無駄な問答を繰り返そうとした時に、通りかかった交差点の脇道からいつかのように路面電車が飛び出してきた。

「うわっ！」

突然現れた電車に対処しきれなかったのか、リユカーオンの運転するベンツは側面を踏まれたまま、500メートルほど引き摺られた。

「一体誰が……。 不味い……。 夜明けだ……！」

車から脱出した際に、日が昇り始めたのに気付いたりリユカーオンは、私を回収する事なく、巨大な狼になって東の方角へと駆け去っていった。

「た、たすかった……。 ？」

しかし安心するのはまだ早かった。 車が出火したんだ。 事故で頭上のドアが吹き飛んだが、身体が動かせないのではどうしようもない。

どうにもできずにいると、フック付きのロープが投げ込まれて、腰のアームに引っ掛けられて外へと身体を引っ張り出された。

「ふう……。 重かったです……」

外でロープを手放したエルフナインちゃんが、息を吐いていた。 助けに来てくれたんだ。

「一体どうしたんですか？ 身体が動かさえないようですが、昨日の雷と何か関係が？」

「あれに打たれて麻痺してしまつて……。首と右手しか動かさえない……」

「なるほど……。ああ、これは酷い！」

近くの建物にまで引きずつてもらい、中で身体を見てもらうと、中の配線が7割がた焼き切れていた。これでは身体が動かないのも無理はない。

「元々、戦い続きで傷んでいたようですし、そこに一度に膨大な量の電気が流れたのでは、こうなるのも無理ないですね……。身体を再稼動できるくらいの配線の予備はあるから大丈夫ですが、戦闘はしばらく無理です」

「そつか」

「そういえば、あのフランケンシュタインの怪物がバラバラになつていたのを見かけたのですが……。あれは未来さんが？」

「いや、あと一歩のところまで追い込んだんだけど、別の魔人に2人揃つて攻撃されて……。この有り様です……」

「さつき逃げていった狼ですね。しかし落雷を起こせるとなると……。迂闊には動けませんよ」

「でもさつき太陽が出てきたのを見て、逃げていったよ」

「ひよつとして夜行性なのでしょうか？ 狼は確か夜行性ですが……」

「なら今のうちに、プラネテューヌと連絡を取れないか試してくれない？ フランケンシュタイン擬きがやられたのなら交信できるかもしれないし」

「分かりました」

「魔人の配線なんか組み込んで大丈夫かな？」

「改造はしたので、そのまま使うよりはマシかと……」

オーデル川を渡り、ポーランドのシュテッティンへと入る。

あの後、予備の配線とアダムのアジトにあった配線を改造した物を組み込み、どうにか動けるだけから戦える状態にまでしてもらえませんが、身体にそこまであつていないせいも、動きにタイムラグが生じてしまう。前々からそういう症状はあったが、ちよつと酷くなっている。プラネテューヌからの補給路がベルリンに繋がらなかったから贅沢言つてられない。

「それにしても魔人が魔人に直接手をかけるなんてことがあるんですね」

「あの連中、私を賞金首に争奪戦をしているからね。魔人同士で戦っている事なんか前にもあったよ。尤も今回のフランケンシュタインの怪物擬きこと、アダムは私よりもエルフナインちゃんがお目当てだったよだけど……」

「どうして僕を？」

「さあね。でも同じ人造人間だからって事で狙っていたみたいよ。フランケンシュタインの怪物も花嫁が欲しがっていたからそれじゃない？」

「僕をお嫁さんにですか……。悪い気はしないのですが……。魔人と結婚するのはちよつと……」

「まあ、本当のところは、死んだアダムにしか分からないさ」

「このヤントラ・サルヴァスパに彼の意味が残っているのなら、是非とも聞いてみたいですね」

少し手が加えられた左腕の義手を撫でるエルフナインちゃん。

「それ、奴の端末を組み込んだんだっけ」

「はい。だからあの路面電車を動かすことができたんです。これさえあれば、どんな機械でも動かせますし」

「へえ……。となると左手で触られたら、私はエルフナインちゃんの操り人形になつちゃう訳か」

「そんなことしませんよー」

「あはは、冗談冗談。でも本当に助かったよ。あのままだと、狼の餌にされていたし。ありがとうね」

「いえいえ」

chapter 15. ウクライナ奇譚

東に進むための道は、ワルシャワで途切れていた。いつかのように壁が建てられて、通れなくなっていたんだ。あの狼男の仕業かどうかは定かではないが、困ったことになった。予定ルートを変更しなくてはならないからだ。

まだ冬じゃないから、ベラルーシとロシアを一気に横断して、樺太経由で日本に乗り込む事を考えていたのだけれども、これでは無理だ。何処か別のルートを探さないと。

「北と南へと行く道は、繋がっていますね……」

「北はバルト三国に行くことになるのは分かるけど、南に行くと何処に繋がる？」

「そうですね……。この道だとウクライナに向かうことになりましたね」

「時間はどのくらい掛かりそう？」

「ちよつと待つてくださいいね……。北に行くと、一番端にあるエストニアの首都タリンに行くまでに半日かかりますね。一方、ウクライナなら首都のキエフには9時間もあれば着きます」

「東に近づくならキエフの方がいい？」

「位置を見ればそうですね。それにウクライナならアジアへ抜ける方法もありますからルートの選択も便利ですよ」

「じゃあそっちに行こうか。東にさえ行けるのなら何でも良いから」

「ウクライナって、確かマリアさんの故郷だよな？」

ルブリンを通過した時にエルフナインちゃんにその事を聞くと頷いて、こう返してきた。

「確かベラルーシとの国境沿いのスラブチツチの出身ですよ。元々、ご両親はチェルノブイリでパン屋をしていたらしいですが、原発事故でマリアさんが生まれる前に引っ越したのだそうです」

「そこまで詳しい事は知らなかった。しかしながら背景を聞いた事で、少し気になる事が一つ出てきた。」

「あれ？　じゃあマリアさんって、一体何で妹さんしか身内がいなくなっただの？」

内戦に巻き込まれたって聞いていたけど、あの辺りでそんな事があつたなんて話は、全く聞いた事がない。事故を起こした原発の近くでそんな事になれば、たちまち大騒ぎになる筈だ。

「まさかだけどき、F・I・S. が節操も無く街を荒らして、あの2人を掻っ攫って行ったなんて事は……、ないよね？」

どうもそんな感じがしてならない。私みたく拐われたなんて言うて事情を持つていたら、余計に顔合わせし辛くなる。

「そ、そこまでは覚えてないです……」

見るからに嘘なのが分かる反応を見せるエルフナインちゃん。どうやらドンピシヤらしい。前にあの人の頭の中を覗き込んだ時に、今私が言った通りのものを見たとみえる。しかしここでもそんな事があつたとはねえ……。

「何処の世界も同じような事件が起きるものなのか。あーあ……」

そうこうしているうちに国境を越え、ウクライナ西部の街コーヴェエリに入った。特に用事もないことから、サイクロンを止めることなく、東へと続く道を進もうとすると踏切の警報器が鳴り出した。ブレーキが壊れた列車でも転がってきたのだろうか。

撥ねられては堪らないから大人しく停車して通過待ちをする。

「壊れた機関車だったら面倒な事になりそう。目の前で止まったら押さなきゃいけないもの」

「押した事あるんですか？」

「調子が悪くなつて立ち往生していた2両繋ぎのディーゼル機関車を踏切から押し出した事ならあるよ。燃料がまだまだ残つてて、しかも連結したままだったから重くつてさあ……」

その時のことを思い出しながら話していると、目の前を冷蔵車と卵のような物を載せた貨車を18両繋いだ貨物列車が通り過ぎていった。しかも壊れた物が転がってきた訳ではなく、ちゃんと機関士が走らせていた。

「今の見た？」

「はい」

「あれ、何？」

「見たことないです」

「後を追う？」

「そうしましょう。妙な物だったら放置しておくで大変ですからね」

遮断機が上がるのを見計らい、線路に入って列車の後を追いかける。単線だが通り過ぎたすぐ後ならば、反対列車とぶつかるリスクはない筈だ。無論、走っていればの話だけど。

貨物列車は、ゆっくりとだが東へ走り続けていて、一向に止まる気配がない。見たところ、卵の貨車にも冷蔵車にも特に武装は積んでいないようなので、積荷はさして重要な物では無いのかもしれない。ただコンテナ車はともかく、卵の貨車については、積荷をしっかりと固定していることからして、失くすと不味い物であろうから、全く必要がない物では無いようだ。

「あれ、何だと思う？」

「魔人の卵じゃないですか？」

「だとしたら洒落にならないね」

腕輪で有効打を与える事ができるようになったとはいえ、一度に複数の魔人を相手にできる自信はない。何せ威力があるといっても、弾丸を撃ち込んで相手の体を銀に作り替えるか、腕輪から伸ばした剣で白兵戦を仕掛けるくらいしか戦法が無い上に、そもそも肝心の腕輪自体を1分間しか動かせないのだから、1人を相手にするのがやっつとである。

「しかしこれまで相手にした魔人は、全員聖遺物をコアにしていますからね。多分、別のものでは無いかと」

「なら良いのだけど」

最初のエルフラインちゃんの予想以外なら何でも良い。中身が魔人だったら本当に笑えないもの。

夜も更けて月が沈む少し前になって、貨物列車は漸く停車した。何処かの駅に辿り着いたようだ。途中で北に向かい出すなどしたから、ここがまだウクライナなのかも分からない。

時計を見ると、深夜0時3分を指している。通りで体がクタクタな訳だ。機関士の方もノロノロと走らせていたとはいえ、大分疲れているだろうな。

「日付が変わるまで走らせるなんて……、無人運転でもしているのか？」

一先ずマシンを線路脇に退避させてギアを装着し、サイドカーで寝ていたエルフナインちゃんを背負って駅のホームをよじ登り、敢えて貨車は捨て置いて機関車に近づく。そこを押さえれば、これ以上動くこともないからだ。

「あ、あれ？　ここは……」

「あ、ごめんね。起こしちゃって……」

揺れでエルフナインちゃんが目を覚ましてしまった。

「いえ、それよりもやっと止まったんですね。普通の駅のようにですが、一体何処なんでしょうか？」

「さっぱり分かんない。途中で北に移動し出したから、もしかしたらベラルーシかロシアにいるのかもしれない」

さつき駅名の看板は見たけど、キリル文字は全く読めないから何処だか分からないままで。

「場所はともかく、機関車をまずはどうにかしようよ。積荷を確かめたいしさ」

「分かりました。あの、未来さん。運転台に入ったら僕を運転席に下ろしてくれませんか？」

「それは良いけど、どうして？」

「機関車を切り離して、適当な場所に置いておこうと思ひまして。壊すのも良いかも知れませんが、何かの役に立つかもしれないし」

確かに燃料が少しでも残っていたら何かと使えるかもしれない。

「でも動かせるの？」

「この左腕なら大丈夫です」

「ああ、機械と名の付く物なら何でも動かせるものね」

警戒しつつ、閉じ込められないように乗務員用の扉を引き剥がして運転台に入ると、運転席にはマネキン人形が乗せてあった。どうやら自動運転で動かされていたようだ。

エルフナインちゃんを座らせるために、人形を動かそうとした時、胴体から赤い煙が噴き出してきた。成分を見ると、何と催眠ガス。

「不味い！」

急いで戸口から脱出しようとする、何と剥がしたはずの扉が何事もなかったかのように出口を塞いでいた。しかも蹴っても叩いても、アームドギアで攻撃してもまるで壊れない。窓やエンジンもまた然りだ。おまけに機関車が動き出して、何処かへ私達を連れ去ろうとしている。

「ええい、仕方がない！」

腕輪を起動させて、剣で扉を打ち抜く。これで一時は、何とかガスを逃がす事には成功したが、間も無く幅の狭いトンネルに入ってしまった、おまけに機関車が止まってしまったものだから逃げられなくなってしまった。後退させようにもマネキン人形は後ろにもあるから動かす事は不可能だった。

「扉が復活したのは……、計算外だった……」

「外から解結作業しておけば……」

しかし悔やんだところでどうにもならなかった。

目を覚ますと、狭くて暗い所に押し込められていた。

「うむうっ……」

頼みの綱である右腕を切り落とされて、何処かに捨てられた挙句、声を立てられないように猿轡で口を塞がれ、自慢の健脚にも枷を付けられて走れないようにしてある。おまけに神獣鏡が作動できないように、何処からか超音波が出されている。今回の相手は、私の事をよく調べ上げて閉じ込めたようだ。ここまで対策を施していた奴は、他

にはいなかったから。

とはいえ感心している場合ではない。このままだと、何も出来ずにむぎむぎと殺されるのがオチだ。それに外部からの細工があったとはいえ、エルフナインちゃんも暴れ出したら手が付けられなくなるから、きつと何処かに閉じ込められているに違いない。早い所、脱出しなくては。

「うっ……、むっ……」

やたらと揺れてあちこちに体をぶつけることやその時感じた肌触り、そして下から聞こえてくる車輪が回る音から判断して、どうも木製の箱の中に入れられて、何処かに運ばれているようだ。木製で人を入れる物だとすれば、棺桶くらいしか思いつかない。考えてみれば、中もひんやりしているような気がする。いや、寧ろ肌寒いくらいだ。

ひよつとして火葬場にも連れて行って燃やす気か？ いや、引き渡す事や体の中にあるものの事を考えると、そのまま土に埋めるつもりなのかもしれない。どのみち笑えない事になることになるのは、確かである。

「んーッ！」

脱出の為に拘束を解こうともがくも、拘束具に頑丈な物を使っているようで、びくともしない。ギアを展開するのは無理だろうし、こうなったらやむを得ない。細かい作業向きの変化ではないが、この際だ。

両脚に全神経を集中して、飛蝗の物に変化させ、枷を引き千切る。次に左腕を変化させて、腕の突起で鎖を引き切り、上に荷物が積まれている事を確認して、箱の側面から逃げる為に左腕をそこに叩き付けた。

1発で穴が空き、そこから手を伸ばして辺りに何も無いかを調べて、ガラ空きなのを認めてから少しずつ穴を広げる。今度は側面の板を完全にひっぺがしてしまう事がないように、慎重に腕を当てていく。

ああ、神経を使うから疲れるし、イライラしてくる。いつその事、完全に飛蝗になって大暴れしたいけど、エルフナインちゃんに完全に飛

蝗になった私を見られるなんて、そんなの絶対に嫌だから我慢する。

どうにか人一人通れるほどの穴を作り、そこから這い出して口の猿轡を外し、自分が今、何処にいるのかを確認する。列車に乗せられているのは確かだが、さつきはそれ以上の事は何も分からなかったから状況確認は必要だ。

「天井の高い貨車の中みたいだ。やけに冷えるな」

どうも箱ではなくて、周囲の温度が低かったのが、寒さの原因だったらしい。食品用の冷蔵車に押し込められたようだ。魔人め、私を食料か何かと……。

「思ってたそうだ……。前会った狼男なんか、仲間の餌にしようとしてたし……」

また電気を流されて、まな板の上の鯉にされては敵わない。そうならないように、ある程度の量の電気をエネルギーに変換する装置を取り付け、残りは放出してしまえるようにアースを増設する強化改造をエルフナインちゃんにしてもらったけど、何処まで通用するかどうか。やつつけで作った装置だから余り信用しないで欲しいと言われているし。

「そんなことより、他の荷物を調べるか」

私が閉じ込められていた箱の周りには、木箱と発泡スチロール製の箱といった魚屋にありそうな箱が堆く積まれていた。鮮魚輸送列車にでも乗せられたのかな。さつきまで追いかけていた貨物列車がそれなのかは分からないけど。

そこまで無用心な事はしないと思うが、私の右腕かエルフナインちゃんが入れている箱があるかもしれないとの期待を胸に、自分の前に下ろした箱の蓋をひっぺがしてみた。すると中から鮭が出てきた。鹿やヤギならまだしも、狼が鮭なんて食べるのか？ いや、この貨車が狼男の物とは限らないのだけど、魔人が鮭なんか食べるのか、今一つ想像がつかない。

「脂が乗ってる……。焼いたら美味しいだろうな」

他の箱を調べると、今度は鯉。その次は川エビ。そして最後は鱒。川魚しか積んでいないのだろうか。

「一体ここにある物と私で、何を作ろうとしていたんだか……」

魔人の食べ物なんか分かりはしないので考えるのを直ぐにやめ、魚を纏めて一つの箱に詰めて鎖で結び直し、エルフナインちゃんへのお土産に持ち帰れるようにした。

「さてと、お次は隣の……」

箱を退けると出てきた仕切りの扉を引き剥がし、区画の隅に立て掛けておいて積荷を調べる。私が閉じ込められていた箱と同じような物が並べてある。何となくこの時点で、中身は察しがついた。

「なるほど、こりや分けなきやダメだ……」

箱の中に入っていたのは、氷詰めにされた若い男性の死体だった。こういう仏さんなんかもう見慣れたけど、食料品扱いされているのを見たのは、初めてだ。まあ、魔人からすれば、人間なんてそんな物なんだらうけどさ。

「墓地を見つけて埋葬しておこう」

蓋を閉めて、別の箱を調べるとまた同じ物が出てきた。今度は女性だ。その次は子供。

「エルフナインちゃんが入っていないと良いが……」

もしホムンクルスの原材料を知っているなら、余程の倒錯した性癖の持ち主でない限り、食料にしようなどとは考えないと思う。ただ万が一そういう趣味の持ち主がいれば、この中からあの子が出てこないとも限らない。

「どうか出てこないでくれよ……」

積み重ねていた15箱のうち、14箱にはエルフナインちゃんらしき人物も私の腕も詰められていなかった。残るは、私が押し込められていた物よりも横幅が長い木箱だけだ。

「これは特に解体されていない？」

大柄な人間でも難なく寝そべる事ができる大きさだ。まさかとは思うが、あの子がこの中に入っているなんて事は無いよね。それにしてはちよつと大き過ぎるが、体が体だから縦に膨らんだ状態で仕舞い込まれているのかもしれない。

そうなっていない事を祈りつつ、蓋を引き剥がしにかかった。

すると4分の1を剥がしたところで、氷の中から見覚えのある桃色の髪が見えた。まさかとは思ひ、更にベリベリと蓋を剥がすと中から出てきたのは……。

「マ、マリアさん!」

左腕と首の半分、それに腹を喰いちぎられたマリアさんだった。狼男にやられたのか、体の各所に焦げた痕がある。噛み跡からして、身体を喰い荒らしたのは、恐らく奴の眷属と見ていい。しかも首に掛けている筈のアガートラムを持ち去られている。あれは確か妹さんの唯一の形見の品だったのに、それを何処かに持ち去るなんて。

「酷い事しやがる……」

しかしながら疑問が一つ出てきた。何で態々喰い殺したマリアさんを運んでいるのか。倒して喰い荒らしたのならもう構う事は無いはずなのに。それこそ翼さんやクリス同様、海の底に放置していてもいい筈である。

考えても魔人の、特に下手人である狼男の腹が読めず、首を傾げるしか無かった。

取り敢えずマリアさんの入った箱を、私が閉じ込められていた区画へと運び込み、搬入口を攻撃して脱出を図る。

しかし飛蝗の手足での打撃では傷一つ付かない。ライダーキックのような飛び蹴りなら何とかなるかもしれないが、いかんせん高さが足りないから繰り出すのは不可能だ。

「右腕もない今、壊すのは無理だ。こうなったら開くのを待つしか手はないな……」

仕方がないので、箱を積み上げてその裏に隠れる。無論、マリアさんの箱も一緒に手元に移して置く。こつちが知らないところに持ち去られては、土饅頭すら作る事も出来なくなるからだ。

「さて一体何処に着くのやら……」
出来ることならそろそろ着いてほしい。寒くて敵わないから。

不意に列車が減速を始め、そして止まった。耳をすませるとガチャリと重たい音がして、ディーゼルエンジンの鈍い音が遠ざかっていくのが聴こえた。機関車を切り離れたらしい。ここで機関車を付け替えるのか、或いはここが終着駅か。

どちらか考えていると、扉が開いた。どうやら後者のようだ。

足音が此方に近づいてきた瞬間に荷物を崩落させて、荷下ろしに従事していた兵隊の頭を踏み潰し、マリアさんを担いで外へと飛び出す。

列車に振り返って確認すると、卵の貨車はとうの昔に切り離されていて、冷蔵車3両だけが残されていた。私が乗っていた1番端の車両の他は、まだ開けられていない。

仮面ライダー宜しく力一杯飛び上がり、蹴りを叩き込む。今度は高さが十分あるから楽々蹴破る事ができた。しかし……。

「お肉だ……」

中には生肉が吊るしてあるだけで、他には何も無い。仕切りもない。隠し扉もない。

「それならー」

3両目を蹴破ると中から紫色の液体が吹き出してきた。舐めてみると、ただのワイン。中を探っても、エルフナインちゃんらしき人影は見当たらなかった。

「二足先に連れ去られたか……」

しかし何処に？ さっきの機関車の中に閉じ込めていたとは考え難い。乗っ取られる可能性が高いからだ。そう考えると、ここに来る道中の何処かで閉じ込められているか、若しくは想定し得る限り、最

悪の事態になっているかのどちらかだ。だが考えている余裕は無い。「今はそれよりも背後の兵隊をどうにかしないと……」

私と違って、ギアを装着している兵隊30体を切り抜ける方が先決だ。

兵隊の光線を飛び跳ねて逃れ、駅の敷地から飛び出し、集落の中へと逃げ込む。向こうがギアを装着しているのならば、此方も使えるのでは無いかと思ったのだけど、いつものやり方でも聖詠でもうんともすんとも言わない。麻由だった頃は、こういう時の為にジャミング用の装置を持っていたけど、イカデビルを仕留めた後、水没して壊れてしまったからその手では切り抜けられない。

「発信源を早く見つけないと……」

結局、アナログな方法で対処するしかないのだ。同士討ちを恐れてか、敵さんがミラーデバイスを使わないのがせめてもの救いだか……。

「何処かでマリアさんを下ろさないと、下手すると巻き込んでしまう……」

これ以上、ズタズタになったら目も当てられない。だから隙を見て、マリアさんの仮の墓所を作らないといけない。しかしあちこちから砲火を浴びせられては、その余裕など当然ない。

だからといって兵隊に回収されてはどんな事になるか分かったものではない。

「うわっ……!」

放火を避けて駆け込んだ小屋の床が抜けて、地下室へと転げ落ちた。

「いつつ……」

マリアさんの体は奇跡的に無事だったが、このままだと袋の鼠だ。揃って溶かされては如何にもならない。

「おやっ……」

ふと見るとドアが一つあって、その中の部屋の真ん中に、長い箱が置いてあるのが見えた。開けてみると運の良い事に、中は空だ。マリ

アさんには悪いが、暫くここで待っていてもらおう。

箱にマリアさんを寝かせて蓋を閉じ、奥の部屋のドアを閉めてから、四方の柱をへし折って小屋を崩し、兵隊の前に飛び出して挑発した。

「そら、こつちだ！こつち！」

それに釣られて、30人が全員こちら目掛けて光線を撃ってくる。でもそれくらいの攻撃を見切れないほど、こちらもヤワじゃない。

集落の建物を盾にしつつ、ジグザグに走って狙いをつけにくくして逃げ回る。そろそろ反撃に出たいが、神獣鏡無しで複数の敵を倒すのは無理がある。かといって近くには何も……。

「あっー」

ふと見ると目の前の舗装路にマンホールが有る。そうだ。あの中なら超音波も届くまい。

蓋を引き開けて中に飛び降りる。するとその時の風圧で問題無く神獣鏡が動いてくれた。

「助かった」

下水道の中に兵隊が飛び込んできたが、此方に気づく前に狙撃して片付ける。15体ほど片付けると来なくなり、バイザーで調べると少し離れたマンホールから回り込んできたので、ミラーデバイスを潜行させて、全員が出口から離れた所に入り込んだ瞬間に、天井を攻撃して崩落させてから脱出した。一先ず片付いたか。

「こいつがアンテナか……」

小屋を挟んで反対側の海か湖に面した場所に、件の超音波のアンテナがあった。特に防御されてはいないので、人蹴りして破壊し、ギアを展開して小屋まで戻る。

そしてマリアさんを入れた箱を引っ張り出して、さつき偶然見つけた墓地の一角に穴を掘って、埋葬した。

「エルフナインちゃんを助けてから、ちゃんとしたお墓を作るので、暫く辛抱しててください」

そうして手折った花を置いて手を合わせ、そこを立ち去ろうとした

時だった。急にギアが維持できなくなった。また超音波が飛び出てきたんだ。

出所を調べようとする、私の背後に腰に小さな機械を巻いたエルフナインちゃんがいたんだ。ただ手にアメリカで持っていたアイリッシュユ・ハープを持っていて、それを掻き鳴らした。

不吉な予感がして咄嗟に飛び退ると、ダウルダブラのファウストローブを装着したエルフナインちゃん、いや、キャロルがこちらに魔法陣を展開して、4種類のエネルギー波をぶっ放してきた。まともに喰らえば、身体が吹っ飛ぶのは目に見えているから右に飛んで避け、水場へと逃げる。

「今度は悪用されたか！」

前にあの子のもう1人の自分が叩き起こされた事があつたが、今度のはあの時とは反対に、私への刺客として利用されている。響達が6人がかりでやつと倒せた相手だ。腕輪無しだと、とても押さえ付けられそうにない！ こうなったら危険だが、神獣鏡の光線を喰らうよりは即死する確率は低い。

2発目が発射されると同時に飛び上がり、エネルギー波を両足にわざと喰らい、そのまま水底へと転がり落ちる。膝から下がどちらの足も吹き飛んだから出血量が物凄い量だが、これで行かぬか誤魔化せるか？

2時間後、キャロルの気配が消えた。どうやら何処かに引き揚げたようだ。

こつそり場所を移動して、平らな岩の上によじ登り、岸壁から湧いていた真水で傷口を洗ってそれから足を再生させる。

「さてと……、エルフナインちゃんをどうにかして取り返さないと……。しかしダウルダブラを使えるようにされたのでは、厄介だな……。おまけに片腕ではどうにもならない……。」

せめて右腕を見つけないと戦いにならない。しかし手がかりが無いのでは、探しようがない。八方塞がりだ。

ただ今のところ、得る物が何もなかったわけでは無い。アガート
ラームのペンダントが、海の底にあったんだ。

「しかしながら……、マリアさんじゃなきや使い物にならないんだよ
なあ……」

2つのシンフォギアを使うのは、そう容易く出来る話ではないと聞
いているから、私が持っていたところで、結局どうにもなりはしない
のだ。

崖を登り終え、上の陸地に辿り着いた時に夜が来た。そこで狼男が
来ることを警戒し、さっきの住宅地の中のコンクリート建ての家に潜
む。

するとそれほど時間が経たないうちに、稲妻が見えて雷鳴が轟い
た。あの狼男が、私がこの辺りに潜んでいる事を知り、燻り出しに来
たんだ。

あちこちの建物が雷撃を受けて燃え上がる。そしてここにも雷撃
が来る。しかし間違っても飛び出す訳にはいかない。今飛び出して
も無駄死にするのがオチだからだ。

息を殺して、アガートラームを握りしめて、敵がここに来ない事を
祈る。もうそれしかできない。

夜明け前に、敵さんの気配が消えていくのを感じた。どうやら諦め
て引き上げたらしい。

その事に胸を撫で下ろした途端、急に隠れていた物置部屋の戸を叩
く音がした。

すわ見つかつたかと、心臓が止まりそうになった。しかし戸の隙間
から覗いたところ、狼男が着ていたベージュの制服ではなく、青い服
が見えた。

そこで少し気になり戸を少し開けて、隙間から覗くとそこに立つて
いたのは……。

「えっ、えっど……」

「早く出てきて頂戴。夜明けまでもう時間がないから」

数時間前に埋葬した筈のマリアさんだった。S・O・N・G・の制服も着ていて、生きていた時そのままの姿でいる。どうなってるの、これ。

「あの、私はまだ……」

「安心なさい。向こうに連れて行こうなんて気は無いから」

どうやらお迎えに来たわけでは無いらしい。妹さんの所に行った事に関しては、全く否定するつもりはないようだが。

「色々と話をした事があるけど、時間がないから手短かに要件を伝えるわね。貴女の右腕の在処は、ここから北東5キロの地点にある溪谷にあるわ」

「本当ですか?!」

「ええ。運び出されるのを確かに見たわ。それとごめんなさいね。この体じゃ、取り返す事ができないの」

「そんな！ 教えて下さるだけでも有難いです。あれが無いとどうにもならなくて……」

でも場所さえ分かれば、取り戻しに行ける。

「ただそこは狼男のアジトでもあるの。簡単には取り返せないわ」

「となると何処か奥まった場所に……」

「その可能性が高いわね。ただ詳しい場所は、そのアジトにいる切歌と調に聞いて欲しいの」

2人もウクライナにいたのか。しかしアジトにいるっていうのが引つかかるな。単に捕まっているだけなら、知ってそうにないのに。「分かりました」

「あと、自分の身体を埋めてもらって置いて何だけど……、2人の体を取り返してもらえないかしら……。あそこから動かさないから2人ともアジトを離れられないのよ」

ああ、やはりそういうことか。2人ももう……。

「はい、必ず連れて帰ります。それまで待つていてください」

「頼んだわよ。それにしても……」

ひんやりした手で頬を触られる。

「雰囲気が変わったわね。私とはぐれてから一体どんな経験を積んできたのかしら？」

「なあに、コックニーとコーヒーの淹れ方とオートバイの乗り方を覚えただけですよ」

夜が明けてからギアを装着し、一先ず集落を離れて黒海に出て、昨日1日かけてこちらに呼び寄せていたサイクロンに飛び乗り、言われた地点に急ぐ。

そこまで走らせると確かに渓谷は見つかり、アジトへ繋がる引き込み線も見つかったから問題ないのだが、問題はこれから。どこをどう通れば良いか分からないのだ。

一本道なのでそのまま突き進むと、妙な物が並べてあった。蠟人形だ。しかもやけに生々しい外見をしている。まさか食料品だけでなく、このオブジェの素材としても……？ 何とも悪趣味な野郎だ。

奥に進むと、今度は鹿の剥製が置いてあるだけだったが、更にその奥にはとんでもない物が並べてあった。

「ああ、なんて事をー」

恐らくここを攻撃に来た人達なのだろうけど、こちらから見て左側にローブを着た錬金術師が、剥製にされて並べてあった。そして右側には……、あの2人がギアを装着したまま、剥製にされていた。

「どうだね、そのオブジェは？」

前から狼男がキャロルを従えてやって来た。

「とんでもない趣味なことッ！」

飛蝗に変えた足で地面を蹴ってショルダータツクルを叩き込もうとするも、キャロルに阻まれる。狼男の方は、特に何も仕掛けてこない。何故だ？ 私を麻痺させた時に、日が昇ったのを見て逃げ出したけど、それと違いがあるのか？

しかし考える余裕はない。キャロルが琴線で私を拘束して、黄色いエネルギー波を撃とうとしてきたのだから。この距離や幅では避けることは到底無理だ。

「これまでか……」

半ば諦めかけた瞬間、発射ギリギリのタイミングで何処からともなく現れた半月の形の靄が琴線に絡み付いて、拘束を解いてくれた。それだけではない。

今度は丸型の靄が私を包んで、錬金術師の剥製の後ろにあった隠し扉に押し込んでくれたんだ。それでひとまず難を逃れる事に成功した。

隠し扉の向こうは、スロープになっていた。そしてその終点には、2台のトロツコが置いてあった。一体どっちに乗ればいいのかやら。

「右のに乗るデス」

「切歌ちゃん？」

「早くするデス！」

「う、うん」

急かされるまま、トロツコに乗り込みブレーキを解除する。2人に在処は聞けと言われたから、言う事を聞くに越したことはない。

「次の分岐点は、左に曲がってください」

今度は調ちちゃんだ。交互に教えてくれるのかな。

「いや、私と切ちゃんの間で覚えている場所がバラバラなだけで、交互という訳じゃないです」

「あらそう」

「それよりも未来さん、いつ帰ってきたデスか？」

「ほんの少し前だよ。南アメリカから旅して日本を目指してるの。それにしても私がよく本物だと分かったね」

「あの人は、何だか作り物っぽくて……、ただのお人形みたいでしたから」

「本物のフィンキデス……」

「切ちゃん、それを言うならフンイキ」

体が無くなってもいつもの調子のようにだ。何だか安心できるような、これっきりしか聞けないのが哀しいような。複雑な気分だ。

分岐点を誘導された通りに曲がって、辿り着いた終点には確かに腕輪が嵌められた私の右腕が置いてあった。

急いで手に取り、取り付けたところで追ってきたキャロルの砲撃を避け、部屋にある3つのドアのうち、勘で選んだ右端のドアの中に飛び込み、更にそこにあつたドアを開けて、外へと飛び出す。右腕が完全に繋がりにきつた訳では無いからすぐには戦えない。

キャロルが追ってくるのを溪流を下ってやり過ぎし、偶然見つけた獵師小屋に入って、腕が完全にくつつくのを待つ。

しかし彼女がそんな余裕を与えてくれる筈もなく、小屋の窓を打ち破って木の間を潜り抜けて、近くの道路にまで呼び寄せたサイクロン号に飛び乗り、フルスピードで逃げ出した。

集落へと退却した時には、もうキャロルは追ってきていなかった。白乾児のように、空からこちらを見下ろしているなんて事も無い。

「一先ず助かったか……。しかしながら何であいつ、自分は前に出てこなかったんだろう」

今までの行動からして、太陽が出てくると此方とまともにやり合えないという可能性がある。でなければ、朝になった途端、私を放置して逃げ出した事やキャロルの援護を特になかった事への説明がつかないからだ。それに昼間は、攻撃を仕掛けてこない。夜だけだ。

「つまり昼間なら大した事ないのか？」

なら今のうちに攻め込みたいが、神獣鏡を使う事から考えて、ここしか現状戦いを挑める場所はない。キャロルのジャミングを押しさえ込む観点から見ても、遠距離からの狙撃をするしか手はなさそうだもの。

日が沈み、満月が東の空から昇ってきた。それに合わせて、敵さんの攻撃も始まる。雷対策に絶縁体になるビニールで遮蔽物を作り、その下から先ずはジャミングを仕掛けてくるキャラルを探す。神獣鏡での遠距離からの狙撃しか、現状ではダウルダブルを引き剥がす方法が思いつかないので、目を皿のようにして探す、近くで落雷が起き、建物が吹き飛ぶものだから落ち着いて探す余裕が無い。

「前よりも雷の威力が上がっているな……。狼男だから満月の夜には強くなるのか？」

となると屋内にいても危ないのは変わらないな。寧ろ崩落した時の瓦礫に巻き込まれるのがオチだ。

「んっ……」

雷鳴が聴こえる間隔が狭くなってきたので、場所を変える。するとその直後に、土台になっていたコンクリート製の建物諸共、さっきまでいたビニールテントが雷撃で吹き飛ばされた。

「おお、くわばらくわばら……」

しかしついてない事に、着地した先でキャラルと遭遇し、ジャミングで神獣鏡が機能停止した隙を突かれて、琴線で絡め取られてしまった。下手すると自分も黒焦げになるかもしれないのに良くやるものだ。まあ、ライオンの形をしたロボットの爆発に巻き込まれて無事だった事を考えると、雷くらいどうということもないのかもしれないけど。

「でもエルフナインちゃんまでもやられかねないのは、避けたいな！」
自分が利用された時は、遠慮なく手に掛けてくれとは言われたが、馬鹿正直にそんなことができるはずもない。

両脚を飛蝗にして、拘束を仕掛けるキャラル諸共右隣にあった木造住宅に飛び込む。しかし屋根に穴が空いていて、おまけに雷が運悪く落ちてきたものだから……。

「うぎゃあああー！」

咄嗟にキャラルを庇うも間に合わず、2人揃って感電する羽目に

なった。有言不実行とはまさにこの事だ。

エルフナインちゃんの強化改造のおかげで、体に流れ込んだ電気の殆どをどうにか追い出す事には成功した。だが変換器が電圧に耐え切れずに壊れてしまった。このままだと、さっきの物と同じ威力の雷が落ちてきたら多分死ぬ。

しかし今のショックで、ジャミング用の装置が吹き飛び、神獣鏡を装着できるようになった。幸いにもキャロルもほぼ無傷だ。

追い討ちを掛けるように申し訳ないけど、目を覚ます前に流星を撃ち込んでダウルダブラを吹き飛ばし、呼び寄せたサイクロンのサイドカーに乗せて、黒海へと逃がす。

「後は狼男を押さえ込むだけだ……。彼奴は何処に……。いた！」
向こうもこちらを見つけて、手に持った杖の先をこちらに向けてきた。

咄嗟に後ろへ飛び退ると、さっきまで私がいた場所に雷が落とされた。あの杖が指揮棒のような物らしい。

ならばあれを無力化すれば……。いや待てよ。狼男は銀の弾丸で殺せるというから、杖を銀にするよりも彼奴に直接撃ち込んだ方が賢い。

そう判断すると、脚のスラスターを吹き飛ばして身軽になって、走って雷を躲しながら奴に近づいた。数をばら撒いても良いかも知れないが、稼働可能時間が1分しかない事を考慮すれば、一撃で仕留める作戦に出た方が良い。

狼男の全身がよく見える位置まで近づき、腕輪を起動させる。

そしていつもより大きめの銀の弾丸を作り出し、奴の胸元目掛けて撃ち込んだ。撃ち込んだのだが……。

「効いてない?！」

確かに命中したのに、何の変化も起きない。どうして?!

「月が見える限り、私は死なんよ……。」

それを聞いて、私の顔色が真っ青になった事は言うまでもない。不死身の怪物相手では、幾ら強力な攻撃手段を持っていても何の役にも立たない。一体どうすれば良い。

月が見える限りという事は、月が隠れてしまえば、状況はこちらに好転する可能性を含んでいるが、その要因になりそうな奴の雷雲は何処かに消えてしまっている。

「月光を浴びれば、こんな芸当も可能だ……」

そう言つて杖を銃のように構えて、黄色い球体を先端に作り、私目掛けて発射してきた。

横に飛んで躲したが、球が通り過ぎた跡は地面が半円状に抉れていて、先にあつた民家を木っ端微塵に吹き飛ばした。かなりの威力があると見ていい。当たれば下半身どころか、全身が粉々にされてしまう。

「近づけば球どころ……、離れば落雷……」

何とかして彼奴に月光を浴びせないようにしないと。

「逃げた所で何になる……」

連写される球を躲しながら、必死に焼け跡を逃げ回る。距離を開けると、雷撃が襲ってくるから一定の間隔を取つて逃げることになり、隠れることもままならない。

そうこうしているうちに、雷以外の理由で崩落した建物が見つかった。よく見ると、昨日私がマリアさんを隠した小屋だった。

そうだ、ここなら！

急いで崩落した屋根の間に出来た穴から小屋の中に飛び込み、地下室へと滑り降り、奥の部屋へと逃げ込む。

狼男も穴を球で広げて追いかけてきて、奥の間に駆け込んだきたのだが、ここで自分がミスをした事に気付いたようだ。月が見えないところに来てしまったという事に。つまり不死身ではいられないのである。

「しまった、ここでは！」

慌てて外に出ようとしたが、横から飛び出して体当たりをして転ばせ、杖を奪いとって首筋をそれで殴りつける。

そして止めに腕輪を起動させて、そこから出した剣で背中から心臓を突き刺し、胴体に銀の弾丸を50発撃ち込んだ。

狼男は、そのまま死んでいった。幾ら不死身の体に成れるとはいえ、その条件を潰された上にここまで攻撃されては、もう動く事もままならなかったようだ。

それにしてもこいつ、一向に爆発する気配が無い。

「剥製か蠟人形にでもしてやろうかな……」

こいつの趣味を思い出して、そう呟いた。そうすれば犠牲者も多少は浮かばれるような気がしたものだから……。

マリアさんと基地から取り返した切歌ちゃん、調ちゃんを納めた棺を、イヴ姉妹の思い出の場所であるスラヴチツチの花園に面した空き地に掘った穴に埋める。

「マリアさん……、約束は果たしましたよ……」

穴が埋まった後、狼男の基地から持ち出した白ペンキと板で作った十字架をエルフナインちゃんが3つ建てる。

「まともな物と言ってもこれが精一杯です。勘弁してくださいね」

「どうか安らかに……」

手を合わせて、白い薔薇を3人分供えて後を立ち去る。

「身体は大丈夫？」

「ええ、ダウルダブラを装着していたので何ともないです。でも雷と流星のダブルパンチはもう懲り懲りです」

「なら良かった。しかし今回は、マリアさん達が居ないと危なかった……」

「マリアさんや切歌さん、それに調さんが、右腕の在処を教えてくださいましたけど……」

「うん。マリアさんは、私が見つけたその晩に大体の場所を教えてくださいました。それで切歌ちゃんと調ちゃんは、アジトの何処にあるかを

誘導してくれたの」

「そうでしたか……。ともかくこれで3人とも安心して休めると良いのですが……」

「そうだね。そして向こうで待っている家族と再会できたら尚の事良いのだけど……」

花園に吹く優しい風が、その人達の元に3人を送り届けてくれればなあ……。

chapter 16. 閑話

「水タンクがペシャンコですね。ただでさえ水源地が少ないのに、こんな事をするなんて……」

大岩で押し潰されて見るも無残な姿に変わり果てた水タンクを前に、2人で茫然と立ち尽くしていた。現在時刻は朝の10時。所はウズベキスタンにある砂漠。天気はこんな時に限って快晴。

ついさつき魔人の岩男に奇襲をかけられ、物資をめちゃくちゃにされた。大したことない強さだったからあっさり勝てたけど、水は無くなるわ、私の予備パーツや工具はお釈迦にされるわで大損害。止めに端末までぶっ壊され、プラネテューヌからの補給を受けることも不可能。無事なのは着替えと寝袋くらいだ。

「ったく、このかんかん照りの砂漠のど真ん中で、余計な仕事を増やしてくれたよ……」

岩男の残骸に蹴りを入れてから、マシンに戻ってエンジンを噴かせる。でもエルフナインちゃんは、残骸の前に座り込んで動かない。何か気になる物でもあったのだろうか。

「エルフナインちゃん、目ぼしい物でもあったー?」

「別に無いですー」

「じゃあどうしたのさー。置いてくよー」

「この石塊蹴飛ばしても大丈夫でしょうか?」

あら珍しい。流石のあの子も水をダメにされて頭に来たのか。

「思いつきりやっちゃいなさーい! 足の骨を折らない程度にー!」

日差しが照りつける中、マシンを東へ東へと走らせる。暑くて移動したくは無いが、日が暮れるのを待っていれば、その前に脱水症状で倒れてしまうのは避けられない。だからオアシスを目指して、砂漠を貫く道を進む事にした。

けれども行けども行けども砂しか見えない。他に目に入るものといえば、青空と太陽くらいだ。おかしいな。地図だとそこまで広くな

かったのに。

「この辺りに川があった筈だけど、干上がっちゃったのかな……」

世界史だったか地理だったか、何の授業だったかは忘れたけど、なんとやらという名前の川が、この辺りを流れていたと聞いた事があったから、水を汲めると思ったのに。アラル海に流れ込んでいる川だったから、とうの昔に干上がっていたのだろうか。

「アム川の事ですか？ あのカが干上がったなんて話は、聞いた事ありませんが……、言われてみれば見当たりませんかね」

「近くのアラル海はほぼ干上がっているけど、川はそんな事なかったんだ」

「それはそうですよ。でなければ、国自体が干上がってしまいます。今の僕達みたく……」

暑さでフラフラになっているエルフナインちゃん。砂だらけの場所だから日陰を探すのは難しいが、せめて水を探さないと。サン・テグジュペリの「星の王子さま」のように井戸でも見つかれば良いけど、そんなに上手く世の中は出来ていない。もしかすればあるかも知れないが、何処を掘ればいいのか全く分からない。

「自販機でもないかな……」

もつと見つかる見込みのない物を口に出しながら辺りを見回すと、北側に砂が窪んでいる場所が見えた。

エルフナインちゃんを背負って近づくと、少し前まで水が流れていたような痕跡があった。用水路か川かは分からないが、これを辿っていけば、水を手に入れられるかもしれない。

「期待した割には、大した物は無かったね」

結局見つかったのは、干上がった川底に残っていた小さな水溜りだった。人2人が飲む分はあるから、何の収穫も無いよりはマシだけど。

「取り敢えずこれ濾過しようか。浄水器は携帯式の物があるし」

「はい」

水溜りから水を掬ってそれぞれの浄水器に入れ、飲み水を作って飲む。砂っぽくて温いが、飲めるだけマシだ。

3分の1程の量を飲んでから、残りはエルフナインちゃんに渡した。中々飲もうとはしてくれなかったけど、それならと砂に水を垂らそうとしたら慌てて飲んでくれた。熱中症でフラフラになっている人間を前に水をたらふく飲めるほど、私の面の皮は厚くないから。

もうじき日が沈むのに、一向に砂以外の物が見えてこない。町が出てきても良い頃合いなのに、それらしき物は影も形もない。

「夜は冷えるから早く何処かに落ち着きたいのに。砂漠化がここまで酷くなってたなんて……」

「一気にこうはならないですよ。バルベルデ同様、魔人が荒らしていったのだと思います」

この分だと、日本はどうなっているか分からないな。もしかしたら島全体がジャングルになっているかもしれない。或いはここみたく砂だらけかも。

夜の10時を回った頃に、緑色の草が生茂る場所に着いた。草原だ。近くに水があるに違いない。

エルフナインちゃんにタンクの修理を任せ、神獣鏡を装着して水源らしき場所が無いか空から探してみると、少し離れた所に枯れている小川があった。当面の水を確保するには、申し分ない水量だ。

「中国国境までは余裕で持ちそう」

出来れば東シナ海の沿岸に出るまでは持たせたいが、あの国は広いから移動には時間がかかりそうだし、何より予備パーツの確保の為に、あちこち駆けずり回る羽目になるだろうから、ここで汲む分だけでは十中八九水が保たなくなる筈だ。

「最低でももう1箇所は、給水ポイントは見つけておきたい。あの国で水質の良い川を探すのは、かなり骨が折れるだろうから」

写真でよく見かける絵具を流したような川ばかりということは、流石にないとは思うけど、敵さんの妨害でまともな物も駄目になっているかもしれない。国境越えをする前に何処かで給水するのは必須だ。

「湖か川が見つかるの良いけど、枯らされているかもしれないのが難点だ。地下水を掘り当てないといけないかもね……」

「アームドギアはスコップの代わりにはなるし、これや腕輪を使って地面を砲撃すれば、大穴を開けるくらい造作もない。

「とはいえ砲撃だと水が蒸発しかねない。蒸留すれば済むかもしれないけど、手間がかかるから使えそうにないか……」

「水に関してはこれで一息つきますね」

「そうだね」

水を飲んでから草原に寝転び、これからの事について2人で話し合う。

「ただ他の物資に関して言えば、どうなるか分かりませんが……」

「特に食料と補修用の部品、あと工具を手に入れないとね」

「食料はさておき、未来さんの持っていた工具については、僕の左腕で全て代用できますが、部品は大丈夫ですか。サイボーグ向けの部品の製造工場なんて聞いたことも見たこともないです」

「それは大丈夫。そこら辺の機械のパーツで代用が効くから。前にもオートバイやテレビの部品を改造してどうにかしたこともあったし……」

「便利な構造なんですね」

「整備性を良くして稼働率を高める目的だって聞いた。戦闘用だからその辺を重視したんでしょ。ただ何でも使えるわけじゃないし、それに……」

「それに？」

「純正品に比べるとどうしても性能が落ちるんだよ。あくまで一時凌ぎでしかないから」

「そのままの状態で戦い続けるなんて事は、想定していないでしょう

しね。でもそれだと今まで送られてきた物でも影響があつたのでは？」

「あるにはあつたよ。ただかなり質の良いものを送ってもらえたから、パワーダウンも悪い時で15パーセントに抑えられていたし、戦闘にはそこまで影響は無かつたかな」

「これからはどうなるかわからないと」

「中国製品も品質は良くなってるって聞いてるけど、肌に合うか分からないからなあ。ガラクタ掴んで動けなくなるかもしれないし」

「やはり純正品が一番良い事には変わりないですね」

「それはそうだよ。でも無い物ねだりしたって始まらないしね。それにどうしようもない時は、兵隊を捕まえて追い剥ぎの真似事をすれば良いから。やる事は追い剥ぎ以上に酷くなるけど」

「あの……、それは僕がやります。同じ顔の相手を解体するのは、お辛いでしようし……」

「良いよ、大丈夫だから。生きていたら危ないし、身体の中の原子炉が壊れていたら後々ともない事になるから。助けを呼べない状況で、身体を壊したらそれこそもうどうしようもなくなる」

「そうですか……。でも無理なら直ぐに言ってください」

「分かった。ありがとう」

夜も更けてきたから寝袋に包まり、一眠りしようとするとお腹の鳴る音が聞こえた。エルフナインちゃんの方からだ。

「お腹空いたの？」

「恥ずかしながら……はい」

小声で答えつつ、あの子は頷いた。暗いから顔まではよく見えないけど、きつと顔を赤くして答えたに違いない。

「無理ないよ。何にもお腹に入れてないんだから」

「西瓜でも見つからないかと期待していたのですが、期待外れでした……」

「西瓜かあ……。ああ、水分補給にもなるからぴったりと言えればっ

たりだね。暑いし」

「少し季節外れかもしれませんが、手に入らなくはないと思っていたので……」

「そう言われると何だかこっちも欲しくなってきたやうな」

「でも今日通ってきた道を見る限りでは、西瓜はおろか、萎びた菜葉すら生えてるかも怪しいですからね。食べたくても種を見つけて育てる事になりそうです」

「錬金術でどうにかできないの？」

「それが出来れば、僕達は今頃クーラーの効いた部屋で、フルコースでも食べてると思います」

「それもそうか。御伽噺の世界じゃないものね」

「ですがこれまで戦ってきた相手は、どれもこれも御伽噺の怪物みたいな存在ですから、何となくここがお話の世界とも考えたくありません」

「お話の世界か……。それならもっとマシンな世界にしてほしいや。幾ら何でもキツイもん。使える時間に限りのある腕輪1個よりも腕利きの装者6人がいる方が数で勝てるし、長く戦えるのは確かでしょ。そりゃLINKERを使わないといけない元F・I・S.の3人は、いつまでも戦えるわけじゃないけどさ、1分しか戦えないなんて事は無いもの」

寝返りを打ってあの子に背を向けながら、私は尚も言葉を続けた。

「これから敵さんの本拠地に海ひとつ隔てた場所に近づくとともになれば、どうしても弱音を吐きたくなるのよ。今までのよりもずっと強いのをぶつけてくるのは、目に見えているからさ」

「未来さん……」

「部品だっから見つからないかもしれないし、それに兵隊だっって現れるか分からない。それに何より……、もう助けを呼べない。だから今度やられたらそれでお終い。何でだろうね。すっからかんになると、途端に弱気になっちゃう……」

太陽の光が頭にほんの少し射した頃に起き出して、寝袋を仕舞って出発する準備を整えた。

「さてと、暑くなる前に早くここから抜け出そうか」

「はい。ただ出発には時間がかかりそうですね」

「そうだね。あのイナゴの群れを片付けないと……」

私と同じ顔のイナゴの群れが、空を飛んでこちらへ近づいてくる。その数およそ100体。本当にイナゴだったら佃煮にでもすれば、そこそこ食いつなげる数が来た。でも実際は、何の栄養もないただの鉄屑。尤も多少は食べられる部位がなくも無いけど……。

「まあ、予備パーツを確保する手間が省けたからいいか。エルフナインちゃん、下がってて」

アームドギアを2挺取り出して両手に持たせ、急上昇して有効射程距離まで近づき砲撃を叩き込む。向こうも反撃してきたから思ったほど落とせなかったが問題ない。

さつさと片付ける為に腕輪を起動させて、ミラーデバイスを展開してさつきの物よりも数倍は強力な砲撃を発射して、イナゴが発射した閃光や流星を掻き消し、奴等を吹き飛ばした。

「あつ、そうだ。3割ほどは残しておかないと、部品取りができなくなる」

固まって飛んできたから当てるのは楽だったが、奴さん達の身体の中にある物をいただかないといけないから、全部消し飛ばすのは不味かった。

「まだ残ってるかな……」

砲撃を中断して様子を窺うと、まだ傷の浅い生き残りが20人ほどいる。他は辛うじて浮いているけど、身体中が焼け爛れて戦闘が難しいのが25人と中身が剥き出しになっているのが15人、残りは消し炭になっていた。あれではもう使えない。

「思ったよりも使い物になるのが残ってて良かったよ」

虫の息の兵隊には、閃光とミラーデバイスからの光線を頭にぶち込んでトドメを刺し、残った20人に私は襲い掛かった。

急加速して1人の首をアームドギアで斬り落とし、残った胴体を地面に置く。これで胴体の部品は、1体分はストックができた。

「首から上のパーツは、千切れてない物が欲しいから首と胴は残るようにはしないと」

流星に生首だと使い物にならないものが出てくる。例えば首と胴体を繋ぐコードは切れてしまう訳だから使えなくなる。繋ぎ合わせればまだ使えなくは無いけど、銅線もハンダゴテもない今、それは難しい。

「胸像みたくしないといけないから中々に大変だ」

敵はまだ19人もいるから、そこまで器用なことができるかは分からない。下手をするとこつちがそうなりかねない。

「大人数で襲い掛かる場合は、四方から攻撃される事が少ないのが有難いけど……。ああ、しまった！ 首から下は、スピアがもう少し余分に必要なのを忘れてた！」

そんな事を考えながらも、私は四方からの流星と斜めからの閃光という光線の嵐を躲しつつ、砲台と化している1人を飛び蹴りで吹き飛ばし、後ろから飛び出してきた新手には、左手に掴んでいたアームドギアを投擲して顔にぶつけてバランスを崩させるとともに、右腕のコードを首に巻きつけて飛んできた流星への盾にした。

「あーあ……。勿体ない事した……」

スピアを消し炭に変えた事をぼやいていると、蹴り飛ばした奴がアームドギアを展開して突っ込んできたので、奴の手足をミラーデバイスで挽ぎ取って無力化する。手足が無くなれば、再生能力のないクローンは、最早死に体だ。

落下していく奴を尻目に、私は接近戦を仕掛けてきた17匹のイナゴへと突進した。

アームドギアで2人の胴を薙ぎ払い、3人目が上段から振り下ろしてきた扇を下から掬い上げるようにして跳ね飛ばし、更に心臓に光線

を撃ち込む。

動きを止めたところでその肩を踏み台にして、周りの兵隊よりも高い位置へと飛び上がる。すると1人のコピーにシヨルダータツクルを仕掛けられて、顔に右ストレートを叩きこまれた。

「ぐえっ」

こちらも負けじと脇腹にスラストで加速をつけた回し蹴りを喰わせ、そいつをくの字にひしゃげて吹き飛ばした瞬間に砲撃を叩き込まれた。

「うわっ！」

丸く広げたアームドギアを放り投げて後ろに下がり、急いで展開したミラーデバイスを足場に蹴り飛ばしながらジグザグに移動しつつ、再度取り出したアームドギアから光線を乱射して兵隊を散らし、もう一度接近する。

「一気に潰せたら楽なのに」

数が多いし、砲撃はNG。仕方ない。一撃離脱で徐々に減らすか。

スラストを噴かせ、アームドギアを構えて兵隊目掛けて突っ込む。自壊する寸前まで体を加速させて突入し、すれ違い様に敵の首や腰を斬りつける。一度に大人数を倒せるわけじゃないし、スピードが出過ぎているから旋回が難しい。そして得物がボロボロになるなど欠点が多いが、機動性で勝てる相手には有効だ。

こちらが突っ込んでくる事に反応が遅れた1人目の首を一気に斬り落とし、更に近づいてきた2人目の胸に得物を叩きつけて手離し、その勢いを利用して方向を変える。

正面から2人がかりで押さえ込もうとした兵隊に、アックスボンバーを叩き込んで首をへし折り、スラストを噴かせて方向を変えた所で後ろから光線が飛んできた。さっきのと同じ一点集中の威力が高めのものだ。

「ピンポイントに撃つ奴があるか」

たださっきのように止まっている相手ならばともかく、動き回っている奴を襲うのには向いてない。

「こうした方がいい」

アームドギアを取り出して円状に展開し、閃光を乱射する。バイザーの反応を見る限り、4人直撃したようだ。

「あと5人……、ん？」

近くにある人影は、パツと見た感じ4人しかいない。あと1人はどこ行った？ まさか……。

「エルフナインちゃんを捕まえに行ったのか？ 馬鹿な奴。うわツ！」

危うく敵の閃光が当たりそうになり、逆噴射で減速した所で四肢にコードを引つ掛けられて動きを止められた。残り1人が流星を撃つ準備をしている。動けなくすれば大丈夫と思ったのだろうけど甘い。振り解こうとすると兵隊が口を開いた。

「おい、あいつの命が惜しいなら動くな」

「エルフナインちゃんのこと？」

領いた兵隊に私はひとつ質問をした。

「捕まえて人質にでもするつもり？」

「状況を見れば分かるだろう」

その言葉と共に光の奔流が私目掛けて流れってくる。当たればきつと一思いに死ぬるような綺麗で、とつても躲しやすい光だ。

足のスラスターからミラーデバイスを射出して足のコードを切断して、直ぐそこまで迫っていた流星を躲し、両腕のコードを振り回して腕を吊っていた2人を光の中に投げ込む。

この様子を見て、砲撃手は別働隊に連絡を入れようとしていたが、その前に私が近づき顔を素早く蹴りつけた。

「どうだい、仲間は生きてたか？」

答えを聞く前に腰のサブアームに奴の頭を掴ませて握り潰し、後ろに来ていた生き残り目掛けて勢いをつけて投げつけた。あっさりと避けられてしまったが、飛行速度を殺すことができ、その隙を突いて懐に飛び込み、胸に右ストレートを叩き込み沈黙させた。

エルフナインちゃんが隠れていた場所に戻ると、機能停止した兵隊が地面に転がっていた。捕まえに行つたと聞いたときに、あの子が攻撃される心配はないと睨んでいたからこうなる事は予想できたけど、こうも予想通り行くと拍子抜けしてしまう。

「エルフナインちゃん、大丈夫だった?」

「1人だけだったからどうにかかりました。尤も人工心臓は破壊したので、そこだけは部品としては使えませんが、他は良好な状態ですよ」
「活け締めをしたような物だからね。こういう時だと、その義手は本当に便利だよ。さてと……、さっさと倒した奴を掻き集めて解体しない……」

早いところ回収しないと、敵さんに搔つ攫われてしまう恐れがある。手間は掛かるが、直す事はできるのだから。

「あの……、お疲れでしょうから解体は僕がやります。いつものように直ぐに片付けるクローン相手に、かなり手こずっていたようでしたし」

「いや、でも……」

「生きている相手でないのであれば、どうにかかりますから」

「そう? それじゃ、少しだけお願いしようかな……」

この後、損傷が酷くない個体をエルフナインちゃんが、酷い個体を私がそれぞれ引き受けて解体をした。使えるものが取れたのは、僅か3体分だけだったが、正規品が手に入っただけでも大きな収穫だ。

「忘れ物無い?」

「大丈夫です。そんな物自体無いですから」

「それもそうだね。じゃあ早いところ中国まで行こうか」

サイクロン号を北東の方角に向けて走らせ、機械人形の残骸が埋められた淋しい草原を後にし、再び砂漠の中に入る。

「太陽が昇り切る前に、水のある場所に行きたいね」

「食料があるともつと有難いですね」

「同感。エルフナインちゃんが栄養失調で倒れたら私も困るからね」

この子にもしもの事があれば、この先、生き延びる事ができるかも分からなくなるし、それに話し相手もいなくなってしまう。早く食料を見つけないけど、環境が滅茶苦茶になっている以上、それも難しいだろう。

「さっきの兵隊達が、サトウキビとかトウモロコシで出来ていたら良かったのに」

「バイオマスですね。確かにそれだと上手く工夫すれば、食料になったかもしれないね。ただそれが出来たとしても、未来さんを食べるような気がして抵抗があります」

「そう？ 私はまだそこまで気にしないけど。パン屋で売ってる似顔絵パンみたいな物と同じにしか見えないもん」

「あれよりもずっと生々しいです」

「鮮度はいいものね。あーあ、どこかに鮮度の良い野菜でも転がってないかなあ」

「転がっているなら喉の渇かないものが欲しいですね」

「例えば？」

「西瓜とか……」

「あらあらそうめんから西瓜に乗り換えたの？」

「材料がありませんから」

「竹なら何とか手に入りそうだけどね。そうめんを流すのに必要な」

「流すものが無くてはどうにもなりませんよ。根元の筍を取った方が賢いです」

「それもそうか」

「筍が敵に食べられてないといいですけど」

「聖遺物が物を食べるのかな？」

かなり前にネフィリムとかいうのが、響の左腕を喰い千切った事があったけど、あの他にそんな事できるのがあるのかな。

「僕の知る限りでは、この世界にそんな物はもう無かった筈です。ネフィリムが相手側に居なければの話になりますけどね。僕はいつか

の響さんのように左腕を喰いちぎられるだけで多分済むと思います
が、未来さんの場合はどうなるか……」

「胸をガブリとやられるかもしれないってことか。相手にしたくない
なあ。それにしても食事がしたい側が食べられるなんて、それこそ童
話の世界みたい。さあさあお腹にお入りくださいって」

「注文の多い料理店ですか。でもあれは食べられた訳では無かったよ
うな……」

「よく知ってるね」

理工学書や医学書以外の本を読んでいる所を見た事がないから、
てつきりこの手の話には疎いとばかり思っていた。

「ちよつとだけ艦内の図書室で読んだだけです」

「そういえばあの潜水艦にそんな場所あったね。行つた事無いけど」

「割と色々な本が揃ってましたよ。殆ど外に出ることが無いので、と
ても便利でしたね」

「へえ……」

それから丸4日掛けて、砂漠と草原を走り抜け、5日目の朝に白い
門が見えてきた。やっと茶色と緑色の光景から解放される。

「赤い旗が立てられてる。中国に着いたのかな……」

マシンを走らせて、更に近づくと門には中華人民共和国と書いてあ
る。どうやら中国との国境に辿り着いたようだ。

「エルフナインちゃん、中国に着いたよ。中央アジアを抜けられたよ」

サイドカーで寝ていたエルフナインちゃんを揺り起こしてマシン
から降り、背伸びする。長時間の運転で身体が草臥れてしまっている
から、この辺りで休んでおかないと次に控えている相手にやられかね
ない。中国を突破すれば、東シナ海を経由して日本に渡れるから強力
な魔人を配備しているのは、火を見るよりも明らかだ。仮にそうで無
くとも、国土の広い中国を西から東に渡らないといけないから、体力
を回復させておく必要があるのは変わらない。

「その西瓜も食べておいた方が良いよ」

「じゃあ切っておきますね」

一昨日拾った西瓜を、左手の人差し指と中指の間から取り出した大振りのナイフで切り分けるエルフナインちゃん。

「切り終わりましたよ。未来さんもどうぞ」

「ありがとう」

一切れ受け取って口に運ぶ。サクツと歯切れのいい音がして、甘さが口に広がる。甘い物を食べられるのは、ここが最後かもしれないからしっかりと味わっておく。同じ赤い物でも次に口に入るのは、戦いの結果次第で鉄の味をした生温かい物になるかもしれない。

「次も甘い赤い物を囓れるようにしたいな………。いや、しなきゃ」
しなければ、永遠に響を探し出せなくなる。そしてエルフナインちゃんの命も一気に危なくなる。それを忘れちゃいけない、いけない。

「私ってば現金だなあ……。ちよつと余裕ができると、直ぐに強気になっちやう」

「それで良いと思いますよ。人間ってそんなものです」

「そうかな？」

「懐が温かいと心配事も少ないでしょう。それと同じですよ」

「なるほどね。確かに今そこそこ温かいし」

「不安が少ないに越したことはないですから気にしない、気にしない。それよりも日の高いうちに今夜の寝床を探しませんか。サイドカーに座り続けていたものだから身体が痛くて痛くて」

「賛成。それじゃあ善は急げというし、早く行こうか」

「はい」

こうして私達の中央アジアの旅は終わり、現状では大陸最後の経由地である中国に入った。水も部品も有るし、数日前の砂漠と違ってほんの少しだけ余裕もある。

でもこの先、その余裕が一気に吹っ飛ぶような目に遭うとは、この時の私には知る由もなかった。

chapter 17. 龍

「夏なら嬉しいところに出たね」

「水も汚れていないようですし、涼むにはぴったりでしょね。しかし何もしなくても涼める今来たところで……」

「そこが惜しいなあ」

湖面をほちやんと魚が跳ね、水紋が広がる長閑な光景。こういうのは嫌いじゃない。水の中に何も無ければの話だが。

「ところでここが西安ってのは間違いない？ どう見てもただの湖にしか見えないけど」

「地図の上ではそうなってます。道路標示もそうなっていましたし」

「標示が出鱈目って可能性は？」

「それは無いです。道中でコンパスや太陽で方角を調べましたが、間違っただけじゃなかったと。所要時間も割り出していたものとはほぼ変わらなかったなので、ここが西安の可能性は高いです」

「ダムの中に沈んだ村みたいになってるわけか」

大昔の国際都市がチャーザー村みたいに扱われている。まあ、とんでもない色の水に覆われるよりかは遥かにマシかもしれない。飲み水に使いそうなくらいに透き通っているもの。

「それにしてもこの湖、一体どこまで広がっているのかな。見たところ東の方には陸地が見えないし、しかも南も元は山だったらしい島が見えるだけ。まさかとは思うけど、大昔のオリエントやヨーロッパみたいのに、中国も洪水で沈められたなんてことは……」

「過去に大洪水は起きた事があるらしいですよ」

「へえ……、それは知らなかった。でもここまで酷くはないでしょう？」

「詳しくは知りませんが……、まず無いでしょうね。ここまでのものは何らかのカラクリがないと……」

「そのカラクリに思い当たる物はある？」

「いえ……」

右手の指をひとつずつ折り畳み、かぶりを振るエルフナインちゃ

ん。知らないというよりかは、色々候補があるせいで正体が突き止められないようだ。

「このあたりの物ならば、共工の骨や霧露乾坤網などが思い浮かびますし、遠くのものならばポセイドンのトライデントも怪しいです」

「全部、見つかっているもの?」

「はい。これに見つかっていないものを含めれば、もう数え切れません」

となると、さつき拳がった例を大凡の正体として睨むべきか。しかしそれをどう料理すれば、こんなことを引き起こせるまでになるのか。

「他の街は水浸しになってるのかな」

「遠くの場合となればはつきりとは言えませんが、少なくとも周辺の街は水浸しになっているのだけは間違いないでしょう。あれだけの広さを持っている訳ですからね」

「東の果てや南の果てが見えないものね。西も陸地が見えないし」

鍋を火から下ろして、そこら辺の木から作った鍋敷に置き、2人中の魚をつつく。

「食料と水が手に入り易いのは助かるけど、これから先寝る場所がない可能性があるのは辛いね」

「少なくとも東シナ海までに一度は安心して休める場所が欲しいです」

「同感。ここから日本までかなりあるしね……。うつ……」

蒸した魚を一切れ口に放り込んだ時、いやに口の中が砂利つき泥臭さが口の中に広がった。酷い味だ。下処理を失敗したらしい。

「こ、これは……」

目に涙を浮かべながらも飲み込もうとするエルフナインちゃん。流石にこんな物を無理に食べさせる訳にもいかないので吐き出させ、水で口をゆすがせた。

「ごめん。変な物食べさせちゃって……」

「いえ……。ただ今度から手の込んだ物は僕に作らせてください

……」

「わかった。その方が良さそう……」

翌朝、湖の中に潜り込み、街ごと遺跡になってしまった西安を調べてみることにした。ここに原因があるのかどうかは分からないが、大昔の首都でもあるし、それにこの辺りに聖遺物関連の研究施設があったらしいから、覗くだけ覗いてみようと考えたんだ。

そこで来るまでに拾った宇宙服に身を包んだエルフナインちゃん
と酸素ボンベを背負い、水の中に入った訳だけど、これが中々に大変だ。何せ行き先は数百メートルも下にあるし、人一人を連れて行かないと手を取らないから手を引くのも大変だ。

「これで歌を歌わなきゃいけないかつたらもつと大変な事になってた」

この上そこまでやらされた物ならもうてんでこまいだ。

そういや響達はこういう時どうしてたんだろう。私みたく都合の良い物があるわけじゃないから、やっぱりそこそこ苦労してたんだろうか。

「ギア自体が気が利くから心配いらんか。詳しくは知らないけど、海向きの変化もするらしいから」

少なくとも今の私のものよりも変化はしているだろう。足にスクリーンがつくだけなんてことはないはずだ。

川底に近づくと、やけに物が少ないことに気がついた。

建物は穴が空いて崩れかけた長安城の城壁くらいしか残っておらず、他は基礎を残して無くなっていった。柱も屋根瓦もコンクリート片も残っていない。無事なのは地面にへばりついている道路くらいな物で、引越し前の家のようにならんだうになっている。一体どこに片付けられてしまったのか。

しかも変化があったのは、元は地上だった場所だけじゃなかった。「汚水の類は全て洗い流されたようですね」

「うん。しかもゴミ一つ落ちてない。飲み水にしても何の問題も無いわけだ」

元は川底だったであろう場所は、砂利と石以外何も落ちていない。人間が機械を引っ張り込む前にまで戻っている。

「この分だと、聖遺物も何処かに流されていそうだね」

「その可能性はあります。でも一先ず探してみないことには」
「確かに早計と言えば早計か」

意外な事に施設は砂に埋もれていて無事だった。だが中身まではそうもいかなかった。

「うわあ……」

保管庫らしき場所には、何にも残っていないなかった。もつと悪い事に明らかにこじ開けられた跡があるケースが何個も転がっている。

「幾つか既に持ち去られたようですね。この分だと……、ちよつと待ってください」

腕を引っ張られて足を止めると、足元に茶色い物があった。掘り起こしてみるとそれは結び目の付いた縄で、水の中に浸かっていたにも関わらず、特に腐っている様子もなかった。その証拠に引っ張っても全く千切れない。

「単なる縄じゃなさそう」

ひよつとすると、西遊記の金角が持っていた縄かもしれない。安直な発想だけど、中国と縄だとそれくらいしか思いつかない。

「仮に違ったとしても何かの役には立つだろうし、心配はいらないか……」

ともかく収穫があったのは助かった。少なくとも魔人側の戦力がいきなり増えることは防げたと言えるから。

結局施設に残っていたのは、正体の分からない縄だけだった。他は何処かへ流されたのか持ち去られたのかそれは知らないが、何も見つからなかった。

尤も縄のように起動せずにいるだけで色々あるのかもしれないが、エルフナインちゃんの活動限界時間が近づきつつあるので、ここで引き上げる事にした。

「縄は持った?」

「この通り」

「それなら……、ちよつと待った!」

川底に出ようと頭を出したとき、物凄いスピードで砂嵐がこちらに迫ってくるのが見えた。何か大きな物がこちらに近づいてきている。しかも正体こそ不明だが、聖遺物という反応が出てきた。

急いで入り口に潜り込み、エルフナインちゃんと一緒に外から死角になる場所に隠れる。それから暫くもしないうちに、大量の土砂とともに透明な薄い物が何枚か入り込んできた。

「魚の鱗?」

指で触った感触はそれに近いが、それにしても大きすぎるし、何より魚のそれよりも少し滑らかだ。

「これなんだろう?」

「魚でも蛇でも無いと思います。もつと大きなものかと……」

「だよ。大きな鱗を持っていて、しかも水の中にいる物といえば……」

あれくらいしか思いつかない。

「十中八九未来さんの予想通りだと思いま……」

エルフナインちゃんの言葉が終わる前に、突然天井が突き破られ、黒い龍がこちらに突っ込んできた。

「ごげッ」

咄嗟に突き飛ばしたからエルフナインちゃんは無事で済んだが、私は酸素ボンベごと壁に叩きつけられた。刺さったボンベの破片とひしゃげた機械が食い込み合い、声を出せないほど痛い。しかも押され続けているから傷はますます酷くなっていく。

急いで腕輪を起動させて目玉に剣を突き刺して拘束から逃れ、伏せていたエルフナインちゃんを引っ張り陸を目指す。だがさっきのダメージと人1人連れて移動しているせいで全力を出せない。

おまけに相手は龍。水の中を早く動けるのは、どう考えてもあっちの方が。

「う……わ……」

まだ水面まで距離はあるのに、もう追いついてきた。牽制のために銀玉をばら撒こうにも目が霞んでコントロールが取れそうにない。

「し……か………ない」

エルフナインちゃんを体の前に引き寄せてから、龍目掛けて砲撃を叩き込む準備をする。無論、チャージする時間なんてないから流星の8割ぐらいの威力しか出せないが、この際構やしない。

追っかけてきた龍に向かって光線をぶっ放す。

するとこちらの狙い通りに爆発が起こり、私を水の外まで吹き飛ばした。勿論、エルフナインちゃんもだ。

気を利かせてスラストに変わった脚部で逆噴射をして着陸し、抱え込んでいたこの子を降ろしてからうつつ伏せに地面に倒れ込む。水蒸気爆発なんか起こしたからやっぱりタダじゃ済まなかったらしい。痛む範囲が広がっている上に、ギアも解除されてしまった。

「ああ、これは酷い……！」

早くも宇宙服を脱ぎ捨てたエルフナインちゃんが、私の身体の応急処置を始めていた。

「大丈夫……？」

「未来さんに庇っていただいたおかげでなんとか。左手が少し壊れてしまいました。これくらいなら大したことありません」

「良かった……。いづつ！」

やり方がやり方だから不安だったが、どうにか五体満足で連れ帰ることができたようだ。

「僕の事を大事にさせていただいているのは有り難いのですが、ご自身の事ももう少し大事にしてもらえらるともっと有り難いです」

「一応、大事にしているつもり……」

「危うく大惨事になりかけています。下手をすれば心臓が壊れていた可能性も……」

なるほど、そうなら確かに大惨事だ。

「ごめん。ちよつと考え無しに動き過ぎた」

「いえ、今回は他にどうしようもなかったですし……」

エルフナインちゃんは両手を振って、気にしなくていいというジェスチャーをしているが、流石にやり過ぎたつてのが分かる。

「そういえばこの世界を発つ時に響と「無茶をしない」って約束していたっけ。もうかれこれ数え切れないほど、それを破っている訳だし、「無茶を控えて」なんてもう2度と口に出せそうにないや。だつて……。」

「エルフナインちゃん、応急処置は済んだ？」

「いや、まだです。半分も済んでません」

「そう、まあいいや。ちよつと縄抱えて下がってよ」

「戦う気ですか?! 無茶ですよ!」

「しようがないじゃない。あれを見なよ」

さっきの黒い龍が水飛沫を上げて姿を現し、双眼で此方を睨め付けている。どう見ても何もしてこないようには見えない。

「見逃してくれると思う?」

近くにあった木の枝を杖代わりにして立ち上がり、迎撃の為に再度ギアを装着する。

「せめてもう少しだけでも……」

「修理時間なら稼げそうにない」

地面から少し身体を浮かせ、散弾銃を構えるようにアームドギアを抱える。ダメージの影響で体が軋んで目も霞むが、我慢して龍の顎門を外さないように狙う。

「エルフナインちゃん、下がってなさいな」

その言葉が終わるか終わらないうちに、龍は私目掛けて突進してきた。

即座に砲撃を加えてのけ反らせ、右下に回り込んで両腕のワイヤーを角に引っ掛け、一気に真横にある地面へと引っ張る。

だが大してダメージを負っていない龍と私とでは、かけられる力には天と地ほどの差があるのは火を見るよりも明らかで、逆に振り回された挙句、ワイヤーを解くのが遅れて山の斜面に叩き付けられた。草がクツションになってくれたが、それでもきつい。足が壊れてしまっている。

そんな私を龍は尾で叩きのめし、高度を取ってトドメにのしかかろうと飛び込んできた。

「こなくそー！」

苦し紛れに龍が持っている宝珠目掛けて、取り出したアームドギアを投げつけた。すると割れこそしなかつたものの、鈍い音を立ててヒビが入った。

それを聞いて龍が動きを止めた。どうも壊されるとまずい物らしく、表情が少し強張っている。

しめたと思いい追撃を加えようとする、慌てた様子で湖の方角へ飛び去ってしまった。

「助かった……?」

スクラップ同然の状態で地面に寝転がる。これで当分の間は大丈夫だろう。

「未来さんー！」

安心していると、青い顔をしたエルフナインちゃんがこちらに駆け寄ってきた。今日で2度目の光景だ。

「生きていますか?！」

「ご覧の通り……」

どうも側から見るとそのくらい酷い状態らしい。現にこの子の色の失いようと言ったらただ事じゃないもの。

どうやら人に言われないと、自分の体の状態すら把握できなくなっているようだ。

「そのうち生えてくるから……、慌てなくても」

「そのうちが来る前に寿命が来ます！」

胸の中の人工心臓を弄りながら答えるエルフナインちゃん。心臓が止まりかけたのかな。それとも原子炉がイカれた?

「心臓が酷く損傷してます。配線がぐちゃぐちゃになっていて、一部は千切れてます。生きてるのが不思議なくらいです」

「あら……」

「何とか直る範囲だからよかつたものの……」

死にかけていたことも気づかなかつた。この有様を見て慌てない

人間がいるはずもない。

「心配掛けたね……」

「ええ。でもありがとうございました。未来さんが上手く立ち回ってくださったおかげで安全な場所に逃げ込む事ができました」

「そう？　なら良かった」

「たださつきも言ったように、もう少し自分を大事にしてください。サイクロンを操縦して脱出することも出来たんですから」

言われてみればそうだ。サイクロンの足なら建物のある場所まで逃げる事ができないわけでもなかった。

「どうも追い払う事に躍起になり過ぎてたね」

「それで命を落とせば何にもならないです。響さんを探す事もままならなくなりません」

「痛いところを突くね」

響の事を出されると、死にかけの状態で無茶をしにくくなってしまふ。魔人を追い払うのもそうだけど、消息の分からない響を見つけるのも大事なことからだ。

「今度から死にそうな時は無理しないことも頭に入れておくよ」

「お願いします」

守れるかどうか怪しいところだけど、約束はしておこう。少なくともそれが頭の中にあるだけで、今までよりはブレーキがかかり易くなるはずだから。

chapter 18. 頭が9つ

「つまりあれの正体は水の神様？」

「はい。洪水を引き起こす事で有名です」

私達を襲った龍は、前にも名前が出てきた共工だった。

エルフナインちゃん曰く、数千年も前に昔に中国で大暴れした水神で、不周山という山を崩して空を傾けたのだとか。通りで突進した時に身体がああも壊れた訳だ。

ただこの共工は、別に不死身とか特定の方法を用いないと倒せないとか、そんな面倒な相手ではないらしい。実際、何度も暴れてはその度に倒されていたそうだ。

「どうも宝珠が弱点らしいから今度はそこを重点的につくことにするよ」

「宝珠を傷つけられて撤退したのですよね。一つ確認したいのですが、龍本体に何か変化はありましたか？」

「見るからに狼狽してはいたね」

「そういう事ではなく、弱ったり強くなったりといった身体的な変化があったかどうかを教えてください」

龍本体のダメージのことか。そういえばあの龍、慌ててはいたけどそれ以外は特に何ともない様子だった。

「そういえば、逃げ出した時のスピードと私を振り回した時のスピードは、大して変わってなかった」

「だとすれば宝珠を壊しただけでは、共工は倒せない可能性がります。ただ他の弱点が現状では分からない以上、まずは宝珠を狙うのがいいでしょう。しかし」

「しかし？」

「今回のように宝珠を壊される度に逃げられたのでは、話が進まなくなるかもしれません」

「ああ。それはありうる」

確かに一時凌ぎが何度も続くだけでもどうにもならない。それに生かしておいて、後々他の魔人に加勢されても困る。倒すのは必須条件

だ。

「西洋のお話に出てくるドラゴンなら何処そこに弱点があるって話は聞くけど、龍は聞いたことが無いから分かんないよ。せめて捕まえるなりなんなりしないと」

「それでしたらこの縄は有効だと思います」

その言葉とともに差し出されたのは、湖底に落ちていた縄だった。普通の縄には見えないけど、龍を縛り上げるには小さ過ぎる。

「水蒸気爆発で、保管してある聖遺物の記録の一部が浮き上がったんです。それに照らしたところ、これは縛竜索というものらしいです」
「名前の通りの効果があるの?」

「はい。しかも龍以外の物が相手でも効果はあるそうです」

「便利だね」

私が考えていたものとは違うが、効果は似たり寄つたりのようだ。早速、今度使ってみる事にしよう。

その夜、山の頂上で寝ていると北の麓からガサガサと妙な音が聞こえた。

鹿でもいるのかと思い、寝惚け眼で様子を見に行くと草木が揺れる音とともに重たい物を引き摺る音が聞こえた。熊が得物を捕まえてこつちに來ているのかもしれない。

「どうしたんですか」

「動物でもいるんじゃない?」

寝惚け眼でこちらに來たエルフナインちゃんと一緒に音のする方をじつと見る。

熊だつたら久々にお肉が手に入ると思い、腰掛けにしていた岩を抱えて投げ飛ばせるように準備をして待ち構えていると、メキメキと木の幹が折れる音がここから100メートルほど先から聞こえてきた。硬いものを齧る音です。

「熊じゃないね。木をへし折って食べてるみたい」

「そもそも動物じゃないと思います。言うまでもないですが、人間でもないでしょうね。木に何かを叩きつける音も引き切る音もしてい

なかったですし」

「確かに絞めあげるような音だったね。これは逃げた方が悪い？」

「傷は大丈夫ですか？」

「塞がってる」

「なら暫く様子を見る事にしましょう。逃げるのはそれからでも遅くないかと」

この意見に同意して、音の正体を確かめる事になった。でも逃げた方がずっと良かったとは、この時の私には知る由もなかった。

音が30メートル近くにまで来たところで、岩を思い切り投げつけた。

「ぎゃっー！」

「いつ?!」

明らかに人の悲鳴が聴こえたので血の気が引いた。隣に腰掛けているエルフナインちゃんも同様だ。昨日調べた時、この辺りに生きた人間がいなかったが、もしかすると見落としていたのかもしれない。「ち、ちよつと行ってくるー！」

ぶつけた相手の様子を見に茂みに入ると、血がついた岩の横に細長い物が倒れていた。体にしては細すぎるし、まず四肢がない。あるのは鱗だ。

それだけならまだ良かったが、決定的におかしかったのがその生き物の頭だった。人間の物に似ているんだけど、それがいっぱい一つの首から花束の花みたく生えている。

「あつ……、あつ……」

怪我させた相手が人間じゃなかったから安心したが、それ以上に目の前の怪物の不気味さに思わず後ずさる。しかも此方に気づいて、鼻が曲がるほどに臭い血を垂らしながらじーつと9つの頭についた目で睨みつけてくるのだから堪らない。

「ぎゃあああああ!!!!」

悲鳴を聞きつけて茂みに駆け込むと、未来さんが蛇の怪物と戦って

いました。9つの頭と辺りを漂うなんとも言いがたい臭いから考えるに、正体は共工の部下の相柳のようです。部下まで復活させられていたとは思いませんでした。

ただ見たところ、相柳はそこまで強くはないようです。シエム・ハの腕輪を使っていない未来さんに押されています。体のあちらこちらが穴だらけ血だらけでされるがままに……、されるがまま？

「いけない！ 未来さん、下がって！」

「どうしたのさ?!」

「そのままでは毒で手が腐ります！」

僕の言葉を聞いて未来さんは直ぐに相柳から離れました。手は血で汚れています。炎症などは幸いな事に起こしていないようです。

「あれ、毒蛇？」

「ええ、かなり強力な毒を持っています」

「知ってたなら早く教えて！」

僕に文句を言いながらもミラーデバイスを3枚射出し、飛びかかってきた相柳に牽制攻撃を加えながらサイクロンを呼び寄せる未来さん。こういう事は他の装者の方に引けを取らないくらい手慣れています。

「暫くそれに乗っかっていて！」

僕を乗せたサイクロンを遠隔操作しながら未来さんは水辺を目指しています。毒を早く洗い流したい為か、心なしか運転が乱暴です。

ですがメチャクチャな走り方をしている影響で、相柳は追いつけずにいるようですし、普通に逃げるよりも不思議と安心できます。

山に何も起こらなければの話ですが。

あと少しで湖というところでサイクロンが大きく揺れ出し、エルフナインちゃんが放り出された。

慌てて降下して私がクツションになり事なきを得たが、左腕を擦りむいて毒が入り込んでしまった。この分だと腕も遅かれ早かれダメになると見越した方がいい。

「ちよつと勿体ないが……」

ミラーデバイスを追加で取り出し、丸鋸代わりに使って左腕の前腕を切除する。一先ずこれで安心だ。

「それにしても今度は何が……?」

エルフナインちゃんが口を開く前にその答えがやってきた。山が地響きを立てて揺れ出したんだ。

「こんな時に地震まで……!」

しかも土砂崩れを起こし、湖へと地面が崩落し始めたのだからたまらない。それに毒がついている手では、エルフナインちゃんを庇うこともままならない。

さあ、どうしよう。

「エルフナインちゃん、こうなったら腹を括って!」

結局、私が取った手段は水の中に飛び込む事だった。幸いと言っていいのか分からないが、水位が増しているから飛び込んでも問題は無いだろう。この子も飛び込んでからそのまま泳ぐことぐらいできるし、心配はない。

「未来さんこそその体で大丈夫ですか?」

「なんとかなる! それツ!」

さっきの毒蛇が迫ってきたので、急いで湖へと飛び込む。エルフナインちゃんも問題なく水の中へと避難し、岸から少し離れた所まで泳ぎ着いた。

「一先ず手の汚れは何か……」

安心している余裕は無かった。共工が水の中から襲いかかってきたからだ。おそらく山を崩したのもこいつの仕業だろう。

「少しは休ませろツ!!」

腕輪を起動させ、放物線を描くようにして空中へと一旦逃げつつ、水面ギリギリで砲撃を顔面に喰らわせてのけ反らせる。こいつはどいうやら体当たりくらいしか攻撃手段がないらしく、こちらへと突っ込んでくるから反撃はしやすい。だがその反面、とんでもないタフさを持っている。その証拠に砲撃を真正面から喰らったのに、大して堪えている様子がない。殆ど溜めていない抜き打ち同然の威力だったか

らかもしれないが、それでも暁光並みの威力はある。それを受けてもピンピンしてる。

「ワンパターンでも結構キツイな……、これ」

このままだとキリが無い。あれを使ってみるか。

共工を可能な限り空中に誘導し、サブアームに持たせておいた縛竜索を右手に持ち替えて投げつけるタイミングを見る。左腕を生やすことも勿論怠らない。

空中へと移してからは、今度は山へと近づける。水中だと向こうの土俵だし、空中だと機動力で向こうに負ける。しかし山の中なら向こうにそこまでアドバンテージはない。崩したところで何か起きる訳でも無いからだ。

「あの毒に浸ればもつといいのだけれど」

そう独り言ち、山の上空まで来たところで体を捻り、目の前にいる龍目掛けて思い切り縛竜索を投げつける。すると共工をすっかり囲んでしまうほどの長さに広がり、その体に絡み付こうとした。どうやら伊達に龍を縛る縄を名乗っている訳では無かったようだ。

「これなら……、えっ?!」

だが共工は全く慌てず、なんと右手の宝珠を突き出してメジャーのように縛竜索を巻き取ってしまった。捕まえるまでの効果はまさか無い?!

「ぐぐつ……」

しかし縛竜索の効果自体は本物だった。宝珠から投げ返されたそれが、私を縛り上げた事が何よりもそれを証明している。

もがけばもがくほど締め付けが強くなるし、噛み切ろうとしてもそれは同じ。出力を上げられないように口にも縄をかけられているし、これじゃ手の出しようが無い。

折詰弁当のようにならげられた拳句、地表目掛けて投げつけられた。そしてそこには……、さっきの毒蛇が作った毒沼がある。今も口から毒を撒き散らしているから間違いない。

毒沼に頭から落ち、更に蛇がのしかかった事で全身が毒に漬け込まれた。肌と目から何かが剥がれて、喉と鼻の穴と耳の孔が削れていく感触がする。なんとも気持ちが悪い。

更に胴体を締め付けられ、フレームが軋み出す。ニシキヘビみたいはこのまま飲み込むようなことはしないだろうが、このままだと噛みつかれることはありうる。しかし下手にもがこう物なら縛竜索に締め付けられて余計に面倒な事になる。藪の中にいた蛇の頭を割ったせいで藪蛇か。つまんないの。

下らない洒落が考えつくほどに頭が回り出したが、知恵は相変わらず出ない。難しいことを考えようにも、体と同じくその辺の機能がボケている……。ああ、そうか。

右腕の前腕を相柳の胴体に突き出し、横風に斬り払う。さらに傷口目掛けて銀玉を撃ち込み、一気に身体を銀に変えた。

それと同時にベキヤツと鈍い音が体からした。顔のところもおかしな感触がする。これはフレームがイカれたか。まあ、いい。体が壊れようがどうなろうが、今の私にとっては大した問題じゃない。

腕輪からぶっ放した光線を推進力にして身体を浮き上がらせ、その隙に銀玉を投げ込んで池を銀に作り替える。土よりも硬い場所に叩きつけられることになるだろうが、毒沼よりかはマシだ。

ひんやりした銀の池に体が叩きつけられる。運の良い事に大して壊れていない。

早いところ口の中の毒を吐き出したいが、足がもつれて立てない。いや、そもそも足を縛り上げられているからまともに歩けない。

困り果てていると背中に四角い物を貼り付けられ、縛竜索が解けた。

誰が解いてくれたのか見ようとした時、体に水をかけられ、口の中に更に注ぎ込まれた。

「ぐえッ、ぺっぺっ……………」

「声は出せそうですか？」

「ど…………、にか……………」

エルフナインちゃんの質問に掠れた声でかろうじて答える。毒でスピーカーの音質が悪くなっているのか、随分と声が低くなっている。男装すればそこそこ誤魔化しが効きそうな声だ。

「皮膚のほとんどが爛れている上に、一部は骨組みが丸見えになっていますね。しかも背骨と腕の骨が完全に折れてしまっている……」

「ひっ……どい……ね。なお……る……かな？」

「やるだけやってはみますが、サイクロンに積んでいた資材が無事であれば、応急処置くらいしか……」

「お……ね……がい。うごかせ……たら……大……じょう……ぶ」

皮膚が溶けたところは、全部エルフナインちゃんお手製の強化ガラスを貼り付けて人工皮膚の代わりにした。中の機械が一部剥き出しになり、模型のスケルトンモデルのような見た目になったが、動かす分には問題ない。

「思ったよりも馴染んでるよ。ありがと、エルフナインちゃん」

「どういたしまして」

「髪の毛についた毒や穴という穴に入った毒も洗い流せたし、今のところ言うことなしだね。ただ……」

撫で付けた髪は紫色に変色し、声も前よりずっと低くなった。おまけに身体はあちこちがガラス張りで、顔つきも随分とマズイものになってしまった。

「ここまで変わってしまうと、響に気づいてもらえるか怪しいな……」

「他の方ならともかく、響さんでしたら心配ないと思いますよ。それよりも未来さん」

「何?」

「何をされても痛くないって本当ですか?」

「うん。全然」

昨日心臓が潰れた時からだが、神経が死んだのか何の痛みも感じなくなった。常識外れの攻撃を仕掛けてくる連中を迎え撃つのは良いかもしれないが、これはこれで困った事がある。

「これじゃあ自分が死にかけてるかどうかも分かりそうにないや。ど

うしよう?」

響とは違つて、体からのサインを受け取ることはできない。昨日の約束を守ろうにも守れなくなってしまった。

「どうにか痛覚を復活させられないかな?」

「それは専門家に診てもらうしか……」

「いつそ身体へのダメージもないように出来たら良いのに。白乾兎みたいに」

魔法の薬で不死身になった魔術師みたいになれたらまず壊れる心配がないからいいのだけれど、そんな都合の良いことができるはずはない。

「エルフナインちゃん、ちよつとの間でいいからさ、私を不死身にするこつとてできない?」

「出来るなら最初からしています」

「うん……。そうだろうね……。じゃあこの馬鹿になった身体で死にかけない程度に戦わなきゃいけないのか……。難しいなあ……」

「話題を変えましょう。先程の戦いでは縛竜索が通用しなかつたようですし、他の攻略方法を考えることにしませんか」

「ああ、それが先決だ。そつちを先に考えようか」

煮詰まつたところで話題が切り替わつた。だがこちらはこちらで簡単に答えが出る問題ではない。

「あの宝珠に縄が吸い取られて、そつくりそのまま投げ返されたんだ。だからあれをなんとかしないと、折角の縛竜索も何の役にも立たない」

「ですが宝珠を壊されると、共工は直ぐに逃げ出してしまふ……」

「しかも追いかけても間に合いそうなスピードじゃないでしょ。おまけにかなりタフだから後ろから砲撃してもそう簡単には倒せないだろうし」

「どうしても共工を何とか足止めする必要があると……」

「それか一寸法師みたいに身体の中に飛び込んで中から破壊するかだ。でもさ、どこを潰せば良いか分からないのが難点だし、手こずつ

ている間に連中の本拠地にでも移動されようものなら、仮に倒せても……」

「龍の皮に包まれて蒸し焼きにされるのがオチと……。すごく不味そうですね。ホムンクルスとサイボーグの蒸し焼きなんて……」

「人喰い族が逃げ出すレベルで食べられる箇所がないものね。私たち、材料が材料だから……」

はてさてどうしようか。龍を何処かに串刺しに出来たら便利だけど、残念ながら杭になる物も代わりになる物も持っていない。翼さんの天ノ逆鱗がここでは適役なのだけれど、その翼さんはもういない。

「土砂崩れを起こして生き埋めにするとか出来ればいいけど、あの龍にとつては山を崩すなんて訳ない事でしょ？」

「ええ、それに関してはその通りです」

「土砂を銀に変えて押さえつけてみるってのはどうかな？」

「重さは申し分ないですが、硬さが足りないかと……。それに沼の液体と山一つでは変質させるスピードもまた違うと思います」

「変わる間に逃げられちゃうってことね……」

どうも良い案が出ない。良さそうな物も穴があって現実味がない。どうしたものかな。